

A・A・ジュダーノフ記念レニングラード国立レーニン勲章大学⁽¹⁾

A・A・ホロドーヴィチ⁽²⁾

朝鮮語文法概要

ソ連文化省高等教育総局により大学用教材として承認

外国語文献出版所

モスクヴァ 1954

第1部

翻訳者から

翻訳にあたり次の点に留意されたい。

- 1) これは朝鮮語の専門家の便利に供するものである。
- 2) 朝鮮語の例文に付けられた転写, 訳は, 必要ある場合を除いて, 省略する。
- 3) 転写はキリル字をラテン字に直す。
- 4) ロシア語の術語はできるだけつけない。
- 5) できるだけ忠実な逐語訳をめざしたが, 術語や表現は朝鮮語学の伝統に従って改めたところがある。
- 6) 理解を助けるために, できるだけ訳者による注をつけた。1は原著者注, (1)は訳者注である。文中の〔注〕も原著者によるものである。
- 7) 原文の太字(ボールド)と隔字部分はゴシック体で表す。
- 8) 意味は< >内に記す。
- 9) []内は翻訳者が補ったものである。漢字語の漢字は[]の中に補った。

菅 野 裕 臣

序 文

この著述は現代朝鮮標準語の記述文法である。文法の導論となるのは朝鮮語音声学概要であるが, ここに横たわるのはレニングラード国立大学アカデミー会員 L・V・シチェルバ⁽³⁾記念実験音声学研究室で著者が L・R・ジンデル⁽⁴⁾准教授と共同で行った実験研究による結論である。

『朝鮮語文法概要』は著者がレニングラード国立大学朝鮮フィロロギー講座⁽⁵⁾で行った講義に手を加えたものである。この書は東洋学系諸大学の上級生用及び大学院生用と教師用として予定されている。この著述は朝鮮語の満洲・ツングース語群との予想される親縁関係によりアルタイ語群の研究者にもある種の関心となろう。

書名から分るように、この書は現代朝鮮文法の概要であり、すなわち現代朝鮮語の文法構造の基本的事実だけを叙述するものであり、朝鮮語を詳細な点にいたるまで理解させることを自任するものではなく、朝鮮語文法のすべての理論的な諸問題、朝鮮語史に言及するものではない。この空白を埋めるためには、著者はこの著述の後に朝鮮語形態論及び統辞論の諸問題を扱った特別なモノグラフを発表することを予定している。

朝鮮語文法のいくつもの問題の理解と叙述は多くの点で、朝鮮語学者集団の編纂した 1949 年刊行の朝鮮語文法¹で得るものとも、有名なフィンランドの言語学者 G・ラムステットの筆に属する朝鮮語文法²で叙述されたものとも異なっている。勿論著者はこの 2 つの著述に含まれる肯定的で価値あるものはすべて利用した。

材料をよりよく分りやすくするために著者は用例を朝鮮の中学校の教材から取った。

著者は 1950 年代のソヴェト言語学で行われた言語学上の討論を考慮に入れ、また言語学の諸問題を扱った I・V・スターリンの著述⁽⁸⁾を考慮に入れて自己の新しい著述を組み立てた。それゆえこの『朝鮮語文法概要』は著者がすでに 1937-38 年に発表した 2 つの著述とは著しく異なる。これらの著述は、たいして大きいものではないが、材料が貧弱で、さらに上部構造としての言語の性質についての不正確な理解と直接結びついた一連の方法論上の誤りを含んでいるので、この著述が出ることによってそれらを用いる必要はなくなるのである。

A・ホロドーヴィチ

音 声⁽⁹⁾

朝鮮語の音声構成

言語の音的側面の研究は言語学の重要な任務である。どの言語の研究も、言語がどのような音声において単語及び単語からなる文を具象化しているかから始めなければならないのである。

人間の音声は単語の物質的基礎である。音声は意味の識別と単語の意味の理解を助ける。それゆえ人間の言語の音声は単語を作らない他のすべての音（お

ん)とは異なり音素と呼ばれる。各々の音素は単語の中でなんらかの位置を持つ。例えば, **m** は朝鮮語の単語만 **man**<万>では頭の位置を占め, 単語밤 **pam**<夜>では末尾の位置を, 単語가마 **kama**<釜>では中間の位置を占めている。単語における音素の位置は, アクセントある位置, 母音間の位置, 語末の位置等々のように非常に多様である。位置によって各々の音素は変容し得, 変形し得る。変種⁽¹⁰⁾とは単語における音素の位置に条件付けられた音素の変り種である。

各々の言語の音声構造はそれぞれの特殊性を持っている。これらの特殊性は, 第 1 に, 音素の構成(質と量)に現われる。例えば, ロシア語には音素 [z] があるが, 朝鮮語にはない。逆に, 朝鮮語には特殊な後舌の [ŋ] があるが, ロシア語にはない。これらの特殊性は, 第 2 に, 音素の変種に現われる。古典的な例としては **l** と **r** がある。ロシア語ではこれらは異なる音素だが, 朝鮮語では同じ音素の変種であり, 語末では朝鮮語では **l** のみを発音し得(ロシア語 ‘стар’ **star**<古い> [短語尾男性単数] 及び ‘стал’ **stal**<成った> [男性単数] 参照), 母音間では **r** のみを発音し得る(ロシア語 ‘варить’ **varit'**<煮る> [不定詞] 及び ‘валить’ **valit'**<押し倒す> [不定詞]) 等々のように。

このことからどの言語の研究でも音素だけでなくその変種も知らなければならぬことになる。

現代朝鮮語には 39 の音素, すなわち 19 の子音音素, 8 つの母音音素, 12 の二重母音類 **diftongoid** がある。

§1. 子音 次の表は朝鮮語の子音音素の構成を示すものである³⁽¹¹⁾。

調音法		調音点	唇音	前舌音	中舌音	後舌音	咽頭音
閉鎖音	噪 音	純粹音	p,pp,ph	t,tt,th		k,kk,kh	
		破擦音			č, čč, čh		
	鳴 音		m	n		ŋ	
摩擦音	噪 音			s,ss			h
	鳴 音			l			

閉鎖噪音は弱音 **p, t, č, k**, 有気音 **ph, th, čh, kh**, 強音 **pp, tt, čč, kk** に分かれる。弱音は母音間, 母音と二重母音類の間, 鳴音の後ろの位置で有声音 **b, d, dž, g** として発音される。語末と鳴音 **m, n, l** 以外の任意の子音の前では弱音 **p, t, k** は内破音(すなわち破裂なしの閉鎖音) **p, t, k** として発音される。母音あるいは鳴音と弱音 **p, t, č, k** の間に形態論的境界があれば, 弱音はしばしばそれらに対応する強音に替わる (**p - pp, t - tt, č - čč, k - kk**)。有気音ははっきりした気音とともに発音される。強音はそれらに対応する弱音よりも強烈に発音される。さらにその発音は多分声門閉鎖, いずれにせよ声門の補足的な動きを伴う。弱音と比

較すると強音はずっと長く、語中では長さがその基本的な性質である。有気音も強音も語頭及び語中で子音の前以外でのみ可能である。語末及び語中で子音の前ではすべての有気音と強音 **kk** はそれらに対応する内破的（破裂なしの）発音の弱音に替わる（**ph - p, th** 及び **čh - t, kh** 及び **kk - k**）。

摩擦噪音 **s, ss, h** は弱音 **s**、強音 **ss**、声門音 **h** からなる相互に関係ある音のグループをなす。語中での子音間及び語末での位置では **s** と **ss** は **t** と交替し、この **t** は内破的に発音される。子音の前の **h** は不可能である。しかし正書法では多くの場合有気音 **th, kh** は **ㅎ** **ht**、**ㅋ** **hk** と書かれる。

閉鎖鳴音 **m** と **n** はロシア語の **m** と **n** に対応する。後舌音 **ŋ** はロシア語にはない。それは英語の単語 **long** における **ng** のように発音される。閉鎖鳴音 **m** は単語のどの位置でも可能である。**ŋ** は語末と音節末でのみ可能である。**n** はどの位置にも現われるが、拗母音の前（すなわち頭音の **y** を伴う二重母音類の前）及び **i** の前の **n** の口蓋化された変種は語中でのみ可能であり、語頭ではこの **n'** は落ちる（**nje** は **je**、**ni** は **i** となる等々）。語末では閉鎖鳴音は内破的である。

摩擦鳴音は **l** のみである。その基本的な変種は **l** と発音され、それは語末及び **h** 以外の子音の前でのみ可能である。その他の変種は **r** と発音され、それは母音間及び子音 **h** の前で可能である。語頭ではこの子音は不可能である。借用語では語頭の **l** あるいは **r** は、もしも非口蓋化音であるならば、朝鮮語では **n** として反映される。語頭での口蓋化された **l** あるいは **r** は朝鮮語で反映されることはまったくあり得ない（**lje** は **je**、**li** は **i**、ただし **lon** は **non** のようになる等々）。

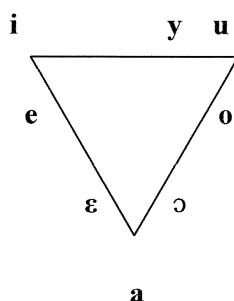
p, pp, ph, k, kk, kh, m, n, h, l のような子音系列は非口蓋化音⁽¹³⁾と口蓋化音⁽¹⁴⁾の変種を持っており、非口蓋化音は非拗母音の前で、口蓋化音は拗母音の前（すなわち頭音の **y** を伴う二重母音類の前）で現われる。

2つの子音が並んでいると、しばしばそれらのうちの1つは（完全に、あるいは部分的に）他に同化する。多くの場合相互同化が可能である。同化のタイプは次の表に示されている⁴。

第1 \ 第2	k	n	l	m	p	s
k*	—	ŋn	ŋn	ŋm	—	—
n	—	—	ll	mm**	—	—
t	kk**	nn**	nn	nm*	pp**	ss
l	—	ll	—	—	—	—
m	—	—	mn	—	—	—
p***	kk**	mn	mn	mm	—	—
ŋ	—	—	ŋn	—	—	—

[注] 記号**のついた同化は随意的である。*のついた *k* は *k* だけでなく正書法上の *kk*, *lg* (これらも *k* と発音される) をも示す。***のついた *k, p* は *p* だけではなく正書法上の *ph*, *lb*, *lph* (これらも *p* と発音される) をも示す。

§2. 母音及び二重母音類 母音は以下の三角形として示される。その下端は最も開かれた母音を示すが、2つの他の端は最も閉ざされた母音である。より閉ざされた母音からより開かれた母音への段階的な移行は三角形の2つの側面に表示される。その際左側は前母音系列に、右側は後母音系列に割り当てられている。



母音 *a, i, u, y* はロシア語の母音に似ている。母音 *ε* と *e*, *ɔ* と *o* はそれぞれ異なるが、それぞれ閉母音と開母音である。

朝鮮語には 12 の二重母音類がある。それらのうち音節をなさない短い *i, u* (われわれの転写では *w*) を伴う上昇的二重母音類が 11 ある: *ja, ja, jo, ju, je, je* (極めてまれ); *wa, wa, we, we, wi*. 1つの二重母音類 *yj* (属格語尾では *e* と交替する) だけは下降的二重母音類である。語頭及び音節の頭における上昇的二重母音類の頭音の要素は鳴音のように発音される。二重母音類 *we* は不完全なスタイルでは (アカデミー会員 L・V・シチェルバによる) 単母音 *ö* に合流する (ドイツ語 *hören* の *ö* 参照)。

北方諸方言の音声

朝鮮語の方言は極めて多様だが、それらは次の 6 つの主要な方言にまとめることが出来る。1) 東北方言, 2) 西北方言, 3) 中央朝鮮方言, 4) 東南方言, 5) 西南方言, 6) 済州島方言。標準語の基礎となるものは中央朝鮮方言に入るソウル方言である。北方諸方言⁽¹⁵⁾は次のような標準語との一連の相違を見せている。

a) 北方朝鮮諸方言は「*c* 方言」と規定し、「*č* 方言」としての標準語をそれに対立させることが出来る。すなわち、標準語の音 *č* と *ch* に対してこれらの方言ではある単語では *č* と *ch* が、ある単語では *c* と *ch* が対立するのである。例え

ば, 標準語の *čal* <よく> には北方朝鮮の *car* が対応するが, 標準語の *čakta* <小さい> には北方朝鮮の *čakta* が対応する. このことは古代朝鮮語⁽¹⁶⁾は *č* の 2 つの変種と *čh* の 2 つの変種 (非口蓋化音と口蓋化音) を持っていたということで説明できる. 標準語では 2 つの変種は 1 つの音に合流したが (*č* と *čh*), 北方諸方言では本来の非口蓋化音 *č* と *čh* は *c* と *ch* になり, 本来の口蓋化音の *č* と *čh* は *č* と *čh* になった.

b) 北方朝鮮諸方言は「*š* 方言」と規定し, 「*s* 方言」としての標準語をそれに対立させることが出来る. すなわち, 標準語の音 *s* に対して北方諸方言ではある単語では *s* が, ある単語では *š* (時に *s'*) が対立するのである. 例えば, 標準語の *soda* <立つ> には北方朝鮮の *šoda* が対応するが, 標準語の *son* <手> には北方朝鮮の *son* が対応する. このことは古代朝鮮語は *s* の 2 つの変種—非口蓋化音と口蓋化音—を持っていたということで説明できる. 標準語ではそれらは 1 つの音 *s* に合流したが, 北方諸方言では本来の非口蓋化音 *s* は *s* に, 本来の口蓋化音の *s* は *š* (時に *s'*) に反映している.

c) 北方朝鮮諸方言は「*t* 方言」と規定し, 「*č* 方言」としての標準語をそれに対立させることが出来る. すなわち, 標準語の音 *č* と *čh* に対して北方諸方言では *t* と *th* の非口蓋化音が対応するのである. 例えば, 標準語の *čohyn* <よい> には北方朝鮮の *tjohyn* が対応するが, 標準語の *čhən* <空> には北方朝鮮の *thjən* が対応する. 多くの場合これら *t* と *th* の口蓋化音は北方諸方言では *č* と *čh* に移行せず非口蓋化音と合流する (すなわち通常の北方朝鮮方言の *tjohyn* と標準語の *čohyn* の代わりに *tohyn* (よい))⁽¹⁷⁾.

d) 北方朝鮮諸方言は「*r* 方言」と規定し, 「*l* 方言」としての標準語をそれに対立させることが出来る. すなわち, 標準語の基準では *l* のみが可能である位置で北方方言は *r* を許容するのである. 例えば, 標準語の *mal* <馬> は北方朝鮮方言では *mar* と発音される.

e) 最後に北方朝鮮諸方言は「*n'* 方言」と規定し, 「*j* 方言」としての標準語をそれに対立させることが出来る. すなわち, 北方朝鮮諸方言は語頭で *n* の口蓋化音を保っていたが, 標準語ではそれは消滅したのである. たとえば, 標準語の (北朝鮮) 号, (韓国) 号 *juk* <六> には北方朝鮮方言の *njuk* が対応する⁽¹⁷⁾.

結論として, 北方諸方言は古代朝鮮語の音声体系を著しく保っているが, この点で朝鮮語史研究にとって格別の意義を持っていると言える.

文字と正書法

朝鮮語の子音を表記するためには次の文字が採用されている.

ㅂ	p	ㅃ	pp	ㅍ	ph
ㄷ	t	ㄸ	tt	ㅌ	th

ㄱ	k	ㄲ	kk	ㅋ	kh
ㅈ	č	ㅉ	čč	ㅊ	čh
ㄴ	m	ㄷ	n	ㅇ	ŋ
ㄹ	s	ㅅ	ss	ㅎ	h
ㅇ	l				

母音は次の文字で表示される。

ㅡ *y*, ㅏ *o*, ㅓ *u* (横線を基本とする文字),

ㅣ *i*, ㅑ *a*, ㅓ *ɔ* (縦線を基本とする文字)。

これらの文字は単純文字である。母音 *ε*, *e* は上記の単純文字の結合で表される: ㅜ *ε* (文字 *a*, *i* の結合), ㅟ *e* (文字 *ɔ*, *i* の結合)。

二重母音類内の音節をなさない短い *u* は文字 ㅜ *o*, ㅓ *u* で表される: ㅘ *wa*, ㅙ *wɔ*, ㅞ *wε*, ㅟ *we* あるいは ㅚ *we*, ㅜ *wi*。音節をなさない短い *i* は母音を表す文字の短い線をダブらせることで表される: ㅑ *a*, ㅓ *ja*, ㅓ *ɔ*, ㅓ *jɔ*, ㅏ *o*, ㅓ *jo*, ㅓ *u*, ㅜ *ju*, ㅟ *e*, ところで ㅟ *je*, ㅜ *ε*, ところで ㅟ *je*。

[注] 文字の結合は 2 つの文字として読んではならない。このことは朝鮮語をよく知らない者がしばしば犯すことであり、朝鮮の名、姓、地名の誤った表示に見られる (例, 崔 <崔> Цой *Coj*。もっと正確には Чве *Čve*)。これらの文字は二重母音と名づけてはならない。なぜならば二重母音は音結合であって文字の結合ではないからである。

朝鮮人は上から下へ、右から左へ書く。単語の表記の原則もロシア語とは異なる。文字は続いていかず、あらかじめ音節に組み立てられる。かくして朝鮮文字は単音文字でも音節文字でもなく、単音=音節文字である。各々の音節は文字を 2 つあるいは 3 つの層に組み立てる方法で記録される。音節が 2 つの層にかかれるのは、この音節の母音文字の基礎に縦線がある場合である (文字 ㅣ *i*, ㅑ *a*, ㅓ *ɔ* とそれらの派生字 ㅜ *ε*, ㅟ *e*)。この際上の層には母音文字を伴った子音文字が、下の層には 1 つの子音文字が書かれる。例えば、2 音節からなる単語 *kamgak* <感覚> は 감각 と書かれる。音節が 3 つの層に書かれるのは、この音節の母音文字の基礎に横線がある場合である (ㅡ *y*, ㅏ *o*, ㅓ *u*)。この際上の層には子音文字が、真ん中の層には母音文字が、下の層にはまた子音文字が書かれる。例えば、2 音節からなる単語 *sonmok* <手首> は 손목 と書かれる。

二重母音類 *ja*, *jo*, *ju*, *jɔ*, *je*, *je* をもつ音節の表記も同じ規則に従う。例: ㅍ *ppjam* <頬>, ㅍ *kjul* <蜜柑>。

上述の 2 つの方法の結合は上昇的二重母音類 *wa*, *wɔ*, *wε*, *we*, *wi*, *yi* を持つ音節の表記である。例: ㅍ *hwak* <石臼>, ㅍ *hwεk* あるいは ㅍ *hwik* <すばやく, ひゅつと>。

音節を始める最初の子音がなければ、その位置には必ず「からの」文字, 「黙

字」○が書かれるが、この場合それは文字上の等価物○ *y* と混同してはならない。朝鮮人がそれらを混同しないのは、1人の朝鮮として語頭で *y* を発音出来ないからである。例えば、頭子音のない音節の単語 *anjay* <昂揚> は앙양と書かれる。

音節の中に末子音がなければ、音節は自動的に1つの層に短縮され、いかなる「からの」文字あるいは「黙字」も立たない。例えば、単語잠 *cam* <眠り> は2つの層に書かれるが、単語자 *ca* <尺> は1つの層に書かれる；単語손 *son* <手> は3つの層に書かれるが、소 *so* <牛> は2つの層に書かれる。

単音=音節的の原則はこれが単語の形態論的構成と矛盾を来たさない間でのみ通用した。単語の有意味的部分への形態論的分割が非有意味的音節への分割と一致しないならば、音節の形態論的区分に優位が与えられる。すなわち単語の表記は正しい音節分割を犠牲にして単語の形態論的構成を考慮して行われるのである。形態素は音節に優先される；単語はまず形態素に分割せよ；ただし残ったものは音節に分割せよという原則は朝鮮語の正書法において主導的なものである。例えば、単語 *pulgyn* <赤い> は音節 *pul-gyn* に分かれる。しかし形態論的にはこの単語は *pulg-yn* と分割され、ここで *pulg* は語根で、*-yn* は接辞である。これらの2つの互いに矛盾する分割のうち第2のものに優位が与えられ、単語は붉은ではなく붉은と表記される。この場合上述の例で示したように、第2の層に(2層の表記で)、そして第3の層に(3層の表記で)2つの子音が表れ得る。

朝鮮語の単語表記の形態論的の原則はやっと20世紀初に(1907年)著名な朝鮮人言語学者周時経の著述で最初に定式化された。彼以前は純粋に音声的な正書法が支配的だった。しかし周時経の考えはずっと後に朝鮮語正書法の続いて行われた3つの改革(第1の改革1933年、第2の改革1948年、第3の未完の改革1949年)で実現された。

上述した朝鮮の国字(朝鮮語で국문<国文>あるいは한글<ハングル>、以前は언문<諺文オンモン>)のほかに朝鮮では漢字も用いられる。2種類の文字の使用と関連してそれら相互の関係の問題が起こる。この関係とは3種である。

a) 漢字のみの使用：書写語が中国語だった時の朝鮮でこう書かれた；b) ハングルだけの使用：過去に説話文学等でこう書かれた；この方法は朝鮮民主主義人民共和国で基本的な方法として今でも採用されている；c) 漢字とハングルの使用(いわゆる文字の混合的の原則)。この場合漢字で表記されるのは中国語起源のすべての単語(完全に朝鮮化した漢字語に関する少しの例外がある)、本来の朝鮮の語彙、中国語起源でない借用語、単語変化のすべての形態素(文法)はハングルで表される。この表記法は1945年まで支配的だった。現在これは科学文献及び公式の言語(法令集、命令集、決議集等々)で部分的に保たれている。

形 態 論

I. 単語の構造

形態論研究の対象は単語の変化の規則である。かくして形態論は、文を扱う統辞論に対して、単語を扱う⁽¹⁸⁾。しかし単語は言語の語彙構成の中に入るから、語彙論の対象でもある⁽¹⁹⁾。単語のこの二重の性質は単語の構造の複雑な性格を語っている。それゆえ形態論の第1の任務は、単語を形態論の対象とする諸要素を取り出す目的で単語の構造を研究することである。

形態素

単語は形態素からなる。形態素は単語の最小の有意味的部分である。朝鮮語では次の形態素が取り出される：1) 語根, 2) 接頭辞, 3) 単語形成（造語）の接尾辞, 4) 単語変化（屈折）の接尾辞, 5) 単語変化（屈折）の移動的接尾辞, 6) 接尾語, 7) 語尾, 8) 結合的形態素。これらの単純形態素の結合から 1) 語幹, 2) 語基, 3) 語根複合（語根結合）が作られる。語根はどの単語でも必然的な属性である。他の形態素は一定の条件でのみ単語の構成に入り込む。

§3. 語根 単語との関係で言えばすべての固有語の語根は2つのタイプに分かれる。1つの語根は語尾なしで自立語として用いられ得るが、もう1つの語根は決して自立語として用いられることはなく、単語の部分となすのみである。第1のタイプの語根は名詞語根あるいは原副詞語根である：날<日>, 봄<春>, 풀<草>, 늘<いつも>, 매우<非常に>, 아까<さっき>。第2のタイプの語根は動詞語根あるいは形容詞語根である：날(다)<飛ぶ>, 돕(다)<手伝う>, 누르(다)<黄色い>, 빠르(다)<速い>。ここには次のような派生副詞の一連の語根も入る：다달(이)<毎月>, 많(이)<たくさん>, 가만(히)<静かに>。

自立語としての現代朝鮮語の漢字語語根は極めてまれである（문 [門]<門, 戸, ドア>）。普通は漢字語語根は語根と接尾辞（극히 [極一]）あるいは2つ以上の語根（화구 [火口]）からなる単語の部分となす。

音声的には語根は交替語根と非交替語根の2つに分かれる。変種を持つ語根は交替語根と呼ばれる。変種は末尾子音によって異なる（例：길 *kiT* 及び 길 *kiR* [汲む]）。語根は、子音で始まる形態素が後ろに続く場合は、ある変種を持つ。語根は、母音で始まる形態素が後ろに続く場合は、別の変種を持つ。以下に特別に但し書きされる例外的な場合には、この規則は通用しない。

語根の末音音素の交替は同化とは区別する必要がある。同化とはある音声の別の音声への完全な、あるいは部分的な類似化である。同化は交替語幹にも非交替語幹にも可能である (§1 参照)。막는다 *maŋ-nynda* (막다 *mak-ta* から) に見え

る *k* の *ŋ* への移行は同化の結果である. 달았다 *tar-atta* (달다 *tat-ta* から) に見える *t* の *r* への移行は同化の結果である.

語根と他の形態素の結合の際に起こる交替は音声的交替と歴史的交替に分かれる. 音声的交替と名づけられるものは現代朝鮮語に有効な規範によって説明できる交替である. 歴史的交替と名づけられるものは朝鮮語にかつて有効だった規範によって説明できる交替である. 朝鮮語の単語の文法的変種깊은 *kiph-yn* <深い> [連体形] ~깊다 *kip-ta* <深い> [終止形] における交替ㅍ *ph* ~ㅂ *p* は, 現代朝鮮語は「有気音+無気音」(この場合 *ph* + *t* のグループ) を許さないことで説明される. 生きた音声的規範, 出来上がった音声的習慣はこれらの条件において有気音をそれと親縁的な無気音に取り替えることを要求している. これはかくして音声的交替である. 朝鮮語の単語の文法的変種깊었다 *kir-ɔ-tta* <汲んだ> ~깊다 *kit-ta* <汲む> における交替ㄷ *r* ~ㄷ *t* は生きた音声的規範によっては説明出来ない. 音声 *r* の音声 *t* による取替えは出来上がった発音習慣によっては説明出来ない. 現代朝鮮語は「鳴音+噪音」のグループ, この場合 “*l(-r)* + *t*” のグループを許容している (例: 불다 *pul-da* <吹く>; 方言形길다 *kil-tta* <汲む> 参照). この交替の説明することは朝鮮語史を研究してのみ可能である.

名詞語根の交替の規則は用言語根の交替の規則とは部分的にのみ一致する. このことはこのような交替は別々に観察しなければならないことを意味する.

A. 用言語根の交替

a) 音声的交替 音声的に交替する語根は 3 類に分かれる.

第 1 類にはある子音が他の子音と交替する語根が入る. 交替の規則: すべての強音と有気音及びㅌ *dž*, ㅍ *s* は, 母音間の位置から子音の前の位置に移ると, 調音点において対応の弱音ㅍ *p*, ㄷ *t*, ㄱ *k* に取り替わる. 前述したように (§1 参照), この位置では破裂なしに発音される.

1.	ㅍ	<i>ph</i>	~	ㅂ	<i>p</i>	
2.	ㅌ	<i>th</i>				
	ㅊ	<i>čh</i>				
	ㅆ	<i>č</i>		~	ㄷ	<i>t</i>
	ㅅ	<i>s</i>				
	ㅆ	<i>ss</i>				
3.	ㄱ	<i>kk</i>	~	ㅋ	<i>k</i>	

[注] ㅌ~ㄷのタイプで交替するのは 1 つの語根있 (다) 及び過去と未来の接尾辞 -았-/ -었-, -였- だけである.

	<i>ph</i> ~ <i>p</i>	<i>th</i> ~ <i>t</i>	<i>čh</i> ~ <i>t</i>	<i>dž</i> ~ <i>t</i>	<i>s</i> ~ <i>t</i>	<i>ss</i> ~ <i>t</i>	<i>kk</i> ~ <i>k</i>
第 1 変種	값았다 <i>kaph-atta</i>	말았다 <i>math-atta</i>	맞았다 ⁽²⁰⁾ <i>mačh-atta</i>	맞았다 <i>madž-atta</i>	웃었다 <i>us-ɔtta</i>	있었다 <i>iss-ɔtta</i>	눅았다 <i>nak-atta</i>

第2 変種	잡다 (잡다) <i>kap-ta</i>	맡다 (맡다) <i>mat-ta</i>	맡다 (맡다) <i>mat-ta</i>	맡다 (맡다) <i>mat-ta</i>	온다 (웃다) <i>ut-ta</i>	인다 (있다) <i>it-ta</i>	낙다 (낙다) <i>nak-ta</i>
----------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	----------------------------	----------------------------	-----------------------------

[注] 語根の第1変種は過去接尾辞 -았 (다) ~ -었 (다) の前に現れ, 第2変種は語尾 -다の前に現れる. 辞書ではすべての用言は-다形で与えられるが, ロシア語の辞書での形—不定詞には対応しない.

発音が正書法と一致しないところでは, 正書法は括弧の中に示される.

第2類には子音群が1つの子音と交替する語根が入る. 交替の規則: 語根末の子音群は, 母音間の位置から *h* 以外の任意の子音の前の位置に移ると, このグループに入る子音の1つと取り変わる. これはあるいは閉鎖弱音 (*p, k*) あるいは鳴音 (*l, m, n*) である.

1.	ㄹ	<i>lb</i>				
	ㄹ	<i>lph</i>		~	ㅍ	<i>p</i>
	ㅍ	<i>ps</i>				
2.	ㄴ	<i>lg</i>		~	ㄱ	<i>k</i>
3.	ㄴ	<i>lm</i>		~	ㅁ	<i>m</i>
4.	ㄴ	<i>ndž</i>		~	ㄴ	<i>n</i>
5.	ㄴ	<i>lth</i>		~	ㄴ	<i>l</i>

[注] ㄹ ~ ㅍ のタイプで交替するのは을 (다) 1つだけであり, ㅍ ~ ㄴ のタイプで交替するのは할 (다) と홀 (다) の2つだけである.

	<i>lb ~ p</i>	<i>lph ~ p</i>	<i>ps ~ p</i>	<i>lg ~ k</i>	<i>lm ~ m</i>	<i>ndž ~ n</i>	<i>lth ~ l</i>
第1 変種	잡았다 <i>pap-atta</i>	을었다 <i>ylph-atta</i>	없었다 <i>ops-atta</i>	읽었다 <i>ilg-attaž</i>	살았다 <i>salm-atta</i>	앓았다 <i>andž-atta</i>	할았다 <i>halth-atta</i>
第2 変種	밟다 (밟다) <i>pap-ta</i> ⁽²¹⁾	읍다 (을다) <i>yp-ta</i> ⁽²²⁾	업다 (없다) <i>op-ta</i>	익다 (읽다) <i>ik-ta</i>	삼따 ⁽²⁸⁾ (삼다) <i>sam-tta</i>	안따 ⁽²⁸⁾ (앓다) <i>an-tta</i> ⁽²³⁾	할따 ⁽²⁸⁾ (할다) <i>hal-tta</i>

[注] 語根の第1変種と第2変種は前の表と同じ接尾辞と語尾の前で与えられる. 語尾 -따 -tta (正書法 -다 -ta) は -다 -ta の変種である.

発音が正書法と一致しないところでは, 正書法は括弧の中に示される.

第3類にはト *a* あるいはト *o* の前の位置の末尾母音が鳴音 *w* と取り替わるか落ち

る語根である. 次の交替がある.

1. *y* ~ ゼロ. 例: 크다 *khy-da*, ただし켰다 *kh-atta*.
2. *u* あるいは *o* ~ 鳴音 *w*. 例: 싸우다 *ssau-da*, ただし싸웠다 *ssaw-atta*.

この交替は *o* あるいは *u* の前に子音がない語根のみに現われる。

b) 歴史的交替 この種の交替では第1変種と第2変種使用の一般的規則を立てることが出来ない。各々のタイプの交替は変種使用の自分の規則を持っている⁽²⁷⁾。

1. $t \sim r$; 第1変種は子音の前で, 第2変種は母音の前で用いられる。交替の規則はかくて音声的交替の規則と一致する。このグループには1つの形容詞もない。

2. $p \sim u/w$; 第2変種は母音の前だけでなく鳴音 *m, n, l* の前でも用いられる。母音 *u* は子音鳴音の前でのみ, 鳴音 *w* は母音の前で可能である。第1変種は他の子音の前で用いられる。かくして交替の規則は音声的交替の規則とは部分的にのみ一致するのである。例: 도우니 *tou-ni*, ただし도와 *tow-a*, ただし돕다 *top-ta*。

3. $t \sim \text{ゼロ}$ 。第1変種は子音の前で, 第2変種は母音の前で用いられる。交替の条件は音声的交替の場合と同じである⁽²⁴⁾。

4. $l/r \sim \text{ゼロ}$ 。両者の変種とも母音の前でも子音の前でも用いられる。第1変種は普通子音 *d, dʒ, g* の前で, 第2変種は子音 *n, s* の前で用いられる; 子音 *m, l* は第1変種の後にも第2変種の後にも現れ得る; 母音 *a, ɔ* は第1変種の後で, 母音 *o* は第2変種の後で現われる。例: 아오 *a-o*, しかし알아 *ar-a*; 아는 *a-nyn*, ただし알다 *al-da*。

5. $ry \sim ll$ 。第2変種は母音 *a, ɔ* の前に用いられ, 他の場合には第1変種が用いられる。例外は非交替語幹이르 (다) <至る>, 누르 (다) <黄色い>, 푸르 (다) <青い>である⁽²⁵⁾。動詞따르다<従う>⁽²⁶⁾, 치르다<支払う>は크다の例にならう ($y \sim \text{ゼロ}$ 。上を参照)。

	$t \sim r$	$p \sim u/w$	$t \sim \text{ゼロ}$	$l \sim \text{ゼロ}$	$ry \sim ll$
第1変種	듣다 <i>tyt-ta</i>	돕다 <i>top-ta</i>	짚다 (짓다) <i>čit-ta</i>	알다 <i>al-da</i>	오르다 <i>ory-da</i>
第2変種	들었다 <i>tyr-otta</i>	도왔다 <i>tow-atta</i> 도운 <i>tou-n</i>	지었다 <i>či-otta</i>	안 <i>a-n</i> 알았다 <i>ar-atta</i>	올랐다 <i>-atta</i>

[注] 語根の変種は前の表と同じ接尾辞と語尾の前で与えられる。

正書法が発音と一致しないところでは, 正書法は括弧の中に示される。

「 $l \sim \text{ゼロ}$ 」のタイプの語根 (第2変種) は連体形過去語尾 $-l$ とともに与えられている。何故なら過去接尾辞は第1変種 (その変種 *r*) に結尾するからである。比較のためにこのグループの過去形が与えられる。

c) 外見の(正書法的)交替 朝鮮語のいくつかの文法書には次の3つの交替す

る語根のグループだ挙がっている：1) “*nh*~*n*” のグループ, 2) “*rh*~*r*” のグループ, 3) “*h*~ゼロ” のグループ. しかし両者の「変種」の発音が記録されている次の表を眺めるだけで, そのような交代が実際には存在しないことを確認するに充分であろう.

	第1「変種」	第2「変種」
第1グループ	만타 <i>man-tha</i>	민아 <i>man-a</i>
第2グループ	일타 <i>il-tha</i>	일어 <i>ir-o</i>
第3グループ	조타 <i>čo-tha</i>	조아 <i>čo-a</i>

第1「変種」と第2「変種」の双方とも語根は同じ発音である：만 *man*, 일 *il* (*l* と *r* は1つの音素であるから, *ir* は *il* の変種である), 조 *čo*. かくしてこれは音声的交替ではないのである. 音声的交替の外観をこれらの単語の独特な正書法が作っている. 有気音と無気音を正書法上で統一する目的で타 *-tha* を다 *-ta* と書いて語尾の有氣的要素を *h* の形で語根に帰せしめたのである：많다 *manh-ta* (発音만타 *man-tha*), 일다 *irh-ta* (発音일타 *il-tha*), 좋다 *čoh-ta* (発音조타 *čo-tha*).

このように実際に「交替」が生じるのだが, それは正書法上の性格であって音声的なものではない. 真の交替とは常に音声的な現象だけをいうのである.

B. 名詞語根の交替

名詞語根のすべての交替は音声的であり, 歴史的でない. 音声的に交替する語根は2つの類に分かれる.

第1類⁽²⁹⁾には1つの子音が他の子音と交替する語根が入る. 交替の規則：強音と有気音及び *p*, *s* は, 母音間の位置からポーズの前あるいは子音の前の位置に移ると, 調音点において対応の弱音：ㅍ *p*, ㅌ *t*, ㅋ *k* に取り替わる. 前述したように (§1 参照), この位置では破裂なしに発音される.

1.	ㅍ	<i>ph</i>	~	ㅍ	<i>p</i>
2.	ㅌ	<i>th</i>		ㅌ	<i>t</i>
	ㅊ	<i>čh</i>		ㅊ	<i>t</i>
	ㅈ	<i>č</i>			
	ㅅ	<i>s</i>			
3.	ㅋ	<i>kh</i>		ㅋ	<i>k</i>
	ㄱ	<i>kk</i>			

[注] ㅌ *th* ~ ㅌ *t* のタイプによって交替するのは1つの語根ㅌだけである. ㅋ *kh* ~ ㅋ *k* のタイプによって交替するのは1つの語根ㅌだけである; 若干の単語における語根ㅌは今は交替しない.

<i>ph</i> ~ <i>p</i>	<i>th</i> ~ <i>t</i>	<i>čh</i> ~ <i>t</i>	<i>dž</i> ~ <i>t</i>	<i>s</i> ~ <i>t</i>	<i>kh</i> ~ <i>k</i>	<i>kk</i> ~ <i>k</i>
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------

第1 変種	앞은 <i>iph-yn</i>	끝은 <i>kkyth-yn</i>	낮은 <i>nach-yn</i>	낮은 <i>nadž-yn</i>	낮은 <i>nas-yn</i>	부엌은 <i>puɔkh-yn</i>	밖은 <i>pakk-yn</i>
第2 変種	입(읏) <i>ip</i>	끝(읏) <i>kkyt</i>	낫(읏) <i>nat</i>	낫(읏) <i>nat</i>	낫(읏) <i>nat</i>	부엌(부엌) <i>puɔk</i>	밖(밖) <i>pak</i>

[注] 語根の第1変種は取り立ての助詞 *-은-yn* の前に現れ, 第2変種はポーズの前に現れる. 発音が正書法と一致しないところでは, 正書法は括弧の中に示される.

第2類⁽²⁹⁾には子音群が1つの子音と交替する語根が入る. 交替の規則: 語根末の子音群は, 母音間の位置からポーズの前あるいは子音の前の位置に移ると, このグループに入る子音の1つと取り変わる.

1.	ㅍ	<i>ps</i>		~	ㅍ	<i>p</i>
2.	ㅌ	<i>ks</i>		~	ㅌ	<i>k</i>
	ㄹ	<i>lg</i>				
3.	ㄴ	<i>ls</i>		~	ㄴ	<i>l</i>

	<i>ps ~ p</i>	<i>ks ~ k</i>	<i>lg ~ k</i>	<i>ls ~ l</i>
第1変種	값은 <i>kaps-yn</i>	몫은 <i>moks-yn</i>	흙은 <i>hylg-yn</i>	돋은 <i>tols-yn</i>
第2変種	갑(값) <i>kap</i>	목(몫) <i>mok</i>	흑(흙) <i>hyk</i>	돌(돋) <i>tol</i>

交替する語根の正書法 交替が音声的ならば(歴史的でないならば), 表記では基本的なものとして母音の前の変種が取られる; それは子音の前の位置でも発音にかかわらず書かれる; かくして発音が異なれば(例: 母音の前の変種としての값(은) *kip(h)-yn* 及び子音の前の変種としての갑(다) *kip(-ta)*), 正書法では上述の規則によって両者の変種を一樣に書くのである(값(은) *kip(h)-yn* 及び값(다) *kip(-ta)* (発音は갑다 *kip(-ta)*)).

交替が歴史的ならば, 表記には両者の変種が保たれる; 例: 오르(다) *ory-da*, しかし올랐다 *oll(-atta)*⁽³⁰⁾.

§4. 接頭辞 朝鮮語の接頭辞は単語形成(造語)的機能を持つ. 品詞はどれ1つとして接頭辞を付け加えることによって他の品詞に変わらない. 名詞は接頭辞を付け加えた後でも名詞であり, 動詞もやはり動詞である, 等々.

起源の点から接頭辞は固有語形態素である⁽³¹⁾. ある種の漢字語接頭辞は通常単語変化(屈折)の機能を持つ: 문제 [問題], ただし제문제 [諸問題]⁽³²⁾.

意味の点から接頭辞は名詞接頭辞, 動詞接頭辞, 形容詞接頭辞に分けられる(副詞は自己の接頭辞を持たない). 大部分の接頭辞は名詞接頭辞である. 1) 날-: 날계란, 날고기; 2) 올-: 올콩, 올팔, 올며; 3) 할-: 할웃, 할이불⁽³⁹⁾; 4) 외-:

외팔, 외아들; 5) 맨-: 맨몸, 맨밥, 맨입. 少数の接頭辞だけが他の範疇に属する; 例: 動詞接頭辞엿-⁽⁴⁰⁾: 엿보다, 엿듣다; 形容詞接頭辞새- / 시-: 새까맣다あるいは시꺼맣다, 새파랗다あるいは시퍼랗다 (接頭辞と語根に母音調和がある) .

いくつかの接頭辞はいくつかの品詞のためにある; 例: 맨- 名詞とともに—맨끝, 副詞とともに—맨먼저.

大部分の固有語の接頭辞は非生産的である. このことはそれらによって作られる単語の数は著しいものではなく, この類の単語のすべては普通は辞典に載せられるということである.

[注] 何人かの朝鮮語研究者は朝鮮語の固有語の接頭辞を連体的機能でのみ用いられ, 特別な品詞を作る自立語と見ている⁽³³⁾. この品詞の構成はいろいろな研究者によっていろいろに規定されている. 全体としてこの観点に同調しないが, しかし非常に限られた数の接頭辞は実際に連体的にのみ用いられ得ると考える; 例: 새 (새 해)⁽³⁴⁾; ここから変化する形容詞새롭다; また외모: 외 팔; ここから変化する形容詞외롭다⁽³⁵⁾. しかしこれらの単語は特別な品詞を作らない⁽³⁶⁾. いくつかの接頭辞は起源的に自立語だったことをも否定しない; 一連の接頭辞における末尾의, ㄴ 参照 (원⁽³⁷⁾, 을) (これらは起源的に連体形だっただろう). 最後に形態素の性格の規定が明瞭でない一連の問題の場合があることを認める (例: 온, 모든⁽⁴¹⁾)⁽³⁸⁾.

§5. 単語形成(造語)接尾辞 単語形成(造語)接尾辞とは新しい単語を作る形態素である. この接尾辞によって作られる単語は派生語と呼ばれる. 新しい単語を作らせる単語は派生させる単語と呼ばれる.

単語形成(造語)接尾辞は2つの部類に分けられる.

a) ある品詞を他の品詞に変える接尾辞 (例: “-ot-” —名詞 “zevota” <あくび>. 動詞 “zevat” <あくびする> [不定詞] から),

b) ある品詞を他の品詞に変えず, 同じ品詞の中で特別な語類を作るなんらかの補足的な意味をもたらす接尾辞 (“-ėnok” 子どもの意味をもつ語類を作る—名詞 kotėnok<猫の子>, tigrėnok<虎の子>. 名詞 “kot” <猫>, “tigr” <虎>から).

ある品詞を他の品詞に変える接尾辞は, それらがどのような品詞を作るかによって, 4つのグループ: 名詞接尾辞, 動詞接尾辞, 形容詞接尾辞, 副詞接尾辞に分かれる.

名詞接尾辞は名詞を作る: 動詞派生 (例: 接尾辞 -개: 날개. 動詞날다から), 形容詞派生 (例: 接尾辞 -이: 길이. 形容詞길다から) .

[注] 形態素 -로 (また -기) もは多分単語形成(造語)接尾辞ではないだ

ろう。末尾の -로 (また -기) は用言の名詞化した不定詞である。この場合不定詞を名詞に変えるためのいかなる補足的な手段も用いられない。ある品詞から他の品詞へと転換するそのような無接尾辞の方法は言語学では転成 *konversija* と呼ばれる。転成はロシア語でも知られる。例: *rabochij* <労働者> [男性名詞. 形容詞 *rabochij* <労働の> から], *mostovaja* <舗装道路> [女性名詞. 形容詞 *mostovoj* <橋の> から], *nasekomoe* <昆虫> [中性名詞. 動詞 *nasech'* <切る, 刻む> の被動過去形動詞 *nasekomyj* <切られた> から]. 従って 꿈 <夢>, 기쁨 <喜び> のタイプの単語は動詞 꾸다 <夢見る> と形容詞 기쁘다 <喜ばしい> の, 名詞に移行した不定詞に他ならないのである。

動詞接尾辞は動詞を作る: 形容詞派生 (例: 接尾辞 -이-: 높다 形容詞. 높다 から).

形容詞接尾辞は形容詞を作る: 動詞派生 (例: 現在非生産的な接尾辞 -읍-, -음-あるいは -읍-: 우습다⁽⁴²⁾あるいは 우습다. 動詞 웃다 から; 미덥다. 動詞 믿다 から; これらの接尾辞の非生産性はそれらが入り込む単語の正書法にも反映されている), 名詞派生 (例: -적 [的]⁽⁴⁵⁾. 영웅적 [英雄的]. 名詞 영웅 [英雄] から).

副詞接尾辞は副詞を作る: 名詞派生 (例: 接尾辞 -이, 同時に名詞語根の重複を伴う: 나날이. 名詞 날 から), 形容詞派生 (例: 接尾辞 -이: 높이. 形容詞 높다 から; 接尾辞 -히: 속히 [速-]. 形容詞 속하다 [速-] から), 動詞派生 (例: 非生産的な接尾辞 -어あるいは -우: 너머⁽⁴³⁾あるいは 너무. 動詞 넘다 から).

同じ品詞内でなんらかの語類を作る接尾辞は名詞派生の名詞接尾辞である。そのうちの一部は人間の意味を持つ接尾辞である。例: a) -자 [者], -가 [家], -사 [師], -군, -부 [夫], -장이 (話し言葉 -쟁이). なんらかの活動, 職業等に従事する人を表す: 노동자 [労働者]. 노동 [労働] から; 작곡가 [作曲家]. 작곡 [作曲] から; 조각사 [彫刻師]. 조각 [彫刻] から; 나뭇꾼. 나무 から; 채탄부 [採炭夫]. 채탄 [採炭] から; 양복쟁이 [洋服-]. 양복 [洋服] から; b) 接尾辞 -치. なんらかの場所と関連ある人を表す: 서울치. 서울 から; 시골치. 시골 から, 等々. また一部は抽象化された動作の意味を持つ接尾辞である。例: -질: 톱질. 톱 から; 마느질. 마늘 から.

特別なグループをなすのがいわゆるモーダル名詞接尾辞であるが, これは派生させる単語に卑下, 軽蔑, 俗語のニュアンス等々のような主観的=文体論的ニュアンスをもたらす。普通これらの接尾辞は名詞から名詞を作るが, 多くの場合他の品詞からの名詞の形成も見られる。これらの接尾辞はいくつかの下位グループに分かれ, それらの各々は「支柱」子音の統一という特徴を持つ。このようなグループはおおむね 3 つある。a) 支柱子音 ㅇ を持つ下位グループ:

-둥이, -똥이, -통이, -승이, -충이; -강이(あるいは -갱이), -망이(あるいは -맹이), -방이(あるいは -맹이), -앙이(あるいは -앵이), -랑이(あるいは -랭이); 例: 배<腹>, ただし배통이, 꼬리<尾>, ただし꼬랑이等々; b) 支柱子音ㄷを持つ下位グループ: -아리あるいは -어리, -거리, -머리, -서리, -다리; 例: 등<背>, ただし등어리; c) 支柱子音ㅍを持つ下位グループ: -애기, -재기, -때기, -서기; 例: 배<腹>, ただし배때기等々.

§6. 接尾語 Suffiks-slovo 接尾語は, その名が示すとおり, 単語の形をした単語形成(造語)接尾辞のことである. 本来の意味でそれが接尾辞と異なるのは, それが構成要素, 最低限語根と語尾に分割し得ることによってである. 例えば, 接尾語거리다は語根거리-と語尾 -다に分割される. 単語からそれが区別されるのは, 独自のアクセントがないことと, そのような接尾語が接合している語根から絶対的に分離されないことによってである. 例えば, 반작거리다の中の거리다は語根반작から分離されない⁽⁴⁴⁾.

接尾語は単語形成(造語)接尾辞と同じ部類に分かれる.

ある品詞を他の品詞に変える接尾語は動詞接尾語と形容詞接尾語に下位分類される. 動詞接尾語は副詞派生の動詞を作る. 例: 대다: 반작대다. 副詞반작반작から. 形容詞接尾語は形容詞を作る: 名詞派生(例: 립다: 해립다 [害—] 名詞해 [害] から)あるいは副詞派生(例: 거리다: 반질거리다. 副詞반질반질から).

同じ品詞の範囲内での造語に資するすべての接尾語は形容詞接尾語である. 例: 다랗다: 길다랗다. 길다から; 숙숙하다: 붉으숙숙하다⁽⁴⁶⁾. 붉다から.

接尾語は補助語と混同してはならない. 補助語とは文法的機能を果す単語をいう. 補助語は, 接尾語とは異なり, 自立語である. 공부하다 [工夫—] <勉強する>の하다<する>が例となり得る. 공부 [工夫] <勉強>と하다<する>の間には格の標識(공부를 하다<勉強をする>), 助詞そして副詞でさえあり得る(공부를 잘 하다<勉強をよくする>).

典型的な補助語하다は動詞を作る: 名詞派生(신음하다 [呻吟—]. 신음 [呻吟] から), 副詞派生(반작반작하다. 반작반작から); 形容詞を作る: 名詞派生(용감 [勇敢] 하다. 용감 [勇敢] から), 副詞派生(반질반질하다. 副詞반질반질から).

§7. 単語変化(屈折)接尾辞 単語変化(屈折)接尾辞と呼ばれるものは, 語尾に似て単語の文法的意味を表すのに役立つ形態素である. 接尾辞が語尾と異なるのは, 接尾辞が単語の統辞論的機能と関連のない文法的意味を表すことによってである(例えば, 動詞のヴォイス—この動詞が述語, 規定語, 補語あるい

は他の文の成分であるかに関係なく；あるいは名詞の尊敬の範疇—この名詞が主語，補語，規定語あるいは他の文の成分であるかに関係なく）。統辞論的機能と関連のない文法的意味と文法範疇をわれわれは後に非位置的と名づけよう。

単語変化（屈折）接尾辞は語尾の先に来，名詞接尾辞，動詞接尾辞，形容詞接尾辞に分かれる。

名詞単語変化（屈折）接尾辞の範疇は少数である。これは主として評価的な接尾辞である。例：尊敬님：형님<兄—>，형<兄>から。

動詞接尾辞は次のものに分かれる：a) ヴォイス接尾辞：例：-리-：불리다<吹かれる>，불다<吹く>から；b) テンス接尾辞：例：-았-：보았다，보다から；c) 法接尾辞：例：-겠-：있겠다，오다から；d) 人称⁽⁴⁷⁾接尾辞：例：-시-：아시다，알다から。

形容詞接尾辞は a) テンス接尾辞，b) ムード接尾辞，c) 「人称」⁽⁴⁷⁾接尾辞に分かれる。これらの接尾辞は一般的特徴が動詞接尾辞と一致する。例えば，動詞も形容詞も過去接尾辞 -았-/ -었- を持つが，現在接尾辞 -는/ -ㄴは動詞でのみ可能である。

同じ単語にいくつかの単語変化（屈折）接尾辞があり得る。例えば，動詞は同時にヴォイス形（使役形と受身形の2つさえ），テンス形，ムード形等を持ち得る。朝鮮語においてはこれらの接尾辞は常に厳密に決められた順序に配列される；この順序は次の通りである：1. 使役接尾辞 + 2. 受身接尾辞 + 3. 「人称」接尾辞 + 4. テンス接尾辞 + 5. ムード接尾辞⁽⁴⁸⁾。

§8. 単語変化（屈折）の移動的接尾辞⁽⁴⁹⁾ 単語変化（屈折）の移動的接尾辞は普通の単語変化（屈折）接尾辞と同じ機能を持っているが，単語変化（屈折）接尾辞と異なるのは，単語変化（屈折）の移動的接尾辞が一定の自立性を持っていることと文の中で一定限度自由に移動し得ることによってである。形態素のこの範疇に入るのは例えば多数接尾辞 -들である。普通はこれは名詞につく：학생들 [学生—]，학생 [学生] から。主語の位置にあるべき複数の名詞がなんらかの理由で文にない場合，そのような存在しない名詞の多数の接尾辞は保たれるが，文の副次的な成分に接尾される：일 잘들 하여라；어디로들 가시오？；어서들 이리 와！；왜들？（数人の相手に対して）等々。

§9. 語尾 語尾と呼ばれるものは，単語変化（屈折）接尾辞に似て文法的意味（文法範疇）を表示するのに役立つが，新しい単語を作らない形態素である。語尾が単語変化（屈折）接尾辞と異なるのは，語尾が文の中の単語の統辞論的機能と関連ある文法的意味を，例えば，動詞の場合，主として名詞の前に用いられる連体形を，あるいは名詞の場合，名詞が主語あるいは繫辞形（繫辞되다，

아니다の前) である場合にのみ用いられる格のようなものを表示していることによってである。

朝鮮語の語尾は2つのグループ：名詞語尾と用言語尾に分かれる。

名詞語尾は格である。用言語尾は4つに分かれる。a) 終止形語尾：例：-오：일하오. 일하다から；b) 連体形⁽⁵⁰⁾語尾：例：-는：일하는；c) 接続形⁽⁵¹⁾語尾：例：-면：일하면；d) 朝鮮語の不定詞形⁽⁵²⁾語尾：例：-기：일하기, 일하기에 (좋은 날). 最初の3つの下位グループは活用するという共通の特徴を持ち、この特徴により曲用する第4の下位グループに対立する。

音声的観点からは朝鮮語の語尾は並行的(類似的)と非並行的(非類似的)に分けられる。並行的語尾に属するものは子音 *t, č, k, s* で始まる語尾である。たの語尾は非並行的語尾である。並行的語尾は3つ(あるいは2つ)の級を持つ：

第1級	<i>t</i>	<i>č</i>	<i>k</i>	<i>s</i>
第2級	<i>tt</i>	<i>čč</i>	<i>kk</i>	
第3級	<i>th</i>	<i>čh</i>	<i>kh</i>	<i>ss</i>

語尾は、語根の末尾音が次の子音であるならば、第2級の形を持つ。

a) *n* (非交替及び *ndž* と交替)：신다及びその派生形신고, 신지；앉다及びその派生形앉고, 앉지. 例外：少数の非交替語根(末尾音 *n* の後ろに第3級の語尾が接尾する)：많다及びその派生形많고, 많지, 많소；

b) *m* (非交替及び *lm* と交替)：검다及びその派生形검고, 검지；짧다及びその派生形짧고, 짧지；

c) *l* (*lth* と交替のみ)：활다及びその派生形활고, 활지.

語尾は次の少数のグループの語尾の後ろで第3級の形を持つ。

a) 末尾の非交替の *n* を持つ；例：많다는上を参照。

b) 末尾の非交替の *l* を持つ；例：없다及びその派生形없고, 없지, 없소.

c) 末尾の母音を持つ；例：좋다及びその派生形좋고, 좋지, 좋소；このグループには接尾語다랴다, 앳다 / 앳다 (§6) を持つ形容詞, そして代形容詞그렇다, 이렇다, 저렇다가属する。

他の場合(末尾の *l* と母音を持つ大部分の語根の後ろを含めて)第1級の形を持つ語尾が用いられる。

並行的語尾の正書法 第2級は表記では第1級と同一視される。すなわちㄷ, ㅌ, ㅍの代わりにㅌ, ㅌ, ㅍと書く。第3級は表記には間接的に反映される。すなわちそれは第1級と同一視されるが、その有気音の要素は文字ㅎで表され、語根にその末尾の文字として、ㅌはㅎㄷのように、ㅍはㅎㅍのように導入される。例：많다, 많고等々。

§10. 接合形態素 この形態素は語根を接尾辞あるいは語尾と接合するために、

また接辞を相互に接合するために用いられる。接合形態素は動詞あるいは形容詞の範疇に属する単語の内部にのみ現れる。名詞では接合形態素はこの名詞が動詞あるいは形容詞から作られる場合にのみ現われる。

例外は具格語尾으로의接合形態素으である⁽⁵³⁾。

接合形態素は母音である。語根が交替するものであれば、接合形態素は母音の前に用いられる語根の変種に接合する。

語根と語尾あるいは接尾辞の間、また接尾辞と語尾の間に母音の接合形態素がなければ、それはマイナスの、あるいはゼロの接合形態素である。

元来朝鮮語には3級体系の接合形態素があった。各々の級には2つずつの並行的な母音があった。

第1級	・ <i>ǎ</i>	— <i>y</i>
第2級	ㅏ <i>a</i>	ㅑ <i>o</i>
第3級	ㅓ <i>o</i>	ㅕ <i>u</i>

2つの並行的な母音の存在は母音の前で用いられる語根の変種における語根の末尾母音の性格によって説明される。例えば、接合形態素の母音は語根の最後の母音に合わせられた。このような合わせ方は母音調和という名づけを持ち、朝鮮語にだけあるわけではない。時間の経過とともに朝鮮語の母音・はある場合には *y* に、ある場合には *a* に移行した。接合形態素で母音・が *y* に移行し、かくして第1級では接合形態素の2つの変種が互いに一致した (*ǎ—y* は *y—y* となった)。母音調和はこの場合動きを中止した。

なぜ3級の接合形態素が存在したのか？ このことは主として接合形態素の後ろに来る接尾辞あるいは語尾の頭音（普通は子音）の性格によって説明される。例えば、*m* で始まる語尾は接合母音 *o* あるいは *u* を要求した⁽⁵⁴⁾。時の経過とともに一連の接尾辞と語尾はなくなり、語尾と接尾辞の接合母音に対する作用は弱まり、それと関連して第3級の必要性はなくなり、それは消滅した。

かくして現代語では2つの級の接合形態素だけが残った（マイナスの接合形態素を数えないならば）。

第1級	— <i>y</i>
第2級	ㅏ <i>a</i> ㅑ <i>o</i>

しかしなんらかの接合母音の選択を暗示する原則は保たれた。接合形態素の性格、性質は語根、語尾あるいは接尾辞に接合形態素が同時に合わせられること（これは現代語では古代語ほど規則的ではない）の結果である。

上述のことから接合形態素の2つの規則が存在するということになる。第1の規則は接合形態素の先行要素（なによりも語根）への接合形態素の従属性を、第2の規則は接合形態素の後続要素（接尾辞あるいは語尾）への接合形態素の従属性を規定する。

接合形態素の先行要素（主として語根，まれに接尾辞）への接合形態素の従属性：

a) 接合母音 *y* は末尾子音（閉音節）を持つ語根（あるいは接尾辞）の後ろに用いられる。その際，すでに述べたように，語根（あるいは接尾辞）は母音によって要求される変種に現われる。例：받다から받으，웃다から웃으，앉다から앉으等々。받다から未来받겠으，가다から過去갔으（ここでは接合母音は未来接尾辞 -겠- と過去接尾辞 -ㅆ- の後ろに続く）。

例外：1) “*p* ~ *u/w*”⁽⁵⁵⁾のタイプの語根（例：무섭다），“*l* ~ ゼロ”⁽⁵⁶⁾（例：알다）。これらの語根は接合母音 *y* を取らない：무서우-であって 무서우으-ではない；아-であって아으-ではない；2) “*t* ~ ゼロ”⁽⁵⁷⁾のタイプの語根（例：짓다）接合母音 *y* は末尾子音のない語根の変種に接合する：지으-；3) 좋다のタイプの語根：末尾母音にもかかわらず（*ㅎ*はここでは正書法的である）接合母音 *y* を要求する⁽⁵⁸⁾。

b) 接合母音 *a*, *ɔ* の選択は母音の前で用いられる語根の変種における語根（あるいは接尾辞）の最後の音節の性質によって規定される。語根の最後の音節の母音は 2 つの系列：すなわち円唇音系列と非円唇音系列に分かれる。円唇音系列には *o*, *a*，非円唇音系列には *i*, *y*, *ɔ* が属する。円唇音系列も非円唇音系列も 2 つの系列：開母音系列と閉母音系列に分かれる。開母音系列には *o*, *a*，閉母音系列には *u*, *i*, *y*, *ɔ* が属する。母音 *ɛ*, *e*，そして音節をなさない頭音の *w* を持つ二重母音類（*wa* を除く）は起源的理由から現代語の音声的実像にもかかわらず非円唇閉母音である。すなわち歴史的にはそれらはすべて，表記自体が示すように，母音 *a*, *ɔ*, *o*, *u* と母音 *i* との結合からなる；これらの結合の最後の要素 *i* は非円唇閉母音である；この起源的な *i* によってすべての母音と二重母音類が評価されるのである。従って次の図式が得られる：

	円唇音	非円唇音
開母音	⊥ <i>o</i>	⊥ <i>a</i>
閉母音	⊥ <i>u</i>	⊥ <i>i</i> , ⊥ <i>y</i> , ⊥ <i>ɔ</i> , ⊥ <i>ɛ</i> , ⊥ <i>e</i> , <i>w</i> を持つ二重母音類

母音調和の規則とは，語根（母音を接尾させるのに必要な変種）の最後の音節の開母音，すなわち *o*, *a* には接合母音の開母音，すなわち *a* が対応しなければならず，語根（同じ変種）の最後の音節の閉母音，すなわち *u*, *i*, *y*, *ɔ* 等（表参照）には接合母音の *u*, *i*, *y*, *ɔ* 母音，すなわち *ɔ* が対応しなければならないことである。

現在この規則はしばしば崩れ，接合母音 *ɔ* に有利である。받다からは받아と並んで받어も現われる。このことは現代朝鮮語で母音調和の規則の作用が一般に弱化していることと関連がある。接尾辞の後ろでは *-a-* は一般に 不可能であ

る. 막았어. ただし막았아ではない.

末尾母音 *a, ɔ* を持つ語根(開かれた語根)の後ろでは接合母音 *a, ɔ* は用いられない. 가, ただし가아ではない⁽⁵⁹⁾, 가다から; 서, ただし서어ではない, 서다から.

語根と接合母音の間で末尾母音 *i, ɪ, e, ɛ* を持つ語根の後ろで, そして二重母音類 *-yy, -we, -wi* の後ろでは「わたり」の *j* が現われる. 매다 から 매여 *mæ-j-ɔ*, 되다から되여 *twe-j-ɔ* 等々. 同じ「わたり」の *j* は하다 からも하여 *ha-j-ɔ*, ただし旧正書法では하야 *ha-j-a*⁽⁶⁰⁾. この半母音は正書法の規則により *hada* 動詞にのみ与えられる. 하여, ただし피여ではなく피어, 되여ではなく되여⁽⁶¹⁾.

しかし実際にはこの規則は普通は守られない. 이르 (다) <至る>, 누르 (다) <黄色い>, 푸르 (다) <青い>は接合母音 *y* の代わりに ㄹ が接尾される⁽⁶²⁾.

[注] 末尾音節(音節であって母音ではない!) *o* あるいは *u* (子音間で隠されない)に接合母音 *a, ɔ* が接尾すると, これらの *o, u* は鳴音 *w* に移行する: 오다から와 *w-a*, ただし오아 *o-a* ではない; 싸우다から싸워 *ssaw-ɔ*, ただし싸우어 *ssau-ɔ* ではない. 語根の末尾母音が *y* なら, それは落ちる. 크다から키 *kh-ɔ*, ただし크어 *khy-ɔ* ではない⁽⁶³⁾.

接合形態素の後続要素(接尾辞あるいは語尾)への接合形態素の従属性:

a) 接合母音 *y* が用いられるのは次の場合である: *m, p, l (r)* で始まるすべての語尾の前; 接続形を作るのに役立つ *n* で始まる語尾の前(従って対立=譲歩の *-나* の前であって, 終止形疑問形の *-나* の前ではなく); *s* で始まる接尾辞の前.

例外: 語尾 *-ㄴ* と *-소서* (前者は接続形ではなく連体形であり, 後者は単語変化(屈折)接尾辞ではない)は接合母音 *y* を要求する; 直接話法命令形 *-라* は接合母音 *a, ɔ* に接尾する.

b) 接合母音 *-a/-ɔ* は語尾 *-라* (直接話法命令形), *-서* 及び助詞 *-는, -도, -야* の前に用いられる. 起源的には同じ形態素は過去語尾 *-ㄷ* の前でも用いられる; 「接合形態素 + *t*」という起源的な結合は今では1つの形態素—過去のしるし *-았- / -었-* と認められる.

他のすべての語尾と接尾辞は接合形態素なしに接合される(より正確には, マイナスの接合形態素によって接合される). これは *t, ɕ, k* で始まるすべての語尾, *s, n* で始まるすべての終止形(例外は *-소서*; 上を参照)及び2つの同音異義形: *-는* (連体形語尾と現在接尾辞)である.

[注] 1. 規範文法の観点からはっきりしないものに語尾 *-ㄷ* の接尾方法がある. ソウル方言ではそれは *t* で始まる語尾を支配する一般的な規則に従う(上を参照). しかしこの接尾方法は標準語の規範とは認められない. 一部の朝鮮人言語学者はそれは接合母音 *y* を要求する *t* を頭音とする唯一の語尾だという. 他の言語学者は *twe* の前の接合母音 *y* は語根 *있-, 없-* の後ろ,

接尾辞 -았- / -었- 及び -겠- の後ろに来られると看做している; 例: 받되, ただし받았으되, 있으되, 없으되. 一連の方言 (例えば, 平安道, 慶尚道) では状況は逆である. すなわち語尾 -되は接合母音を要求するが, 語根있- と없- の後ろでは用いられない.

2. 接合形態素 *y* の問題は朝鮮言語学で一致した解決を見ていない. 一連の著者は *y* は特別な形態素をなさず, 語尾における頭母音となる, すなわち받-으-나 ではなく받-으나と見る. 他の者は *y* を語根の末尾母音と見る, すなわち받-으-나ではなく받으-나と見る.

接合形態素 *-a-* / *-ə-* は朝鮮語の接続形の 1 つと同義的である. 単語먹어では末尾の母音は接続形のしるしだが, 単語먹어라では語尾라の前の母音 ɔ は接合母音である.

何人かの言語学者は名詞にも接合形態素を見ている. そのような形態素とかれらが看做すものは述語の位置にある名詞の後ろの *-i* である. しかしその際に接合形態素が 2 つの他の形態素を結びつけるが, それ自身は非意義的であるという単語の要素であるのに対して, *i* は, 第 1 に, 単語 (この場合名詞) の部分ではなく, 第 2 に, それが一定の意味を持っており, 先行する名詞の述語的性格を示しており, 従ってヨーロッパ諸語の繫辞の等価物であることによって接合形態素とは異なるということが忘れられている.

§11. 語根複合 (語根結合) 上でわれわれは朝鮮語の単純形態素を見た. これから複合形態素の移ろう.

語根複合とは最低限 2 つの語根からなる複合形態素である. 語根複合に入る要素の結合方法によって語根複合は形態論的に表されるもの及び表されないもの, すなわち隣接するものに分かれる.

第 1 の場合先行する語根と後続する語根の結合は語尾によって実現される. 第 1 の語根を第 2 の語根と結ぶ語尾としてもっともよく現われるのは接続形 (*-a-* / *-ə-*) であり, もう少しまれには連体形 (*-l-*, *-n*) である. 例: 넘어가다: 넘다と가다から, 날짐승: 날다の連体形날 (語根と同音異義形) と짐승から. この方法による結合は第 1 の (先行) 要素が用言語根であるところにおいてである.

隣接とはいかなる結合要素もなしに先行の語根と後続の語根の直接の結合である. 例: 눈사람: 눈と사람から, 밤낮: 밤と낮から.

2 つ (以上) の語根が結合して 1 つの語根複合になる場合にはこれらの語根の境界では音声変化が生じ得る. これらの変化の 1 つは第 2 の (後続) 語根の頭音に関するものであり, もう 1 つは第 1 の (先行) 語根の末尾音に関するものである.

第 2 の語根の頭音に関する音声変化:

a) 頭の弱音 (*p, t, č, k, s*) の強音 (*pp, tt, čč, kk, ss*) との取替え. 例: 나룻배 : 나루と배から, 물가: 물と가から. このような取替えが可能なのは, 第 1 の語根の末尾音が母音あるいは鳴音 (*l, m, n, ŋ*) であるところだけである. この規則は多くの例外を持つ.

b) 拗音の二重母音類 (*ja, ju* 等々) あるいは *i* で始まる語根における頭音の *n* の出現. 例: 아랫이 *arenti*⁽⁶⁵⁾: 아래と이から. 起源的にはこれは似たような単語にかつて存在した頭音の口蓋化音 *n* (頭の位置で消えた) の保存以外のなにものでもない (単語<齒>はかつて니と発音された).

弱子音から無気強音への移行を表記で表すいくつかの方法が存在する: a) 「中間の」*s* (2つの語根の間に挿入): 물^s가; この方法は今では廃れている; b) 「中間の」アポストロフィ (2つの語根の間に挿入): 물'가; この方法は未完の 1949 年の正書法で推奨されたが, 実現されなかった⁽⁶⁶⁾; c) 「継ぎ足しの」*s* (第 1 の語根が母音で終わっていれば第 1 の語根末尾に *s* を挿入, ただしそれ以外の場合には挿入しない, 従って正書法的に表された移行は存在しない): 나룻배, しかし물가. この方法は 1933 年と 1948 年の正書法で推奨された. これはこの著述で採用されている⁽⁶⁷⁾. d) 頭の弱音の強音への取り替え: 나루배, 물까; この方法は正書法にもとるものだが, 実際にはしばしば朝鮮の印刷物に現われ, それゆえ朝鮮語の研究者には, 特に辞書に関する作業で考慮に入れるべきものである.

第 2 語根の頭での再興された *n* は第 1 語根の末尾における「継ぎ足しの」*s* によって表される: 아랫이 *arenti*⁽⁶⁵⁾. それを *n* で表すのは正書法にもとる: 아래니.

意味的観点からはすべての語根複合は次のものに分けられる: a) 名詞的語根複合 (最後の語根が名詞): 눈물<涙> (逐字的には<目水>), 날짐승<鳥> (逐字的には<飛ぶ獣>); b) 用言的語根複合 (最後の語根が動詞か形容詞): 오가다<行き来する> (逐字的には<来る=行く>), 성내다<怒る> (逐字的には<怒り出す>). この分類の基礎には第 2 語根の性格が取られている. この共通した分類の内部で第 1 語根の性格を基礎に置いたもっと詳しい分類が行われ得る: 例えば, 名詞的複合はその内部に a) 頭に名詞的複合を持つ複合: 눈물, b) 頭に動詞的複合を持つ複合: 날짐승等々.

文法的観点からはすべての語根複合は次のものに分かれる: a) 同種 (2つの成分が対等): 밤낮; b) 非同種 (一方の成分が他の成分に従属する): 손목<手首> (逐字的には<手の首>). 非同種複合は非同種性の性格によってもっと細かい部類に分けられる; 例えば, 빗방울<雨粒>のタイプの結合が성내다<怒る>のタイプの結合と異なるのは, 例えばロシア語で “*dozhdevaja kaplja*” <雨のしずく>が “*izlivat' gnev*” <怒りを吐露する>と異なるのと同じである.

結合の程度の観点からは語根複合は自由な語根複合と不自由な語根複合に分

かれる。第1の場合2つの要素の間の結合は第2の場合よりも著しく弱く、それゆえ語根複合はしばしば等価的な単語結合（連語）に等価物を持ち得る⁽⁷⁰⁾。例えば, 애쓰다は애를 쓰다という形で等価物を持ち, 밤새우다は밤을 새우다という形で等価物を持つ, 等々。これらの極点は多くの中間段階を持っている。

最後に, 量的な観点からは語根複合は2項的と多項的とに分かれる。大部分の朝鮮語の固有語の語根複合は, 上に引かれた例が示すように, 2項的である。多項的複合は漢字語に特徴的である。多項の基本的タイプ: 2+2 (例: 국가기관 [国家機関], 1+2 (부수상 [副首相], 2+1 (기계류 [機械類]). 2+2のタイプの多項は二重に理解され得る。すなわち4つの語根からなり, 2つずつグループ分けされた複合語とも, 2つの複合語からなる単語結合（連語）ともとれるのである。このタイプの多項の真の性質についての問題はいまのところ未解決である。

§12. 語基と語幹 接合形態素が継ぎ足される単語の部分は語基と名づけられる。語基に接合形態素を接合すると, その結果複合形態素が生じるが, これは語幹と呼ばれる。

接合形態素は語根に付き得るが, この語根は今度は語幹を作るための語基となる。この際接合形態素は語根を接尾辞あるいは語尾と結ぶ。語根と接合的形態素からなるような語幹は非派生語幹と呼ばれ得る。現代朝鮮語では非派生語幹は, マイナスのもの（接合形態素がゼロ母音）を含めて, 3つあり, 古代朝鮮語⁽⁶⁹⁾では4つだった。語幹のしるし: a) 第1語幹—ゼロ母音; b) 第2語幹—接合形態素 -으-; c) 第3語幹—接合形態素 -아- / -어-。物質的に異なる3つの語幹はすべての語根から作られるというのでは全くない。接合形態素 -으- と -아- / -어- の接合の条件によって説明される (§10 参照)。それゆえ3語幹形とともに2語幹形（第1語幹と第2語幹が一致する）及び1語幹形（3語幹が一致）さえある。例:

	막다<塞ぐ>	보다<見る>	가다<往く>
第1語幹 ⁽⁶⁸⁾	막 <i>mak-</i>	보 <i>po-</i>	가 <i>ka-</i>
第2語幹 ⁽⁶⁸⁾	막으 <i>mag-y-</i>	보 <i>po-</i>	가 <i>ka-</i>
第3語幹 ⁽⁶⁸⁾	막아 <i>mag-a-</i>	보아 <i>po-a-</i>	가 <i>ka-</i>

ロシア語で “*kost*” <骨>のタイプの単語で “*kosti*” 形は3つの格（属格, 与格, 前置格）と認めるように（音声的に形が一致しても), それに似て, 朝鮮語でも表の第2及び第3系列の単語において3つの語幹（完全に, あるいは部分的に互いに一致する）を数えることが出来る。それが実用的にも便利である。

3つの音声的に異なる語幹（表の第1系列参照）は末尾子音を持った語根（“*t* ~ゼロ” のグループの語根, また종다のタイプの語根 (§3 参照) を含む）から

作り得る. 2つの音声的に異なる語幹は아, 어以外の末尾母音を持つ語根, また “*p ~ u/w*” 及び “*l ~ ゼロ*” のタイプの語根から作られる; “*l ~ ゼロ*” のタイプの語根では第1語幹と第2語幹は2つの変種, すなわち *l* を持った完全なもの (例: 알다<から<알-) と *l* のない短いもの (알다<から<아-) を持つが, 3つの単語 이르다<至る>, 누르다<黄色い>, 푸르다<青い> では第3語幹のしるしは -리である⁽²⁵⁾. 末尾母音ㅏとㅑを持つ語根では3つの語幹のすべてが一致する (表の第3系列参照).

接合形態素は接尾辞に接尾し得るが, 接尾辞は (先行語根とともに) かくして語幹を作るための語基となる. この場合接合形態素は接尾辞を他の接尾辞あるいは語尾と結びつける. 単語変化 (屈折) 接尾辞のある語幹は派生語幹である. 派生語幹は, 非派生語幹同様, 同じ特徴を持ち3つある. 音声的に相互に異なる派生語幹はすべての接尾辞から作れるわけでは全くない. 3つの音声的に異なる語幹は過去及び未来の接尾辞からだけ作り得る; 2つの音声的に異なる語幹は末尾母音 *i* を持つ接尾辞から作り得る; 末尾音ㅑを持つ, また正書法上末尾音ㅓを持つ接尾辞と接尾語 (다랴다) では3つの語幹は一致する. 例:

	過去派生語幹	人称 ⁽⁴⁷⁾ 派生語幹	目的派生語幹
第1語幹	막았 <i>mag-at-</i>	보시 <i>po-si-</i>	보려 <i>po-rjㅓ</i>
第2語幹	막았으 <i>mag-ass-y--</i>	보시 <i>po-si-</i>	보려 <i>po-rjㅓ--</i>
第3語幹	막았어 <i>mag-ass-ㅓ</i>	보시어 <i>po-si-ㅓ</i>	보려 <i>po-rjㅓ</i>

派生語幹はそれが作られる当の接尾辞によって名づけ得る (表参照).

上述のことから, どの派生語幹も非派生語幹を含んでいることになる (例えば, 第3派生語幹받-으-시-어- には第2非派生語幹받-으- が含まれている). このことからまた, 同じ単語にいくつかの単語変化 (屈折) 接尾辞がある場合, それは異なる程度のいくつかの派生語幹を含むことになる.

複合形態素としての語幹は動詞と形容詞, さらに動詞あるいは形容詞から作られた名詞にのみ現われる.

繫辞もまた語幹を持つ: 이다: 第1語幹이-, 第2語幹이-, 第3語幹이-어-. 末尾母音を持つ名詞の後ろで繫辞이-の語根は落ちる: 말-이다, ただし소-다.

文法の対象としての単語

単語の構造の分析はこの構造のどのような要素が単語を文法, 形態論の対象とするかを規定せしめる.

a) 単語가다<行く>を例に取ろう. <行く>は単語の語彙的意味である. 語彙的意味は個々の対象, 性質, 動作, 状態について言語に表された概念である; 単語の語彙的意味は生活の個々の側面を反映している. 単語가다<行く>は客観的な現実に見られる動作の一つについての概念, 辞書が「移動, ある方向への

動き」と規定する概念を表す。語彙的意味を研究するのは語彙論、言語の語彙構成に関する学問である。この点では単語가다は語彙論の対象である。単語가다を単語変化(屈折)接尾辞 -시- で複雑にしてみよう(가시다)。単語の語彙的意味はこの接尾辞が接尾することによって変化しない。すなわちそれは以前のとおり「移動、ある方向への動き」を意味するだろう；接尾辞 -시- は単語가다に表されている動作は幾分制限して述べなければならず、まさに 2 人称あるいは 3 人称に関してのみ、なんらかの意味においてこの人称の状態が話し手の状態よりも上であるという補足的指示をとまって述べなければならないのである。(「あなたはいらっしゃる」、「あの方はいらっしゃる」)。接尾辞 -시- がなんらかの新しい動作(例えば「行く」ではなく「急ぐ」)を表す単語の形成を助けないのならば、その観察は語彙論からは除外される；語彙論は、すでに述べたように、対象、その動作、性質等の名づけと関連したすべてのことに関心を持つのである。単語가시다を今補足的に接尾辞 -었- で複雑にしてみよう(가시었다)。この場合でも単語の語彙的意味は変わらないであろう。すなわち同じ「移動」、「ある方向への動き」に関するものであろう。接尾辞 -었- は単語가다にすでに表されている動作自体については幾分制限付きで述べ、単語가시었다を話しの瞬間以前に、すなわち過去に起きた「空間における移動」にのみ用いること(あなたはいらっしゃった)を示している。接尾辞 -었- が新しい動作(例えば、歩いて行くのではなくて乗り物で行く)を表すことを助けず、単語の表された動作を時間において限定するだけならば、それは語彙論の対象ではない。語彙論はそれを研究しない。われわれは 2 つの例で単語変化(屈折)接尾辞の語彙との関係についての問題を眺めた。単語変化(屈折)接尾辞が語彙に対して関係がないことが明らかになった。語尾と移動的接尾辞を見ても似た結果が得られるだろう。しかしもしも単語のこれらの要素が語彙となんらの関係も持たず、単語の語彙的意味と関連がなければ、もしもそれらの要素が言語の語彙の貯えを補充することに参加しないならば、それらはどんな機能を果たしているのか？ 多分それらは何も意味しないのか？ いや、この推定が無意味なのは、言語のいかなる要素も意味あるか、少なくとも意味あったからである。しかしそれらは一体何を意味するのか？ 上に見た例の 1 つ:가시었다に戻ろう。この単語では一定の動作の担い手(文法ではこれを主語と呼ぶ)と関連ある一定の動作が表されている(例えば、あの方はいらっしゃった)。もしも接尾辞 -었- の役割を熟考するならば、それが、語根に表された動作が話しの瞬間以前に主語との関係を持つという意味、すなわち文法が「過去」という術語で記録している意味をだいたい持っていることを容易に明らかにし得る。もう 1 例:가엿다(形態論的に *ka-jot-te*⁽⁷⁹⁾) <彼は行った(わたくしは)それを見た>、ここではテンス接尾辞 -었- の後ろに語尾 -다가が続いている。この語尾を熟考するならば、

それは語根に表される動作の主語との関連、この動作の主語との関係が疑いなくわたくし、話し手によって個人的に証言されているという意味、すなわち文法が「目撃法」という術語で記録している意味をほぼ持っていることを容易に明らかにし得るのである。われわれの認定するところでは、これらのすべての意味は特別なものである。それらは動作自体の性質を変えず（行くことは行くことのままである）、動作のその担い手との関係だけを変え、この関係の異なる性格を示している。そのような意味を言語学では文法的意味と名づけ、その意味を表すものを文法形式と名づけることになっている。文法形式が動作の主体との関係の異なる性格だけでなく、逆に、主体の動作との関係の異なる性格、そして動作の対象との関係をも表し、動作だけでなく特徴、性質等々をも表し得るのは当然である。しかしこれらの関係がいかなるものであれ、それらには1つの共通したもの、すなわち関係自体がある。文法的意味、それを表す単語と形式はすでに語彙ではなく文法が研究するのである。

かくして単語の構造においては最初の形態素グループが取り出されるが、それは形式の側からも意味の側からも文法の対象なのである。それは単語変化(屈折)接尾辞、移動的接尾辞及び語尾である。

b) 今単語노동 [労働] <労働>を取ってみよう。<労働>は単語の語彙的意味である。この側面からはこの単語は語彙論の対象である。今この単語に単語形成(造語)接尾辞 -자 [者] を付けてみよう(노동자 [労働者])。単語の意味は変わり、接尾辞は質的に異なる意味を持つ全く新しい単語を作る。同じ機能を果すのが接頭辞である。単語옷は<服>を意味する；接頭辞한⁽³⁹⁾ を付けると単語の意味を変える：한옷⁽³⁹⁾は服の一定の姿；<綿入れの服>を意味するだけである。このように接尾辞も接頭辞も新しい単語を作ること、言語の語彙構成を補うことに参加する。この点で単語形成(造語)接尾辞(また接尾語も)と接頭辞は語彙論の対象であり、語彙論は言語の語彙がどんな手段で補われるかという研究の任務をも持つのである。この観点からは語彙論には語根複合の研究も属する。なぜならば語根結合も言語の語彙を補う方法の1つだからである。しかし単語形成(造語)接尾辞と部分的には接頭辞は形態論とも劣らず緊密に結びついている。実際に、例えば, 이のような接尾辞は形容詞갈다の語根に付いて、新しい単語갈이を作るだけでなく、形容詞を名詞にする、すなわち単語をある部類から他の部類に移行させ、そうすることによって朝鮮語の品詞の1つを作る方法と手段の1つとなるのである。しかし品詞は普通は形態論の対象である。従って、単語形成(造語)接尾辞は、それが品詞を作る手段の1つとなるのであるから、形態論、品詞論の対象でなければならないのである。同じことは、単語形成(造語)接尾が派生させる単語に接尾した場合にある品詞から他の品詞への移行を伴わない単語形成(造語)接尾辞についても言える。

勿論接尾辞 -군が接尾辞이と異なるのは, -군이名詞にのみ接尾し(例: 나뉜군, 나뉜から), 新しい名詞を作るが, 新しい意味を伴っていることによってである。しかし接尾辞 -군의意味はなんらかの新しい意味を作り, かくして言語の語彙を補充するにとどまらない。この接尾辞の意味は(それに類似するいくつか他のものと並んで), なおも, それがいわゆる「人間名詞」という特別の部類の名詞を作り(일군, 나뉜군等々), そのことによって間接的に全般的に名詞を作っているということにある。なぜならば名詞はそのような部類(「人間名詞」, 「道具名詞」, 「動作名詞」等々)の総体からなり, これらの部類の総体だけが品詞のポテンシャルと名づけ得るものを作るからである。かくして, 単語形成(造語)接尾辞(及びある程度において接頭辞も)は中間的な位置を占める, すなわち単語形成(造語)接尾辞は, 一方では語彙の側面, 言語の語彙構成を補充する方法についての論を扱い, 他方では, なんらかの品詞の形成に参加するから, 文法, 形態論を扱うということになる。

このように, 単語の構造においては第2の形態素グループが取り出されるが, これは自身のある側面が形態論に隣接している。それは単語形成(造語)接尾辞(より少ない程度において接頭辞), 接尾語である。ここで語彙は緊密に文法と隣接している。しかし単語変化(屈折)接尾辞と語尾の研究に移行すると, われわれは完全に文法の分野にいたのであって, これらの構造的要素によって単語は完全に文法の役に立つようになるのである。

II. 品詞と小品詞

朝鮮語のすべての単語は2つのグループに分かれる。1つのグループに入るのは対象, その性質, 特性, 動作, 状態, 過程等々の名づけとなる単語である。これは品詞である。もう1つのグループに入る単語は, その基本的な意味が第1種の単語の間の関係の表示, すなわち第1種の単語に固有な意味の補足的なニュアンスの表示である。これは小品詞⁽⁷¹⁾である。朝鮮語には6つの品詞: 名詞, 数詞, 動詞, 形容詞, 副詞, 間投詞と3つの小品詞: 後置詞, 接続詞, 助詞⁽⁷²⁾(本来の意味で)がある。特別な部類をなすのは間投詞である。若干の部類の形容詞は動詞に非常に近いので, 両者を用言という1つのグループに統合し得る。

1. 名詞

§13. 名詞の語彙構成の特徴づけ 現代朝鮮語のすべての名詞は4つのグループに分かれる: 第1のグループには非派生名詞が入る(산 [山], 봄, 딸)。第2のグループには語根の付け足し(語根合成)という方法で作られた名詞が入る(칼집, 칼と집から)。第3のグループには接辞(接頭辞, 単語形成(造語)接

尾辞)によって作られる名詞が入る(나뭇군, 나무から; 침략자 [侵略者], 침략 [侵略] から; 함웃⁽³⁹⁾, 웃から). 第4のグループには他の品詞の名詞化の方法で作られる名詞が入る.

名詞化 語尾 -ㅁは動詞の第2語幹に接尾して不定詞を作る, この不定詞は多くの場合名詞化し, 次の意味を持つ名詞を作る: **a)** 動作名詞: 춤, 추다から; **b)** 動作結果名詞: 그림, 그리다から; 얼음, 얼다から; 열음<実>⁽⁷³⁾, 열다<実る>から. 時に形成の規則性は壊れ, 第2語幹の代わりに第3語幹が用いられる: 무덤, 묻다から; 주검, 죽다から; ここでは不定詞との関連は感じられず, このことは正書法にも現われている. 名詞化は形容詞の不定詞も起こし得る: 기쁨, 기쁘다から.

接辞づけ 名詞接尾辞は他の名詞, そして動詞と形容詞からも名詞を作る.

接尾辞 -이は形容詞から性質名詞を作る: 깊이, 깊다から; 더위, 더웁다⁽⁷⁴⁾から; 추위, 춥다から. 語根の接尾辞との結合の結果単純化が起こり得る: 키, 크이의代わりに, 크다から; 무게, 무거이의代わりに, 무겁다から等々.

接尾辞 -개 / -게とその並行的変種 -애 / -에は動詞の語根に設備して, 道具, 手段というもとても頻繁な意味を持つ名詞を作る: 날개, 날다から; 집개, 집다から,あるいは語根の変形を伴って, 부채, 부치다から. 개と게, 애と에における母音の違いは母音調和の規則と関連があり(上を参照), 接尾辞頭音の違いは語根末音の性格と関連がある.

非常にまれに名詞は接尾辞なしに動詞語根の名詞への転換の方法で作られる(신, 신다から; 띄, 띄다から⁽⁷⁵⁾).

ある名詞から他の名詞を作る大部分の名詞接尾辞 (§5 参照) は -자 [者] (주최자 [主催者], 주최 [主催] から), -가 [家] (전문가 [専門家], 전문 [専門] から), -사 [師] (조각사 [彫刻師], 조각 [彫刻] から), -부 [夫] (농부 [農夫]⁽⁷⁶⁾, 농 [農] から), -장이 (-쟁이) (신쟁이, 신から), -군 (일군, 일から) 等である. これらの接尾辞のうち -장이 / -쟁이는なんらかの身体的欠陥を持つ人を意味する(この場合派生する単語は普通は性質動詞語根である): 귀먹쟁이, 귀먹다から.

抽象化された動作の意味を持つ接尾辞はもとても頻繁に用いられるのは질である: 낚시질, 낚시から; 로질 [櫓ー], 로 [櫓]⁽⁷⁷⁾から, 等々.

名詞のすべての接尾辞がそれと派生させる単語との関係の観点から明瞭なのではない. 例えば, 動物の子どもを表す接尾辞 -아지는, 땅아지, 송아지等の名詞を作るが, これらの単語の語根땅- 及び송- の自立語말及び소との間の関係が不明瞭である⁽⁷⁸⁾.

語根合成 語根合成とは新しい単語を作るもとても生産的な方法の1つである. その際特に大きな役割を演じるのは漢字語語根である. 複合語はそれを構

成する諸要素の統一体である。すなわち諸要素の間には意味を壊すことなしには格の形成素を挿入することが出来ない（눈물은 눈과 물からなるが, 눈의물<目の水>は<涙>を意味しない）；諸要素の音声的溶接は第2の語根の頭の弱音を強音（長音）に変えること（それが可能なら）に現われる：아침밥 *ačhimppap*, *ačhimbap* の代わり, 아침과 밥から；잠자리 *čamččari*, *čamdžari* の代わり, 잠과 자리から等々。合成される要素の間には2種類の関係, 同等的と非同等的がある：밤낮, 마소（同等的関係）；돌담, 댕줄（非同等的関係）。

§14. 本来の名詞と補助名詞 名詞は本来の名詞と補助名詞⁽⁸²⁾の2つの部類に分けられる。両者の違いは前者が名づける機能を持つのにに対し, 後者が文法的機能を持つことにある。補助名詞は通例先行する規定語なしには用いられない。以下に統辞論で見るように, このことは補助名詞が表す特別な文法的機能と関連がある。若干の名詞は中間的な状態にある。すなわちそこにはある場合は語彙的な, ある場合は文法的な意味が優勢である。例えば, 名詞길の基本的な意味は語彙の意味<道>であり, その文法的意味<途中>は副次的なものである；この第2の意味ではそれは規定語なしに用いられる。名詞에의基本的意味はロシア語に対応の等価物を持たない文法的意味であり（統辞論参照）, その語彙の意味<場所>は文法的意味との関係において副次的である（歴史的に, 起源的には語彙の意味が基本的なものではあるが）。そのような名詞は本来の名詞と補助名詞の中間的なものである。最後に, いくつかの語彙の意味と文法的意味が同音異義的であり得る。<間（pauza）>という意味의사이は<間（poka）>（付加的な時間のしるし）という意味を持つ文法的な사이とは, 歴史的にはそれらは相互関連あるものであることとは関係なく, 同音異義語⁽⁸⁰⁾である。

補助名詞の例として次のものがあり得る：것, 이, 자 [者], 수, 마等々。これらの名詞の意味は非常に抽象的なので（このことは, 抽象的な意味を持つあらゆる名詞がそのこと自体で補助名詞であることを意味しないのにもかかわらず, 文法的意味にとっては完全に理にかなっている）, ロシア語訳がそれらの真の意味を反映せず, 時に不可能である（例：술）。補助名詞の数は少ないが, 文法についてのそれらの意味は著しいものがある。すなわちそれらは単語, 単語結合（連語）, 文の間の関係を表す手段の1つとなるのである。

いくつかの補助名詞（例：方言的な호）はそれ自身の基本的な特徴により代詞⁽⁸¹⁾に似ている。それゆえそれらを代名詞⁽⁸¹⁾と呼ぶことが出来る。

§15. 名詞のクラス 本来の名詞の方はもっと細かい部類に下位分類される。この分類はさまざまな線に沿って行われる。そのような分類の1つはクラスによる分布である。この分類の基礎にあるのは, 名詞によって表される対象の, な

んらかの外的な, 感覚=知覚的な特徴による分類である. 各々のクラスを特徴づけるのはクラスに固有ななんらかの特徴 (これは非常に近似的, 時にはかなり条件付きのものであり得る), すなわち円筒形 (巻きタバコ, 釣竿, 丸太等) だったり, 球形, 卵形 (どんぐり, 栗, クルミ等) だったり, 平面 (紙, 手紙等) だったり, 長方形 (スプーン, 指, 毛髪等) だったりである. ある対象が取り出されるのはそこに取っ手があることであり (庖丁, 鋏, 拳銃等), 他のものは下の支え, 台があることによってである (飛行機, 機械等). これらの対象を表す名詞はどれ 1 つとして外的な形態論的特徴を持っていない. しかしそれにもかかわらずこれは文法範疇である. なぜならば文法範疇の存在は対象を数える際に, 数詞が助数詞⁽⁸³⁾ (これは名詞のクラスと同じくらいある) によって形成される時に, 識別されるからである. この接尾辞は固有語のと漢字語のとある. 固有語の例として가락 (長方形を数える), 대 (円筒形の対象を数える: 煙突, 巻きタバコ, 枕木, 筆等), 알 (小さい円形, 卵形の対象を数える: 豆, クルミ, 栗等), 漢字語の例として호 [戸] (建物を数える), 대 [臺] (台のある対象を数える: 飛行機, 自動車, 機械等), 매 [枚] (平面のある対象を数える: 新聞, 煉瓦, 切手等) 等々がある. 人間そしてファウナも特別なクラスに分類される. 人間には助数詞명 (より丁寧には분), ファウナには固有語助数詞마리가割り当てられる. 特別な助数詞が割り当てられない対象は中立的なクラスである. このクラスはまた接尾辞개をも持ち得るが, これは対象性一般の接尾辞と名づけることが出来る.

助数詞は数量詞 *schetnye slova* と混同してはならない. 数量詞は, 個数として数えることが不可能な対象 (例: 穀類), あるいは, 個数で数えながらも, それが入れられた容器で計られる対象 (例: 荷馬車 *voz* で数えられる薪 *drova*) を数える際に用いられる名詞の部類である. これは畚<握り>, 병 [瓶], 잔 [盞] <杯> 等々のような単語である. これらはすべて数量詞であって助数詞ではない. 数量詞を要求する名詞は物質名詞と呼ばれる.

§16. 有情性=無情性 すべての本来の名詞は有情名詞と無情名詞の 2 つの部類に分けられる. そのような分類は次の文法的特徴によって現われる: a) 2 つの与格によって: 1 つ (-에게) は人間, 動物の関係で用いられ, もう 1 つ (-에) は対象の関係で用いられる; b) 与格から派生したすべての格によって: -에서無情名詞, ただし -에게서有情名詞, -에로無情名詞, ただし -에게로有情名詞, -에를無情名詞, ただし -에게를有情名詞; c) 有情名詞に関してのみ可能な後置詞によって: -한테, -더러⁽⁸⁴⁾ (§92).

동생더러 「너 누가 제일 고우냐」 하고 물었다.

나는 아버지나 어머니한테서는 생전 한번도 맞아 본 적이 없어요.

[注] 1. 有情名詞には国名も入ることがある.

2. 無情の対象は芸術的取り扱いとしての擬人化の場合は有情名詞のように意識される.

§17. 人間=非人間の範疇 上に列挙された特徴によって動物, 鳥, 虫等が人間とともに 1 つの有情名詞の範疇に統合されるならば, 他の特徴によってそれらは対象とともに 1 つの非人間の範疇に統合され, 人間の範疇をなす人間に対立する. そのような特徴は 2 つある: a) 2 つの代名詞^{누구}と^{무엇}; このうち前者は人間にのみ用いられ得, 後者は非生物界及び人間以外のすべての生物にのみ用いられ得る; b) 2 つの主格の存在; このうち 1 つは人間, 非人間に関係なしに用いられるが, 第 2 のものは一定の条件で (尊敬という補足的なニュアンスとともに) 人間にのみ用いられ得る.

선생님께서 「미역을 감기로 하자」고 말씀하셨습니다.

これで見るように, 人間と非人間の分類は有情名詞と無情名詞の分類ほどには形態論化されていない.

§18. 数の範疇 朝鮮語の名詞はその語彙的形において, ロシア語とは異なり, 単数も複数も表さない. 対象が名づけられるだけとか, 具体的な環境の外にある対象, なんらかの対象一般が問題となる場合, 単数も複数も必要でないことは, <鳥は飛び, 魚は泳ぐ>というタイプの文がロシア語で “*pticy letajut, a ruby plavajut*” [複数], “*ptica letaet, a ryba plavaet*” [単数] とともに, これらの場合に表現されるとはいえ, 重要でないことと同じである. 朝鮮語ではそのような場合にさえそれは表現されない: 말は ‘loshad’ と ‘loshadi’ [英: ‘horse’, ‘horses’] を表し, 집は ‘dom’ と ‘doma’ [英: ‘house’, ‘houses’] を表す. 一定の対象 (例: この机の上にある本) が問題となる場合, 数は表され得る. 多数だけが表される. 一定の対象について数のしるしがないことは対象についてのみ問題となることを意味している. 数は語彙的と文法的の二様に表され得る. 語彙的には数は数詞, 量的意味を持つさまざまな種類の単語で表される: 例: 여러나라 (여러は多くの国を示す). 語彙的に表された数は文法範疇ではない. 文法的には数は数えられる名詞でのみ表される. 多数を表す 2 つの方法がある.

a) 多数の移動的接尾辞 -들 (各語尾の前の名詞の語根に接尾する): 나라들, 사람들, 인민들 [人民-], 동물들, 농민들 [農民-] 等. 多数と考えられる人間の主語が想定される場合, この文の多数の指標は文の中のなんらかの他の単語, 普通は副詞, 代名詞あるいは補語の名詞に接尾される. 例:

일 잘들 하여라! / 어디로들 가시오? / 무엇들 합니까? / 어서들 이리 와! / 그렇지들 마시오! / 왜? (若干の話し相手, 聴衆に向けられた質問で) / 안녕들

하오!

[注] 接尾辞 -들을をその同音異義的な単語들(未完の列举を示し, かくして 2 つ以上の同種的な名詞の後ろに用いられる: 소 말 돼지 들<牛, 馬, 豚ら>)と混同してはならない⁽⁸⁵⁾.

b) 名詞語根の重複; この方法では分離的多数が表される; これはこの多数をなす対象が個々の例を示すことを含まれるような多数のことである: 사람사람<各々の人>, <人々>, 집집<各々の家>, <家々>; 漢字語をも参照せよ.

평화 옹호 상설위원회 호소문에 가가 호호 서명하였다.

[注] 朝鮮語のいわゆる漢字語をなす名詞では多数性は接頭辞で表され得る. もっとも多く用いられるのは제- [諸] と각- [各]⁽⁸⁶⁾である; 前者は意味上接頭辞に近く, 後者は語根の重複の類似物である: 제국가 [諸国家], 각신문 [各新聞]⁽⁸⁶⁾.

§19. 名詞の曲用. 格の範疇 朝鮮語のすべての格語尾は 2 つのグループに分解する: 1 つのグループに入るのはいわゆる非並行的語尾, すなわち末尾の開音節を持つすべての名詞にも閉音節を持つすべての名詞にも共通な語尾であり, もう 1 つのグループに入るのはいわゆる並行的語尾, すなわち同一の格的意味を持ちつつ音的に互いに異なる語尾である: 例: -가と -이—主格の 2 つの並行的語尾, -를と -을—対格の 2 つの並行的語尾 (ロシア語における類似の現象 “rukoj”<手> [女性単数具格], “nozhom”<ナイフ> [男性単数具格], “polem”<畑> [中性単数具格] 参照). 並行的語尾の存在は語根の最後の音節の性格と関連がある. 末尾の開音節を持つ名詞はある変種の格語尾を要求し, 閉音節を持つ名詞は別の変種の格語尾を要求する. それゆえ朝鮮語においては 2 つの曲用があり, 第 1 曲用には末尾の開音節を持つ名詞が属し, 第 2 曲用には末尾の閉音節を持つ名詞が属す: 例: 바다, 보리, 다리는第 1 曲用の名詞であり, 밤, 눈, 잎は第 2 曲用の名詞である. 母音で始まる格語尾が付くと, 第 2 曲用の名詞の部分はある子音を他の子音に取り替える; 例: 잎 *čip* の主格잎이 *čiphi* では *p* が *ph* と取り変わる. これは語幹交替と呼ばれる. 第 2 曲用のどんな名詞で末尾子音が交替し, どんな名詞で末尾子音が交替しないかという規則を示すことは不可能である; 交替する名詞は暗記する必要がある. 例えば, 입は交替しない *p* を持つが, 잎は交替する *p* (*p*~*ph*) を持つ. これらの交替はすでに上に記述した (§3 参照).

朝鮮語の格の数の問題は今まで解決していない. この理由は 2 つある. 朝鮮語にはロシア語の前置詞の代わりにその等価物たる後置詞がある. ロシア語の前置詞は格語尾から離れている, すなわち前置詞は語幹の前にあり, 格語尾は語幹の後ろにあるが (pod gor-*oj*<山の下で>), 朝鮮語では後置詞 (前置詞

の等価物)も格語尾も語根=語幹の後ろに続き、直接隣接する。同じ単語が格語尾によっても後置詞によっても作られる時、どこに後置詞があり、どこに格語尾があるかという問題の解決は、格語尾が後置詞に先行しているのだから、多かれ少なかれ単純である。しかし後置詞が名詞に、格語尾名詞に、直接接尾する場合がある。これらの場合に問題があるのである。すなわちこの場合名詞に接尾しているのが格語尾なのか後置詞なのかということが明瞭でない。このようなのが朝鮮語で格の数を規定することを困難にさせている第1の理由である。第2の理由は朝鮮語を研究する一連の言語学者による格とはなんぞやということの間違った理解にある。この点でもっとも典型的な間違いは、格を意味的に理解することである。すなわち格とは何よりも意味だと看做す:例えば, -에, -에서, -서, - (으) 로が空間的関係を表すので, それらを所格という1つの共通の名づけで統一する; さらに語尾 -가, -이, -께서, -란, -로서が主語を表すのに資しているから, それらすべてを主格という表題のもとに入れるのである。格のそのような形態論的でなく意味的な理解が間違いで, 非文法的なことは明らかである⁽⁸⁹⁾。しかしそういうことが朝鮮学の文献に広くいきわたっており, 格に対する正しい観点の確立をも, 格の数の問題の解決をも著しく妨げているのである。この著述ではわれわれは格の数の問題の唯一の, われわれの見解では, 形態論的な解決を堅持し, 朝鮮語研究の今の段階で可能な限り, 格の語尾と後置詞を区分するよう努力する。

朝鮮語では次の格が疑いなく取り出される(第1段には第1曲用の語尾が与えられ, 第2段には第2曲用の語尾が与えられる):

1. 語幹格⁴: 語尾なしの名詞語幹
2. 主格⁽⁸⁷⁾
 - a) 一般 -가 -이
 - b) 人間 -께서 -께서
3. 呼格 -야 -아
- 여 -이여
4. 属格 -의 (-네⁽⁸⁸⁾) -의 (-네⁽⁸⁸⁾)
5. 与格
 - a) 無情 -에 -에
 - b) 有情 -에게 -에게
6. 対格 -를 -을
7. 具格 -로 -으로
8. 共格 -와 -과
9. 比較格 -보다 -보다

上に列挙された格はいわゆる第1系列を作る。これと並んで第2系列がある

が, これは所格(場所, 方向等を示す)の意味を持つ第1系列のいくつかの格語尾を互いに接尾させる, あるいは形態素서에接尾させるものである:

1. 与所格

- | | | |
|-------|------|------|
| a) 無情 | -에서 | -에서 |
| b) 有情 | -에게서 | -에게서 |

2. 与対格

- | | | |
|-------|------|------|
| a) 無情 | -에를 | -에를 |
| b) 有情 | -에게를 | -에게를 |

3. 与具格

- | | | |
|-------|------|------|
| a) 無情 | -에로 | -에로 |
| b) 有情 | -에게로 | -에게로 |

4. 具所格

- | | |
|-----|------|
| -로서 | -으로서 |
|-----|------|

これらすべての格のうち属格だけが名詞接続的である. しかし属格語尾をいくつかの他の格に接尾させることによってそれらは名詞接続的機能を持ち得る:

1. 与属格

- | | | |
|-------|------|------|
| a) 無情 | -에의 | -에의 |
| b) 有情 | -에게의 | -에게의 |

2. 具属格

- | | |
|-----|-----|
| -로의 | -로의 |
|-----|-----|

3. 共属格

- | | |
|-----|-----|
| -와의 | -와의 |
|-----|-----|

4. 与所属格

- | | | |
|-------|-------|-------|
| a) 無情 | -에서의 | -에서의 |
| b) 有情 | -에게서의 | -에게서의 |

与具属格

- | | | |
|-------|-------|-------|
| a) 無情 | -에로의 | -에로의 |
| b) 有情 | -에게로의 | -에게로의 |

[注] 1. 属格の正書法はいわゆる (L・V・スチエルバによれば)「完全な」文体で発音 -의と一致する. 会話の文体ではこの格はしばしば -eと発音され, かくして与格と一致する.

2. 末尾の l を持つ名詞では具格は第1曲用によって作られる: 말로<馬で>, ただし 말으로ではない.

3. 話し言葉では対格語尾 -를は時に -르と取り替えられる(対格のもっと古形).

4. 接尾辞 -들을持つ多数ではすべての名詞は第2曲用によって曲用するが, この場合の具格だけは第1曲用による.

§20. 格の基本的意味. 第1系列

1. 語幹格は次のものを表す手段である:

a) 思考の一定の対象としての主語: この機能では(書き言葉では普通, 話し言葉では)しばしばこの格は補足的に助詞 -는 / -은によって作られる; 助詞 -는 / -은の代わりに他の助詞を用いることが出来るが, ただし新しい補足的なニュアンスをもたらす(助詞については§§93-94 参照).

평양은 북조선에서 제일 큰 도시입니다.

思考の一定の対象としての主語という概念は「統辞論」で詳しく展開されている.

b) 直接補語; 直接補語を表すこの方法は話し言葉でのみ可能である; しばしば韻文に現われる.

돌아오는 밝은 달이 우리 아가 잠든 얼굴 곱게 곱게 비쳐주네.

c) 規定語; 語幹格がこの意味で可能なのは, 規定語(名詞)が性質的性格を持ち, その性質上関係形容詞に近づく. そのような規定語はこれと関連する本来の規定語を持つ可能性を失う. 普通は, そのような規定語は規定されるものとともに術語として機能する全一語をなす. 例: 공산주의 [共産主義], 사회 [者会], ただ 공산주의 사회 [共産主義社会]; 인민 [人民], 공화국 [共和国], しかし인민 공화국 [人民共和國] 等.

d) 呼びかけ.

김동무 이리 오십시오.

e) 繫辞이다とその派生形で繫辞接続の成分.

십일월칠일은 위대한 사회주의 시월혁명 기념일입니다.

f) 主語に先行し, 分離助詞 -는 / -은を伴う文の成分. 主語は了解される. この場合助詞 -는 / -은を持つ文の成分は主語と一致する.

그런 문제는 한말로 대답하기가 곤란합니다.

ここで -는を持つ語幹格に立つ単語は間接補語として機能している.

약은 의사의 이르는 대로 먹어야 한다.

ここで -는を持つ語幹格に立つ単語は直接補語として機能している.

主語に先行する -는 / -은を持つ文の成分の問題の詳しい記述は「統辞論」参照 (§103).

[注] 語尾や助詞の付かない名詞は同種的成分のグループに入るところで可能である. しかしこの場合語幹格といってはならない. ここでは名詞は辞書形を持っているのであって, 語幹格の形を持っているのではない⁽⁹⁰⁾.

2. 主格 一般主格は思考の一定の, 新しい対象としての主語を表す手段である. そのような主語は, 語幹格によって作られる主語とは異なり, 脱落せず, 了解されることはない. それが脱落すると, いかなる対象が問題となっている

かが不明瞭となる.

비가 온다.

一般主格は繫辭되다と아니다の前で繫辭につながる成分を表す.

우리들은 인민학교 일학년이 되었습니다.

이것은 작자의 죄가 아니다.

人間主格は人間名詞の後ろでのみ, 彼に対する尊敬を表すために, 用いられる.

선생님께서는 「아무 운동도 몸에 지나지면 해가 된 것이니 조심하여야한다」고 말씀하셨습니다.

尊敬の度が強く, 古風なものとして語尾 -께옵서がある.

3. 呼格は名詞が呼び格として現われるところで用いられる.

비야, 비야, 오지 마라.

「꼬끼오」 닭아 우지마라! 우리 아가 잘도 잔다.

語尾 -여と -이여はもっと表現力がある.

4. 属格は主文においては名詞接続的でのみあり得る. その基本的な機能はロシア語の名詞接続の属格と同じである. 特徴的な機能: 連体形(形動詞)の述語を持つなんらかの付加文の主語の随意的な指標.

약은 의사의 이르는 대로 먹어야 한다.

数量の属格については§§24-25 参照.

形態素 -네もまた, いくつかの代名詞(例: 당신)の後ろ, 固有名詞及びなんらかの活動に従事する人間の意味を持つ名詞の後ろでは属格の語尾である. それはこの格の単語で表される人間が一定のグループに入り, このグループの代表者であることを指している. しかし -네は連体的な意味を含む特別な多数のしるしであることは明らかである⁽⁸⁸⁾.

꼭바위네 집.

또한 가지 올라가면 언니네 학교가 보이고...

5. 無情名詞の与格は次の基本的な意味を持つ.

a) 状態動詞に付く時にはそれは, なんらかの状態が現われる場所を示す.

나 어린 정식이가 마당에 서서 큰 소리로 노래를 불렀습니다.

뒷산에는 여러가지 과실나무가 있소.

b) 動作動詞に付く時にはそれは, なんらかの動作が, 「何に」という疑問に答えて, 何に対してなされているかを示す. 名詞はこの場合間接補語である.

나는 종이에 글을 씁니다.

모이는 중 소리에 우리들은 운동장에 정렬하였습니다.

c) 動作動詞に付く時も状態動詞に付く時も, それは動作を行う時間あるいはなんらかの状態に存在する時間を示し得る.

요전 토요일에 우리 학교에서는 학예회가 열렸습니다.

d) 動詞の正確に関係なくそれは根拠あるいは理由を示し得る.

모이는 중 소리에 우리들은 운동장에 정렬하였습니다.

e) 受身ヴォイスの動詞に付いてそれは動作の実際の実行者を示し得る.

자동차에 치우었습니다.

f) 限界動詞, すなわち自己の限界を持ち, 無限に続けられず, なんらかの状態に移行するか, あるいはなんらかの限界点の達成をもって中止しないような動作を表す動詞に付いて, 与格は「どこへ」という問いに答えて, 動作を完成する場所を示す. この意味で与格を要求する動詞は오다, 닿다, 앓다, 눕다, 갔다오다等々である.

평양에 언제 왔습니까?

상해에 닿았다.

그는 단에 오르시었습니다.

고무전대를 허리에 띄었다.

有情名詞の与格は次のことを意味する.

a) 動作の受け手 (「誰に」).

나는 형님에게 채집해온 풀들의 이름을 물어 보았습니다.

b) 受身ヴォイスの動詞に付いて, あるいは受身ヴォイスに似た構文において動作の実際の実行者.

우리 조선은 삼십륙년동안 일본에게 얹매어 있었습니다.

使役の意味を持つ動詞に付いた与格については§32 参照.

6. 対格はロシア語と同じ基本的な機能を持っている. 特徴的な機能: 動作動詞に付いて動作を行う方向 (どこへ) あるいは場所 (どこで). 与格とは異なり対格はこの場合結果の達成は示さない.

학교를 가다.

잠수함은 물속을 다닌다.

自動詞に付いた対格 (場所, 時間, 内的対象の対格) の意味については§30 参照.

7. 具格は次のものを意味する.

a) 動作を行う道具あるいは手段.

우리는 지금 학교뒷동산에 나무를 시고 있습니다. 한패는 호미와 삽으로 묘목을 심을 구멍을 팝니다.

b) 何かが作られる材料 (何で).

여러분이 입고 있는 옷은 무명으로 만듭니다.

c) 動作が行われる方向 (どこへ).

우리들은 렬을 지어 앞으로 나갔습니다.

- d) 動作の様態あるいは様式 (どんなふうに).

새벽이 되면 수탉은 커다란 소리로 「꼬끼요」 하고 읊니다.

- e) 主語に着せしめられる特徴の出所 (何で).

넓은 평양의 거리는 사람들로 가득 찼습니다.

평양은 옛날부터 조선조의 제일 아름다운 도시로 유명합니다.

- f) 動詞が自動詞ならば, 主語に帰せしめられる特徴 (例: 되다), 動詞が他動詞ならば, 補語に帰せしめられる特徴 (例: 삼다, 여기다, 하다, 만들다等).

미제는 우리 조선사람들을 그들의 종으로 만들려고하였습니다.

우리들은 인민학교 일학년으로 되었습니다.

8. 共格: a) 主語と同じく動作に存在している対象あるいは人間を示す.

형님과 함께 왔다.

- b) 主語が行う動作とは反対の側に存在する対象あるいは人間を示す.

우리 의용군은 목숨을 아끼지 않고 일본군대와 싸웠습니다.

- c) 副詞같이及び形容詞같다の前で主語が比較される対象あるいは人間を示す.

사과 같이 높다.

명사와 같다.

[注] 1. この格はこれの同音異義語である接続詞 -과 /-와と混同してはならない⁽⁹¹⁾.

2. 副詞같이は後置詞같이<一緒に>と混同してはならない. これらは同音異義語である. 副詞같이は形容詞같다と緊密に結びついており, ここから副詞は出ている. これらの副詞と形容詞の前では格は義務的ではなく, 落ちることがある. 後置詞같이<一緒に>は現在副詞とは何の共通点もない. 後置詞같이の前では共格は義務的であり, 上述の意味の 1 つを持っている. 例: 형님과 같이 오너라. 같이の代わりに同じ意味で함께と더부러を用いることが出来る⁽⁹²⁾.

9. 比較格は比較される対象あるいは人間を示す.

거기는 문선이였다. 아래층보다 직공들도 많았다.

조선어는 일본어보담 발음이 어렵소.

누구보다도 먼저 눈을 떴습니다.

[注] 보담と보다도는語尾보다の変種である.

第2系列の格

1. 無情名詞与所格 この格の基本的な意味: なんらかの場所にいる (この瞬間にこの場所は去られていない). ここから 2 つの個別の意味が出てくる.

- a) 動作を行う場所 (どこで) を示す. この場合名詞は場所の状況語である.

상해에서 오후 세시차를 탔다.

길에서 작란하지 말고 한눈 팔지 말아야 합니다.

形容詞の前ではこの格は形容詞に与えられた特徴が関連ある場所を示す。

평양은 북조선에서는 제일 큰 도시일뿐아니라 북조선의 중심이 되는 곳입니다。

b) 動作が出てくる場所を示す。

나는 중국에서 돌아왔습니다。

거리에서는 전차 지나가는 소리가 들려옵니다。

멀다のタイプの形容詞を伴うこれに近い意味と比較せよ。

해왕성은 태양에서 가장 원한 유성입니다。

この格の短縮された変種は語尾 -서である。

그는 나무 그늘아래서 쉬었다。

서울서 부산까지 옛날 같으면 사람이 걸어서 열흘이 더 걸렸다。

この格の特殊な意味：集合的意味を持つ主語を表す（集団，グループ等の名称）。

북조선 인민위원회에서는 그동안 참 많은 일을 하여 주었다。

しばしばこの意味では格は補足的に分離助詞 -는によって作られる。

これで分るように，集合体は朝鮮語では無情名詞の範疇に属するので，これは -에게서ではなくて -에서によって作られる。

有情名詞与所格 この格は動作が出發する人間を示す（誰から）。

형님께게서 편지가 왔습니다。

2. 無情名詞与対格は与格と対格の一致した意味を併せ持つ。そのような一致した意味は動作が向けられる場所を示すことである（「どこへ」）。

집에를 가야 하겠소。

有情名詞与対格はこの格によって作られる名詞が同時に対象及び動作の受け手であることを示す。

부모에게나 친구에게를 물론하고 인사할 때 공손할 것이요。

この格は極めてまれである。有情名詞与対格は多分물론하고のタイプの少数の単語（対格を要求する）の前でのみ可能である。この格がまれに且つ，厳しく制限されて用いられていることは，明らかに有情名詞の与格と対格が一致した意味を持っていないことによって説明される。

3. 無情名詞与具格は与格と具格の一致した意味を併せ持つ（「どこへ」）。

매년 서중이면 석왕사에로 갑니다。

有情名詞与具格は動作の受け手を表すが，動作の受け手は同時にこの動作が向けられている人間としても理解されている。

내가 네게로 가마。

丁寧な変種は語尾 -게로である。

4. 具所格は主として分離助詞 -는と結合して限られた意味を持つ；ある時は

主語, ある時は主語の前の補語となる; 主語はこの場合特別なニュアンスを持っており, このニュアンスは今のところ正確な規定が出来ない.

배우로서는 어떤 배우를 가장 좋아하시나요?

この文では -로서는は主語の前の補語を作り, 普通このような場合, 文のこの特殊な成分が副次的に同じ文の中で主語の後ろの補語として繰り返される

(배우를). 従ってこの格は似た機能において語幹格に近い. 似た内容を持つ(ただし少し異なる構造を持つ)文(음식은 어떤 음식을 좋아하시나요)を比較せよ. ここでは文は分離助詞 -는を伴った語幹で表されている.

この -로서は語尾 -로써と混同してはならない; これはしばしば正書法では -로서と間違えられる. 起源的には -로써は語尾 -로と後置詞써とからなる; これは具格語尾とほとんど同じ機能を持っている, すなわち道具, 手段, 理由等を表す. そのほか, それはなおも述語における付加語と名づけ得る文の特別な成分となる. この付加語はある場合は主語に, ある場合には補語に付くものだが, 特別な種類の付加語であり, 述語を通して主語あるいは補語と結びついている.

조선인민과의 단결세계주관을 위대한 정치적 활동으로써 기념하고 있다.

인민 위원회는 조선인민의 자치기관으로써 해방직후 인민들 자신의 창익에 의하여 조직된 것입니다.

これで見ると, 文のこのような特別な変種はロシア語では接続詞“kak” (英 as) で訳される. そのほか, 上述したように, この語尾は具格に固有な意味をも表す.

[注] 1. 上述の格のうちのいくつかは動詞派生の後置詞とも結合して, これらの後置詞に従属し, それらを支配する. 例えば, 後置詞대하여 [対一] とは与格が用いられ, 後置詞통하여 [通一] とは対格が用いられる. 格の後置詞支配は後置詞の章で詳しく解説されている (§91 参照).

2. 多くの場合格語尾がそれが結びつくべき名詞から離され, その格が依存する単語に隣接することが非常にあり得る. 例えば, 否定繫辞아니다の前では, 上述したように, 主格形を持たなければならない. この形は名詞がすでに他の格によって作られた場合にも保たれる. そこで와-가, 에서-가等のようなタイプの結合が出来る. 例:

진정한 민족예술은 자본사회에서가 아니라 사회주의사회에서 발전되는 것이다.

これらの結合は多分合成格ではなさそうである⁽⁹³⁾. 語尾 -가はこの場合繫辞아니다と関連し, それとともに 1 つの全一体をなす. しかしこの問題は補足的な研究を必要としている.

3. 第3系列の格は第1系列の格やら第2系列の格やらに属格語尾が結合したものである。属格語尾はいかなる新しいニュアンスを持たない。それは動詞に付く補語を名詞に付く補語に変えるだけである (§111 参照)。それゆえこれらの格の例をわれわれは与えない。

2. 数 詞

§21. 個数詞 朝鮮語の個数詞の基礎には 22 個の非派生数詞がある：

1 하나	일 [一] *	30 열흔
2 둘	이 [二] *	40 마흔
3 셋	삼 [三] *	50 쉰
4 넷	사 [四] *	60 예순
5 다섯	오 [五] *	70 일흔
6 여섯	륙 [六] *	80 여든
7 일곱	칠 [七] *	90 아흔
8 여덟	팔 [八] *	100 백 [百] * ⁵
9 아홉	구 [九] *	1,000 천 [千] * ⁶
10 열	십 [十] *	10,000 만 [万] ^{(94)*}
20 스물		100,000,000 억 [億] *

これらの非派生数詞は固有語と漢字語がある（漢字語はアポストロフィを付けてある）。

これ以外のすべての数詞は派生数詞である。朝鮮語の数詞からは百桁台でのみ作られる。派生数詞は同種的である。このことはそのような数詞のすべての合成要素は固有語にのみ、あるいは漢字語にのみ属さなければならないことを意味する。

朝鮮の数え方の体系においては、ロシアとは異なり、1つのクラスは4の位（一桁、十桁、百桁、千桁）を持つ。ロシアの数が 000,000... という姿を持つならば、朝鮮の数は 0000,0000... である。各々のクラスでは数は2つの方法で作られる。すなわち小さい桁を大きい桁にかける方法（구십 [九十], 사백 [三百] 等）と大きい桁と小さい桁を足す方法（십구 [十九], 일백사 [一百四] 等），そして両者の方法の結合（삼백삼 [三百三]）である。

朝鮮語の数えの体系ではクラス（桁と混同するなかれ！），万，億がある。もっと上のクラスは実用的な意味を持たない。あるクラスを他のクラスから区別するためには，クラスの末尾に，低いものを除いて，万，億という表示が置かれる。例：

삼천사백구십팔 [三千四百九十八] （クラスの表示なし） 3498

삼천사백구십팔만 [三千四百九十八万] （クラス「万」の表示あり）

3498,000=34,980,000

삼천사백구십팔억 [三千四百九十八億] (クラス「億」の表示あり)

3498,0000,0000=349,800,000,000

上に列挙された数詞は文のいかなる成分としても現われ得る(統辞論参照). 規定語の位置ではそれらのいくつかは音声的に変形される:

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 한 | 4 네, 너, 녀 |
| 2 두 | 5 대, 닷 |
| 3 세, 서, 석 | 6 예, 옛 |
| 20 스무 | |

[注] 대, 닷, 예, 옛と並んで変形されない形다섯, 여섯も用いられる.

§22. 順序数詞 順序数詞は個数詞から派生したものであり, 2つの方法: 接頭辞제- [第] あるいは接尾辞 -째によって作られる. 前者の方法によって順序数詞は漢字語から作られる (제일 [第一], 제십 [第十]). 後者の方法によって順序数詞は固有語から作られる (둘째, 아홉째). その際接尾辞の前の数詞 1 (11, 21, 31 等の合成数詞で), 3, 4, 20 は一定の形を取る (열한째, 세째⁽⁹⁵⁾, 스무째). 数詞<第 1 の>は不規則に作られる (첫째. ロシア語 'pervyj' [英'first'], [ロシア語 'odin', 英 'one'] 参照). この数詞の語根は合成語の第 1 要素として現われる (첫걸음, 첫낮, 첫날等)⁽⁹⁶⁾.

§23. 概数詞 概数詞を作る必要がある場合は, 上述の数詞を若干の音声変化を伴って組み合わせる. 例:

- | | |
|-----|----------------------------|
| 1-2 | 한둘 (規定語 한두) |
| 2-3 | 두셋 ⁽⁹⁷⁾ |
| 3-4 | 서넛 (規定語 서너) |
| 4-5 | 너댓 |
| 5-6 | 대여섯 |
| 6-7 | 여일곱 ⁽⁹⁸⁾ |
| 7-8 | 일여덟 [発音 <i>iljɔdɔl</i>] 等 |

ここからもっと複雑な造語がある.

- | | |
|-----|--------------------------|
| 1-4 | 한두서넛 ⁽⁹⁹⁾ |
| 2-4 | 두서넛 |
| 4-6 | 너대여섯 ⁽¹⁰⁰⁾ |
| 4-6 | 너더대여섯 ⁽¹⁰⁰⁾ 等 |

これらの個概数詞に接尾辞 -째を接尾すると, 順序概数詞が出来る.

§24. 分数詞 分数詞は分母(第1の位置)と分子(第2の位置)を, 属格の指標 -의あるいは漢字語の等価物지(こちらの方が多い⁽¹⁰¹⁾)の助けによって, 組み合わせて作る. 分母の部分には数の後ろに名詞語根분[分]を付ける. 사분의삼[四分一三]あるいは사분지삼[四分之三].

§25. 具体数詞 Predmetnye chislitel'nye 上述した個数詞の基本的な特殊性は, それらを抽象的な数学的な計算で機能させ(hana, tul, set, net...), 数学的計算で数字を表す能力があることである(삼에[三] 사를[四] 가하면[加] 답이[答] 칠이오[七]). 3+4=7. これらの数詞と並んで朝鮮語にはなおも数学的計算では決して用いられないいわゆる具体数詞がある. これらの数詞の基本的な目的は対象の総体を数えることである. それは個数詞と助数詞との結合である(§15). 上述したように, そのような助数詞はちょうど名詞のクラスの数だけある. そこから各々の数(1, 2等)には助数詞の数だけ具体数詞があることになる⁽⁸³⁾. 例: 한가락(<一本>, 長方形のもの: キャンディー, さじ, 箸, 指, 毛髪等); 한대(<一本>, 円筒形のもの: 万年筆, 丸太, 筆, 煙突, 葉巻, 釣竿, 枕木, 柱等); 한알(<一粒>, 小さな球形, 円形のもの: 豆, クルミ, どんぐり等); 한자루(<一本, 一丁>, 取っ手を持つもの: 拳銃, 鋏, 鎌等); 한줄(<一本>, 長く狭いもの: 縄, 弦, 縫い目等).

第1種の数詞(「数学的数詞」)と具体数詞の違いは統辞論的にも現われる: すなわち具体数詞は, 属格を伴って, 規定される名詞に先行するか(리순신은 열세척의 거북선으로 육백척의 배를 개뜨렸다고 합니다), 規定される名詞の後ろに隣接し, その名詞とともに1つの統一体をなし⁽⁹⁸⁾, その統一体はこの文の条件によって要求される格を取る(말두마리가 제가지 달구지를 끌고 갑니다.) 第1種の数詞は規定される名詞に先行し, 属格によって形が作られることはない: すなわち한사람, 두발⁽¹⁰²⁾.

§26. 合成数詞の数詞語幹 数詞語幹は合成名詞に入り得る. 次のような合成語のグループが取り出される.

a) 数詞と日付, 月, 年, 日等の名づけとの結合. この場合個数詞は順序数詞の機能を持つ: 삼월[三月], 일천 구백 오십일 년 육월 이십사 일[一千九百五十一年六月二十四日]⁽¹⁰³⁾.

固有語の数詞と意味不明の名詞語幹との結合が存在し, ここでは両者の要素とも緊密に互いに融合しているから, 今は起源の分析がなされない. これらの単語に入る非常に変形された数詞は順序の意味も量的意味も持っている: 하루, 이들, 사흘, 나흘等. これらの単語は語彙論と語源の対象である⁽¹⁰⁴⁾.

b) 数詞と위[位], 급[級], 호[号], 번[番]等のタイプの順序的性格の

対象語幹との結合. この場合順序数詞の接頭辞は義務的ではない: 제이위 [第二位], 이위 [二位], 제일급 [第一級], 일급 [一級]. しかし公式の言語ではそのような省略は避けられる. 국기훈장제일급 [国家勲章第一級] 参照⁽¹⁰³⁾.

c) 数詞と年齢を表す語幹との結合. この場合数詞は量的意味を持つ: 열살⁽¹⁰³⁾.

d) 数詞といくつかの他の対象語幹との結合. これらの結合は合成語が術語として現われる場合に用いられる: 삼각형 [三角形], 십자 [十字], 십자로 [十字路].

3. 動 詞

§27. 動詞の語彙構成の特徴づけ 現代朝鮮語のすべての動詞は5つのグループに分かれる. 第1グループに入るのは非派生動詞である: 불다, 가다, 살다, 놀다. 第2グループに入るのは語幹結合(語根複合)によって作られた動詞である(돌아보다, 날아들다). 第3グループに入るのは接尾辞によって作られる動詞である(밝히다, 밝다から). 第4グループに入るのは補助動詞によって作られる動詞である(완수하다 [完遂-], 완수 [完遂] から; 닭치다, 닭から). 第5グループに入るのは形容詞にさかのぼり, 形容詞から補助的な手段(補助動詞, 接尾辞)なしに作られる動詞である. 例: 크다<育つ>, 크다<大きい>から.

接辞付け 接尾辞による単語形成(造語)は非生産的である. 形容詞から動詞を作る接尾辞はみんな2-3ある: -히- 불히다, 불다から; -이- 높다, 높다から; -기- 검기다, 검다から; -후- 낮후다⁽¹⁰⁵⁾, 낮다から.

接頭辞による形成(造語)も同じく非生産的である. いくつかの接頭辞は, 隠れた姿でのみ, すなわち他の語根との結合においてのみ用いられることによって普通の語根とは区別される語根である(ロシア語の接頭辞を伴ってのみ可能な語根“-ut”): obut' <履かせる>, pazut' <(履物を脱がす)> 参照: 엿-<覗く>: 엿보다, 엿듣다⁽⁴⁰⁾; 처-<やたらと, むやみに>: 처먹다, 처먹이다; 짓-<強意>: 짓밟다, 밟다から, 짓먹다等. これらの接頭辞が接合する語根の数は極めて限られている.

接尾語대다と거리다は副詞から動詞を作り, 非生産的だが, そのほかに, いわゆる擬声擬態語の分野と関連がある (§6 参照).

補助動詞 朝鮮語の動詞を補充する生産的な方法は補助動詞である. ここに入るのは次のものである: 하다 (及び受身ヴォイスと中動ヴォイスでの等価物되다): 감가하다 [減価-], 감가 [減価] から, 입학하다 [入学-], 입학 [入学] から; 지다: 눈물지다, 눈물から, 等. 既に述べたように, 補助動詞하다 (及びいくつか他のもの) と名詞の間には格語尾 -를 /-을의「挿入」が可能である. 補助動詞하다はまた形容詞から動詞を作る: 무서워하다, 무섭다か

ら, 만가와하다, 만갑다から, 等.

補助動詞が他の品詞の犠牲において動詞を補充するものならば, 語根結合は動詞自身を手段として動詞の号構成を拡大するものである. 動詞の語根結合の基本的タイプに3つある.

a) 接続形 -아 /-어によるある語根の他の語根への接尾. ここでは通常第1の要素が第2の要素に従属している. これは非対等的な関係である. まれに両者は対等である. 非対等なものは単語날아오다, 올라가다における2つの語根の間の関係である. 対等なものは単語오르나리다, 나들다等における2つの語根の間の関係である.

いくつかの場合に語根結合の簡単化, 語根結合の単純語への転化が見られる. このことはそのような複合された全一的な意味が1つの要素から失われたこと,あるいは, 全体の意味が代わって, そのような合成語をなす部分の意味から全一的な意味がすでに出てこないことと関連がある. 例えば, 動詞나타나다, 쓰러지다の外見は2つの要素からなっているが (*natha-nada* 及び *ssyrɔ-džida*), これらの単語の第1の要素나타- と쓰러- は語源をさかのぼりえないから, 実際には分割されない単語である.

「接続形 -아 /-어+第2の動詞」というあらゆる結合が合成語なのではない. 合成語は次の特徴を持つ. すなわち合成語をなす両方の要素は語彙的な意味を持ち, いかなる文法的機能をも持たない. そのような合成語の要素のうちの1つが文法的機能を持つなら, その全体を合成語と名づけてはならない. それは2つの単語の結合であり, このうちの1つの単語が補助的な機能を果し, 文法的意味の表現手段となる. 例えば, 結合몰어보다<尋ねてみる>において第2の動詞보다<見る>は文法的意味を持っている. すなわちそれはそれに先行する動詞に表される動作を行う試みを表す. 全く同じく結合말라가다<乾いていく>で第2の動詞가다<行く>は文法的意味を持つ. すなわちそれは先行する動詞が表す経過が不断に増大することを表す. ここでは1つではなく2つの単語が問題となる.

b) 2つの語根の直接の隣接. これは動詞を作るかなりまれな方法である: 붙잡다, 붙들다, 굶주리다等々.

c) 名詞の語幹と動詞の結合: 분나다 [憤—], 성나다等々.

名詞の語幹と動詞の結合は強固なものではない. このことは次のことから明らかである. そのような合成された全体の第1の要素が容易に格語尾を取り得るのである: 성이 나다あるいは성을 내다, 본받다 [本—] 及び본을 받다

[本—]. 第1の要素の語源が弱くしか意識されない合成語でさえ構成要素に分解され, 単語結合を作り得る. 애쓰다, だだし애를 쓰다 (同じ意味を持つ) 参照⁽¹⁰⁶⁾.

§28. 動詞の種類 すべての動詞は3つの種類に分けられる。第1種に入るのはそれ自体の基本的な、語彙的な意味においてのみ用いられる動詞である。第2種に入るのはそれ自体の語彙的な意味とともに文法的な意味を併せ持つ動詞である。第3種に入るのは文法的な意味のみを持つものである。例えば、動詞읽다は第1種に入る。動詞보다は語彙的な意味と文法的意味を併せ持つ。すなわちその語彙的な意味は<見る>であり、文法的意味は<試みる（なんらかの動作を行う試み）>である。動詞채하다は文法的意味のみを持つ（모르는 채하다<知らぬ振りをする>）。

§29. 動詞の文法範疇 文法範疇の数から言って動詞は朝鮮語の最も複雑な品詞である。動詞の基本的な文法範疇は次のように示され得る。

位置的範疇				非位置的範疇
活用するもの			曲用するもの	1. ヴォイス（自他動性） 2. テンス 3. 人称 4. 動作方法 5. モダリティー及び法
終止形の範疇 ⁽¹⁰⁷⁾		非終止形の範疇		
法	人間関係の 範疇 (待遇法)	連体形	接続形	
			不定詞 (体言形)	

表から分るように、すべての文法範疇は位置的と非位置的の2つのグループに分かれる。位置的範疇は文の中の動詞の一定の統辞論的機能と結びつく。あるものは、例えば、終止形の範疇は主文の述語を表すのに用いられ、あるものは、例えば、規定語を表すのに用いられる、等々。それらは語尾によってのみ表される。非位置的範疇は動詞の統辞論的機能に従属しない。すなわち動詞は主語の位置でも、述語の位置でも、規定語の位置でもヴォイスを持ち得る。非位置的範疇は単語変化（屈折）接尾辞あるいは補助動詞によって表される。

個々の位置的範疇と非位置的範疇の規定は以下にこれらの範疇のの各々を観察する際に与えられるであろう。

自他動性（転移性）. ヴォイス

自他動性（転移性）とヴォイスは、文の主語あるいは補語に対する動作の関係を表すという点で似ている。自動詞（非転移動詞）と呼ばれるのは対象に反映されず、主体（主語）の限界内で終わる動作である。例：「風が吹く」。他動詞（転移動詞）は主体を源としてなんらかの方法で対象（補語）に反映されている動作である；この動作は対象（補語）に働きかけたり、対象（補語）を作

ったりする。例：「魚を捕まえる」，「家を建てる」。主語及び述語に対する動作のもっと複雑な関係、例えば使役（させること），受身（蒙ること）等は「ヴォイス」という一般的な術語に統合される。このもっと複雑な関係とは違って，自動性（非転移性）と他動性（転移性）が表す関係は能動ヴォイスという名づけで統合される。

自動性（非転移性）=他動性（転移性）とヴォイスを表す形の観点からは朝鮮語のすべての動詞は非派生動詞と派生動詞に分けられる。派生動詞は単語変化（屈折）接尾辞あるいは補助動詞によって作られる。

§30. 非派生自動詞と非派生他動詞 すべての非派生動詞に自他動性（転移性）に関して共通のものは他動性（転移性）と自動性（非転移性）の特別な形態素の欠如である。非派生動詞は3つのグループ：中立動詞，非派生自動詞，非派生他動詞に分けられる。

中立動詞とは他動詞も自動詞も持ち得る動詞のことである。例えば，動詞분다は文마람이 분다では自動詞であり，文애들이 피리를 분다では他動詞である。

非派生自動詞は自動性（非転移性）の形態論的しるしを持たず，中立動詞とは一義的だということで区別される。自動詞は普通は統辞論的に直接補語がないことにより識別されるが，直接補語はそのような動詞において暗示さえされない。しかし対格の存在が常に動詞の他動的（転移的）指標なのではない。対格を従えながらも自動詞にとどまる自動詞がある。自動詞で対格を取る3つの場合を数えることが出来る。

a) 運動の自動詞において場所の対格。この対格は状況的性格を持つ：물속을 다닌다；여행을 [旅行-] 가다；길을 걷다。

b) 時間の対格。この格も状況語的性格を持つ：몇백년을 뒤떠러지다。；두달을 그 섬에서 살았다。

c) いわゆる内的対象の対格（名詞は動詞の語彙的意味を繰り返す）：잠을 자다<（直訳）眠りを眠る>；춤을 추다<（直訳）踊りを踊る>；숨을 쉬다（直訳）<息を休む>。ロシア語の“dumu dumat'”<（直訳）考えを考える>参照。

3つの場合すべてにおいて対格は直接補語のしるしではない。文をしかるべく変形させると，直接補語は（通常）主語に変えられ得る（vizhu paroxod, no: paroxpd viden<汽船を見る，ただし汽船が見える>）。上に挙げられた文では対格はそのような変形は許されない。つまりそれは直接補語の対格ではないのである。

非派生他動詞は他動性（転移性）の形態論的しるしを持たず，中立動詞とは一義的だということで区別される。他動性（転移性）は普通は統辞論的に直接

補語があることにより識別される。しかし対格の存在が常に動詞の他動的（転移的）なしるしなのではない。他動詞のある文で核心が対象に対する動作にではなくて動作自身あるいは経過自身に集中している時は、直接補語は不必要なだけでなく、一般に許されないものである。この場合他動詞は絶対的に（すなわち自己の対象と関係なしに）用いられる。아이가 옷을 논다, ただし아이가 논다. 絶対的に用いられる時も動詞は他動詞のままである。

§31. 派生自動詞と派生他動詞及びヴォイス動詞 派生動詞は非派生動詞から作られる。その方法は3つある: 1つは単語変化(屈折)接尾辞によって作られ, 2つは補助動詞によって作られる。

§32. 第1の方法(単語変化(屈折)接尾辞によって派生動詞を作る) すべての派生他動詞と派生自動詞の共通した特徴は他動性(転移性)と自動性(非転移性)の接尾辞が同じだということである。同じ接尾辞が他動詞も自動詞も作ることが出来るのである。

単語変化(屈折)接尾辞によっては固有語の単語からのみ派生動詞を作ることが出来る。例外をなすのは補助動詞하다によって作られる固有語動詞である。単語変化(屈折)接尾辞 -이-, -기-, -히-, -리-, -우-, -이우-, -후-である。接尾辞の選択は語根の末尾子音あるいは母音に依存する。

接尾辞 -이- 末尾子音 *k* (いつもではない; 下の接尾辞 *-hi* 参照), *kk, h, ph, lph, lth, ry*, 母音 (*u* 以外) を持つ語根の後ろ

接尾辞 -히- 末尾子音 *k* (いつもではない; 上の接尾辞 *-i* 参照), *p, lb, lg, ndž* を持つ語根の後ろ

接尾辞 -기- 末尾子音 *m, lm, n, s, t, th, čh* を持つ語根の後ろ

接尾辞 -리- 末尾子音 *l, rh, t* (*r* と交替する; 例: 듣~들) を持つ語根の後ろ

接尾辞 -우- 末尾母音 *u* を持つ語根の後ろ

接尾辞 -이우- 末尾母音 (*u* 以外) を持つ語根の後ろ

接尾辞 -후-⁽¹⁰⁵⁾ 末尾子音 *č* を持つ語根の後ろ

この表では語根の末尾音の第1変種が示されている (§3 参照)。

接尾辞 -이-, -히-, -리- は母音の前に用いられる語根の変種に接尾される; 末尾の *č* を持つ語根では *l* は保たれる。接尾辞 -기- は子音の前に用いられる語根の変種に接尾される。

末尾の *k* を持つ一部の動詞は -이- のみを許す (例: 죽이다, 죽다から), 一部は -히- のみを許し (例: 막히다, 막다から), 一部は両者の接尾辞を許す (例: 눅이다及び눅히다, 눅다から)。

末尾の正書法上の *h* を持つ語根の後ろに -이- を接尾すると、普通は接尾辞の

語尾への融合をもたらす。例えば, 닳다は닿이다, 다이다, 대다を作る。

接尾辞 -이-, -이우- は末尾母音 *a* あるいは *o* を持つ語根に接尾し, 普通これらの語根と融合して分けられない統合体になる: 나다は派生動詞*나이다→내다を作る; 서다(派生動詞*서이우다→세우다)を, 자다(派生動詞*자이우다→재우다)を, 타다(派生動詞*타이우다→태우다)を作る, 等々。

上に列挙した接尾辞は動詞に接尾して補足的な意味をもたらす。これらの接尾辞が非派生動詞に接尾するので, 接尾辞によって作られる補足的な意味は非派生語から見た方がよい。

接尾辞 -이- 等は非派生自動詞に接尾し得る。接尾辞 -i- 等が非派生自動詞に接尾するならば, その結果として次の動詞が作られる。

a) 他動的 (転移的) 意味. 눈물이 흐르다, ただし눈물을 흘리다; さらに맘을 흘리다を参照; 아이가 웃는다, ただし아이들을 웃긴다。

b) いわゆる使役的意味. この接尾辞が特別に強調するのは, 動作の真の源泉は主語ではなくて対象 (補語) であること, 主語は対象の分野に生ずるこの動作にとっての推進力ではないこと, この意味が使役ヴォイスという文法の名づけを持っていることである。主語の側から出てくる推進力は多様である: それは命令, 衝動を起こさせること, 奨励, 同意, 放任等である。上に挙げた例のうち 1 つはそのような解釈を可能にさせる: 그는 아이를 웃긴다. 文학생을 놀린다 (놀다から) <彼は生徒を遊ばせる> (使役, 許可) は同じ意味を持つが, 派生動詞놀다は他動詞で, ここでは遊びの対象を示さずにいわゆる絶対的意味で用いられている (§31 参照)。

本来の自動詞から派生した動詞は, たった今説明したように, 2 つの意味を持つから, これは多くの場合曖昧な文を作る。例: 그를 죽였다 (죽다から) <彼を殺した>, しかしまた<彼を死なせた> (放任)。多分そのような二重の解釈を文집을 태웠습니다 (타다から) も許している: <家を焼きました> 及び <家を焼くままにしました> (そのことに気づかなかった)。

接尾辞 -이- 等はさらに本来の他動詞に接尾し得る。接尾辞 -이- 等が本来の他動詞に接尾するならば, その結果として次のような動詞が作られる:

a) いわゆる使役的意味 (この意味の記述は以下を参照)。この意味を持つ動詞に付くと, 主語は普通は創始者であって, 動作の起し手ではない。それゆえ文の中ではなんらかの動作を行うことを鼓舞し, 駆り立て, 押しやる相手である動作の起し手がなとも示されなければならないのである。文法的にはこれは使役動詞に付く補語である。さらに動作の起し手はなにかを実行し, この場合 (他動詞に付いて) 何かに作用を及ぼす。それゆえ文の中には作用を及ぼす対象がなければならない。文法的にはそれは他動詞に付く補語である。かくして使役の意味を持つ他動詞に付くと, 2 つの補語, すなわち実行する人間 (動作の起し手)

の補語と作用を及ぼす対象の補語がなければならないことになる。実際には必ずしも2つの補語の必要性はなく、2つのうちの1つ、あるいはある場合には両者とも暗示され得る。形態論的には両者の補語とも対格で表される。しかし1つの補語は与格あるいは後置詞하여금を伴う具格によっても表され得る：누이에게 (누이를) 동생을 업힌다 (업다から), 책을 읽힌다 (읽다から), 말을 태운다 (타다から), 모자를 씌우다 (모자를 쓰다参照)。

b) いわゆる「中間的」意味、すなわち中動ヴォイスの意味を伴う。接尾辞が特別に強調するのは動作が主語の分野にもっぱら集中し、主語にたいして特別な（普通の自動詞に付く場合のようではない）関係を持つ。ここではいくつかのニュアンスが取り出される。

1) 自発性のニュアンス。接尾辞は動作が、誰かの意志とは関係なく、自然に起こることを示す。

오늘은 모래쟁이만 잡힌다。

2) 可能性のニュアンス。接尾辞は主体（主語）がなんらかの動作を受けることが可能であることを示す。

이런 그늘에도 봉어가 잡히오。

3) 対象の「自主的な動作」のニュアンス。接尾辞はなんらかの作用を受ける対象があたかも自分の側から対抗する動作を見いだすことを示す（例：わたくしはドアを閉める、このわたくしの動作の結果としてドアが開く）。

몇분이 지나서 문이 슬며시 열리더니 박이 방안으로 들어왔다。（문을 열다参照）

c) いわゆる受身的意味を伴う。接尾辞は、この動作のための推進力が主語の分野の内にではなく（使役性と比較せよ！）その外にあり、主語がこの動作によって受動的に捉えられている（副次的な作用の結果としてこの動作は主語に反映しているから）ことを示している。例：

어제는 끌리어왔지만 오늘은 제 발로 왔소이다。（끌다から）

文の中では動作の源泉も示され得る。文法的にはこれは与格で表される動作の源泉の補語である (§20 参照)。

これらの意味は普通は朝鮮語の文法書で受身ヴォイスという1つの術語に統合される。実際にはこの術語に入るのは最後の意味だけである。始めの3つの意味は正確には中動ヴォイスという術語に統合されるべきだろう。

このように、上述のことから、上に列挙された単語変化（屈折）接尾辞（-이-等）は部分的に他動詞を作るのに、部分的にヴォイスを作るのに役立っているのである。このようなヴォイスは（能動ヴォイスのほかに）使役ヴォイス、中動ヴォイス、受身ヴォイスがある。

派生他動詞と派生自動詞は同じ形態論的手段によって作られるから、しばし

ば同じ派生動詞が他動的（転移的）意味も自動的（非転移的）意味も表し、曖昧である。典型的な例は보이다（보다から）で、2つの意味を持つ：1）＜見せる＞及び2）＜見える＞；들리다（듣다から）—2つの意味を持つ：1）＜聞かせる＞及び2）＜聞こえる＞；안기다（안다から）—2つの意味を持つ：1）＜抱かせる＞及び2）＜抱かれる＞等。確かに、多くの場合他動詞と自動詞を異なる接尾辞で区別しようとする志向が見られる。例えば、動詞먹다は接尾辞 -아- で他動=使役の意味を作り（먹이다）, 接尾辞 -히- で自動=受身的意味を作る（먹히다）。

§33. 第2の方法（補助動詞によって派生動詞を作る）派生動詞を作る第2の方法は補助動詞지다, 시키다（文語では시기다も）, 되다, 당하다を用いることである。ある文法学者はここに맡다も入れる。

a) 補助動詞지다는基本動詞の専攻の接続形（形態素 -a/-o）に接尾する。派生させる動詞は他動詞でも自動詞でもあり得、固有語語根でも漢字語語根=語幹からなる単語でもあり得る。지다가接尾することによって動作の自発の意味を持つ中動ヴォイスの派生動詞が作られる。

어느날 춘성이는 열이 나서 앓아 누웠습니다. 하루이틀 지내도 병은 낫지 않고 점점 더해졌습니다。（더하다から）

ここに挙げられた例では -지다는基本動詞（言語に自立的に存在し、辞書に登録されている）の接続形に接尾する。しかし派生させる語幹が拘束された状態にあつて、自立語として取り立てられず、それゆえ辞書に登録されない-지다を第2要素とする単語が少数ある。-지다を第2要素とするそのような単語は単に自動詞（自発という補足的ニュアンスを持たない）として理解される。ここでは -cida は接尾語に変わった。通常それらは同じ語幹を持つ他の接尾語-떠리다（他の変種-터리다, -뜨리다, -트리다）⁽¹⁰⁸⁾と対立する。

넘어지다	넘어떠리다
떨어지다	떨어떠리다
부러지다	부러떠리다
쓰러지다	쓰러떠리다
꺼지다	꺼떠리다
빠지다	빠떠리다

지다を持ついくつかの動詞が対応の他動詞を持たない：사라지가, 어지러지가その他。

ある点ではこれらの動詞のすべては自動性（非転移性）と他動性（転移性）が明瞭に表された第1次的、非派生動詞（勿論現代語の観点から）と扱うことが出来る。

[注] 補助動詞지다는形容詞から「語幹に表された性質を獲得する」と

いう意味を持った動詞を作ることにも参加する: 늡다, だだし늡어지다; ㄱ다, だだしㄱ어지다等.

これらの形は朝鮮語の動詞, 自動詞を補充するのに参加するが, 自動性(非転移性)=他動性(転移性)及びヴォイスとは直接の関係は持たない.

b) 補助動詞시키다, 되다, 당하다は하다を持つ動詞からのみ派生動詞を作る. 動詞하다も単語形成(造語)的機能を持つ補助動詞である. これらの単語形成(造語)的要素を持つ動詞は中動詞, 自動詞, 他動詞の3つのグループに分けることが出来る.

中動詞は他動的(転移的)意味と自動的(非転移的)意味とを持つ: 국한하다 [極限-] 'ograničivat' [他動詞], 'ograničivat'sja' [再帰動詞], 생각하다 'dumat' [他動詞], 'dumat'sja', 'kazat'sja' [再帰動詞].

自動詞は, 中動詞とは異なり, 一義的である: 진력하다 [尽力-], 중개하다 [仲介-]⁽¹⁰⁹⁾, 착수하다 [着手-], 출석하다 [出席-]. ここには語根の第1音節に피- [被]-中国語で受身の指標-を持つ特殊なグループの単語が入る: 피선하다 [被選-], 피벌하다 [被罰-], 피임하다 [被任-]⁽¹¹⁰⁾.

他動詞は, 自動詞同様, 一義的であり, 他動的(転移的)であるのみである: 선거하다 [選挙-], 선전하다 [宣伝-], 설립하다 [設立-], 구체화하다 [具体化-], 구명하다 [究明-].

このことに, 하다が形容詞のしるしとしても役立つ(소박하다 [素朴-], 유쾌하다 [愉快-])ことを付け加えるならば, 하다はヴォイスの点だけでなく, 品詞を区別する能力の点でも中立的であることは明らかである.

시키다. 中動詞, 自動詞, 他動詞において補助動詞하다を시키다に変えると, 上に記述された使役の意味のニュアンスを持つ動詞が出来る: 공부하다 [工夫-], だだし공부시키다 [工夫-], 관람하다 [観覧-], だだし관람시키다 [観覧-], 진전하다 [進展-], だだし진전시키다 [進展-].

これがこの補助動詞の基本的な機能である. しかし現代朝鮮語ではこの補助動詞と関連あるものになおも2つの機能がある.

第1に, 시키다は自動詞を他動詞に変えることが出来る. ここではつまりそれは他動性(転移性)を作る手段として現われる: 중상하다 [重傷-], だだし중상시키다 [重傷-].

第2に, 시키다は시키다なしでも他動詞である動詞の他動的(転移的)意味を強調する. この際それはそのような動詞にいかなる使役的な意味をも付加しない. ここではつまりそれは他動性(転移性)を強調する手段として現われ, 上に見たように, 他動性(転移性)をより明瞭にする(このことは하다については言えない): 구체화하다 [具体化-], だだし구체화시키다 [具体化-]

も, 감소하다 [減少—], ただし감소시키다 [減少—] も. 시키다のこの強調的意味は現在の評論のスタイルの言語に著しく特徴的である. しかし시키다のそのような用法は標準語的規範の観点からは正しいものと見なすことはほとんど出来ない.

[注] 시키다は上述の機能のほかになお 2つの機能を持っている. 第1に, これは「命令する」という意味を持つ普通の機能の動詞として独立して用いられる. 第2に, これは名詞の対格形の後ろに, 普通は사켜形で, この名詞が術語によって表される動作に関して道具, 手段であることを意味する. 道具的意味が具格をも持つことが知られている. -로形と-를 시켜形との違いは, 前者が道具, 手段として無情名詞が現われるところで用いられ, 後者が道具, 手段として有情名詞, 主として人間が現われるところで用いられることにある.

되다, 당하다. 他動詞하다の되다との取替えは次の基本的な意味を持つ動詞を作る.

1) 自動性 (非転移性) (いかなる補足的なニュアンスも付け加えない): 동원하다 [動員—] <動員する>, ただし동원되다 [動員—] <動員される>.

토지개혁을 완료한 지역에는 농민들이 증산을 위하여 동원되고 있다.

토의하다 [討議—] <討議する>, ただし토의되다 [討議—] <討議される>.

그 회의에서는 평화를 위한 투쟁에서는 여성들의 역할에 대한 문제가 토의될 것이다.

2) 「受身性」. この形が示しているのは, 動作の源泉が主語自体ではなく, 主語以外の何かあるいは誰かであること; 主語は主語に向けられた動作の結果を味わうのみであることである. その際, これが非常に重要なのだが, 直接的な源泉は決して示されないのである: 완수하다 [完遂—] <完遂する>, ただし완수되다 [完遂—] <完遂する>.

중국 동지구에서는 가을까지 삼만 구천여향에서 토지개혁이 완수되었다.

ただし, 第2の意味は第1の意味に隣接し, 第1の意味の変種であることを述べる必要がある. 受身性を強調するためには, 되다の代わりに당하다 [当—]を用いる必要がある: 진압하다 [鎮圧—], ただし진압당하다 [鎮圧—]; 살해하다 [殺害—], ただし살해당하다 [殺害—]; 파괴하다 [破壊—], ただし파괴당하다 [破壊—]. ほぼ同じ意味で받다も用いられる: 벌하다 [罰—], ただし벌받다 [罰—]; 보장하다 [保障—], ただし보장받다 [保障—] 等; 구조하다 [救助—], ただし구조받다 [救助—].

補助動詞되다の基本的意味はこのようなものである. しかし現代朝鮮語ではそれはもう 1つの意味を持つ. すなわち되다なしでも自動詞である動詞の自動

的（非転移的）意味を強調し，かくして自動性（非転移性）を強調する手段として表れ，自動性（非転移性）をもっとはっきりとさせる．このことは，上に見たように，하다については言えないのである：부족하다 [不足—] <不足する>，ただし부족되다 [不足—] <不足する>．この機能は，派生する動詞が他動性（転移性）=自動性（非転移性）に関して中立的で，両者の意味を併せ持つところで特別の意味を持つ．

§34. 第3の方法（分析的方法によって派生動詞を作る）他動性（転移性）=自動性（非転移性）に関して派生的な動詞を作る第3の方法は分析的方法と呼ばれる．それは動作様式の接続形（語尾 -게）に補助動詞하다あるいは되다を接続させることにある．

a) 動作様式の接続形+되다 この結合は固有語動詞からも漢字語動詞からも作られ得る．このようにして作られた形は動詞の他動的（転移的）あるいは自動的（非転移的）性格にいかなる影響をも与えず，他動詞（転移動詞）は他動詞（転移動詞）のままであり，自動詞（非転移動詞）は自動詞（非転移動詞）のままである．このことは，ついでながら，文の構造がこの形を作る結果として変わらず，この形が作られる以前のままであることを意味する．しかし他動詞（転移動詞）の意味にも自動詞（非転移動詞）の意味にも強制されたという重要な補足的ニュアンスがもたらされる．

되다는，主語がなんらかの動作を外的な衝動のもとで行うことを示すが，外的な衝動とは動作を他のようにはなく，そのように起させるものである．主語に何らかの動作を強制する衝動としては，文に示される諸要素も文に示されない諸要素も現われ得る．文法的には諸要素は間接補語，あるいは具格あるいは後置詞말미아마，補助名詞때문에等によって作られた状況語によって表される．これで分るように，この意味は使役ヴォイスに対して同時に親縁的でもあり，直接に対立的でもある．それが親縁的なのは，それが外的衝動の影響のもとに行われた動作を表すことに関してである．それが対立的なのは，それが主体（主語）の強制された動作を表していて，対象（補語）の強制された動作を表しているのではないことに関してである．

결국 적은 자기 정세가 나빠졌음을 부득이 인정하게 되었으며 또 군사적 위기에 대하여 지꺼리게 되었다．

이로 말미암아 독일인들은 자기 력량을 분산시키지 않게 되었으며 또 동서 두 전선에서 전쟁하지 않게 되었다．

時には結合하게 되다는新しい状態あるいは動作の移行あるいは接近，古い動作から新しい動作への転機を示す．このニュアンスはすでにヴォイス的ではなく，アスペクト的である．

일월구일은 『피의 일요일』이라고 불리워지게 되었다.

그러는 동시에 녀자는 … 남자와 같이 일터에서 일할 수 있다는 신념을 가지게 되었다.

b) 動作様式の接続形+하다 この形は自動詞(非転移動詞)からも他動詞(転移動詞)からも作られ得る. もしも基本動詞が하다を持っているならば, それに接続形語尾 -게 を付けることにより하다は分けられない統一体をなす: 하게 ha+ge は -게 -khe を与える.

この形の意味は強制である. 補助動詞하다(게の後ろ)は, 主語が動作の遂行者ではなく衝動(させる人, 鼓舞する人, 許容する人等々)に過ぎないことを示している. 動作の真の遂行者はある時は対格, ある時は後置詞하여금を伴った具格によって作られる文法的補語である. これで分るように, この意味は構造하게 되다の意味に直接的に対立的であるが, 親縁的である.

일본놈이 우리들을 배우지 못하게 하였다. 배우게 하다<教えるようにする>, 배우지 못하게 하다<教えないようにする>. 事実上動作の遂行者は文の中に示されず, 暗示されている.

이러한 전투훈련은 지휘관들과 매개전투원들로 하여금 자기 행동지대의 지형 지물에 익숙케 하며 일기조건과 주야를 막론하고 부대들의 신속한 기동을 보장케 한다.

쏘련 군대는 히틀러 군대를 전멸했으며 그로 하여금 항복하게 하였다.

[注] この形を, 動詞ではなく形容詞が入り込む同音異義形とは混同してはならない. 形容詞の接続形게と補助動詞하다の結合は他動的(転移的)意味を持つ動詞を作る: 용이하다[容易—], ただし용이하게 하다[容易—].

テンス

絶対的テンス

朝鮮語のテンスの範疇は明らかに不十分に研究されてきた. この分野での知識の現状では朝鮮語のこの文法範疇についてもっとも一般的な概念を与えるのみである.

テンスと呼ばれるものは話しの瞬間への動作の関係付けである. 話しの瞬間への動作の関係を表すテンスは絶対的テンスと呼ばれる. 絶対的テンスは3つある. 話しの瞬間に行われる動作は現在テンスであり, 話しの瞬間以前に行われる動作は過去テンスであり, 話しの瞬間以後に行われる動作は未来テンスである.

§35. 絶対的現在テンス 絶対的現在とは朝鮮語では二様に表される. すなわち第1に, マイナス形態素により, 第2に, 接尾辞 -ㄴ (子音語幹の後ろ) 及び -는

(母音語幹の後ろ)によって、終止形 ㄴ다 を持つ単語には2つの形態素があり、 가 は語根であり、 ㄴ다 はこの動詞が主文の述語であることを示す語尾である。語尾 ㄴ다 はテンスの意味を持たない。かくしてこの単語にはテンス接辞はないが、テンス接辞の欠如はこの動詞が話しの瞬間に行われる動作を表していることの正にしろしであり、それゆえ、それはテンスのマイナス特徴、マイナス形態素を持つというのである。マイナス形態素は現在テンスを表すもつとも広く見られる方法である。接尾辞 $-\text{ㄴ}$ 及び $-\text{는}$ は語尾 $-\text{다}$ があるところでのみ用いられる: 문을 닫는다 ; 자장가를 부린다 。しかし語尾 $-\text{ta}$ は親しい話しのしろしであり、限られた用法を持つ。

現在テンスは4つの基本的意味を持つ: a) 話しの瞬間における動作 (あるいは状態): 책을 읽소 <本を読んでいます>; b) 通常の、与えられた対象に常に固有な動作 (あるいは状態): 새는 난다 <鳥は飛ぶ>; c) 過去に行われたが、あたかも話しの瞬間に聞き手の目の前で行われているかのように表される動作 (あるいは状態); これは現在テンスの文体的用法である。文法書ではそのような意味は「物語の現在テンス」あるいは「歴史的現在」と呼ばれる: 삼일 정오에 백두산에 오르다 <3日正午白頭山に登る> (過去の事件に関する日記での記述); d) 未来に起こる動作 (あるいは状態); この意味は文の主語が3人称である場合に可能である。

[注]「歴史的現在」はしばしば文学作品に表れる。ロシア語に訳す時にはこれは時折普通の過去テンスで表さなければならない。この翻訳の方法はこの本で一再ならず用いられている。

§36. 絶対的過去テンス 絶対的過去は朝鮮語では並行的接尾辞 $-\text{았-}$, $-\text{었-}$ の1つによって表される。並行的接尾辞と呼ばれるものは、同一の意味を持つが、各々が何らかの一定の動詞グループに割り当てられたことによって互いに区別されるようなものである。

接尾辞 $-\text{았-}$ は最後の音節が ㅏ あるいは ㅗ であるような語根に接尾する。他の場合には接尾辞 $-\text{었-}$ が接尾する。その際、もしも2つの同じ母音が並ぶ場合には、それらは1つの長母音に融合し、それは今では短く発音される。接尾辞 $-\text{었-}$ の前に母音と二重母音類 ㅓ , ㅕ , ㅖ , ㅗ , ㅛ , ㅜ (これらの音のすべては正書法上の i によってたやすく記憶される)があれば、語根と接尾辞 $-\text{었-}$ の間に「わたり skol'zjashchij 」の鳴音 y が現われる。徹底的に形態論的な正書法ではそれは表されない⁽¹¹²⁾。形態論的正書法から逸脱する場合には「わたりの鳴音 y + 接尾辞 $-\text{었-}$ 」は $-\text{였-}$ と書かれる。

強力に進行している統一化の結果として閉音節の後ろの接尾辞 $-\text{았-}$ は並行的接尾辞 $-\text{었-}$ にしばしば取り替えられる。

語根の最後の音節という時、常に考慮されるのは母音で始まる接尾辞あるいは語尾の前に用いられる変種である。

かくして次のように表れる。

보았다	보다から
쏟았다	쏟다から
받았다	받다から

しかし上述のことから期待される 받았다는代わりに稀に表れる 받았다는を参照せよ⁽¹¹³⁾。

올랐다	오르다から
먹었다	먹다から
불었다	불다から
누었다 ⁽¹¹⁴⁾	눅다から
주었다	주다から
가았다 > 갔다	가다から
서었다 > 서다	서다から
지었다 (지었다) ⁽¹¹⁵⁾	지다から
매었다 (매었다) ⁽¹¹²⁾	매다から
떡었다 (떡었다) ⁽¹¹²⁾	떡다から

動詞하다の過去形の作り方について述べなければならない。すなわち期待される 했다는代わりに 하였다 (古い標準語では 하었다)⁽⁶⁰⁾。ただし頻繁に現れる 했다는を参照。これは接尾辞に関しては正しいが、語根が変形されている。

[注] 上述の過去テンス接尾辞の後ろの例において終止形語尾の -다 が常に接尾している。

接尾辞 -았-, -었- は、語根と同様に、2つの変種を持つ少なからぬ接辞グループに属する：

第1変種： -at-	-ot-	-t-
第2変種： -ass-(y)-	-oss-(y)-	-ss-(y)-

括弧の中には接合母音が示されているが、この前には第2変種がもっともしばしば現れる。一般に第2変種の使用条件は語尾の場合と同じである（後続の形態素の頭音は母音）。

この形の基本的意味は話しの瞬間以前に行われた動作の表示である： 책을 보았다 <本を読んだ>, 고개를 숙이고 앉았다 <頭を下げて坐った>。

同じ形は相対的テンスの1つを表す必要のある時に用いられ得る（以下を参照）。

§37. 絶対的未来テンス 絶対的未来は朝鮮語では接尾辞 -겠- によって表さ

れる。これは第1語幹に接尾する。接尾辞 **-ㄷ-** は、**-았-** 同様、2つの変種を持つ接尾辞に属し、第1の変種は **-ket-**、第2の変種は **-kess-(y)** である。括弧の中には接合母音 **-y-** が示されている。第2変種の使用条件は語尾の場合と同じである (**-ㄷ-**)。

この形の基本的意味は話しの瞬間以後の動作の表示である。

오늘 나는 극장으로 가겠습니다。Segodnja ja idu v teatr. <今日わたくしは劇場に行きます。>

未来の意味の形態素 **-ㄷ-** を不確実性の意味の同音異義的形態素 **-ㄷ-** と混同してはならない。前者は未来に起こるべき動作に関して、後者は任意のテンスに合わせられた動作に関して用いられる。

저산 넘어는 시방 비가 오겠다。Sejchas za toj goroj, kazhetsja, idet dozhd' <あの山の向こうは今雨が降っているらしい。> (現在テンス)

어제 비가 왔겠다。Vchera, kazhetsja, shel dozhd' <昨日雨が降ったらしい。> (過去テンス)

래일 비가 오겠다。Zavtra, vidimo, pojdet dozhd' <明日雨が降りそうだ。> (未来テンス)

確実性について話し手が不確かであるような事件が未来に起きなければならない時には接尾辞 **-ㄷ-** 1つだけで十分であるが、この場合はこれらの条件において2つの意味を併せ持っている(上の例を参照)。この場合確実未来を不確実未来から区別できるのはもっぱらコンテキスト、一連の同伴する単語によってである。普通 **-ㄷ-** が未来テンスの意味を持つのは文の主語が1人称あるいは2人称である場合である。文の主語が3人称であると、**-ㄷ-** は普通は蓋然性 **verojatnost'** を表す。

2つの **-ㄷ-** は、朝鮮語では모르겠다 **ne znaju** <知らない> が普通形態素 **-ㄷ-** を持たなければならないという一見おかしい事実を説明している。ここではこれは未来テンスではなく、モダリティーのしるし(ロシア語の **«pravo, ne znaju»** <本当に、わたしは知りません>のタイプ)なのである⁽¹¹⁶⁾。

相対的テンス

絶対的テンスは次の表の形で総括する。ここで **No. 1** は語根、**No. 3** は絶対的テンスの接尾辞、**No. 4** は語尾を示すが、**No. 2** は後に明らかとなる。

	No 1	No 2	No 3	No 4
現在	하-	—	ゼロ	-ㅁ니다
過去	하-	—	-였-	-습니다
未来	하-	—	-ㄷ-	-습니다

[注] **-yax-** の代わりに **-yas-** 及び **-ket-** の代わりに **-kes-** は同化である(後

続の *s* の前で).

No 2 の空欄をすでにわれわれの知っている接尾辞 *-at-/~at-* で埋めよう. その際今のところそれが今まで持っていた意味 (絶対的過去) を捨象しよう. 次のものが得られる.

No 1	No 2	No 3	No 4
하-	-였-	ゼロ	-습니다
하-	-였-	-였-	-습니다
하-	-였-	-졌-	-습니다

形態素 *-at-/~at-* はこの表で No 2 の位置を占めて絶対的過去の意味をもはや持たず, 絶対的テンスではなく相対的テンスを表す. 相対的テンスとはある動作の, 他の動作の絶対的テンスとの関係を表すテンスである. かくしてここで基準点となるのは直接話しの瞬間ではなく, 他の動作が行われる時間である. 例えば, *«prochitav étu knigu, ja pojdu poguljat' (ja poshel poguljat')»* <この本を読んでから, わたくしは散歩に行くだろう (わたくしは散歩に行った)> という文で *«prochitav»* <読んでから> [副動詞完了アスペクト過去] は絶対的テンスではなく相対的テンスを表している. 基準点は他の動作 *«pojdu»* <わたくしは行くだろう> [完了アスペクト未来] あるいは *«poshel»* <わたくしは行った> [完了アスペクト過去] である. これは先行する (他の時間に関して) 時間である⁽¹¹⁷⁾.

しかし「相対的テンス」という術語はなおも他の意味をも持っている. 相対的テンスと呼ばれるものは, 後続の瞬間との関係においてこの動作自身の発展, 流れにおいて取り上げられた動作を表す時間でもある. この後続の瞬間がこの動作の結果としての状態を反映し得ることは当然である. この意味を持つ相対的テンスはパーフェクト *perfektivnye* と呼ばれる. かくしてパーフェクト性 *perfektivnost'* は相対的テンスの特殊な場合である. 共通点は話しの瞬間が直接の基準点ではないことである.

朝鮮語における相対的テンスについての問題は研究されていない. それゆえ以下の叙述ではわれわれは相対的テンスの 2 つの変種の分割をもっとも一般的な形で行うであろう.

§38. 相対的現在テンス 語根と絶対的現在テンスのマイナス接尾辞の間に相対的テンス接尾辞 *-았-/~았-* を挿入することによって作られる. この並行的接尾辞の接尾する条件は絶対的過去接尾辞 (上記参照) と同じである. 例: *살-았-습니다* 'on zhiv' <生きています>. これで分るように, 相対的現在形は絶対的過去形と完全に一致する: *살았습니다* 'zhil' <生きました>. 曖昧さは何よりもコンテキストによって克服される.

相対的現在は、過去に行われたが、その結果が状態として現在にも保たれているという動作を意味する。かくしてそれは、現在との関係において取り上げられた過去であり、言い換えるなら、相対的パーフェクト・テンスである。この意味は文法書で普通は限界動詞 **predel'nye (terminativnye)**⁽¹¹⁸⁾ と呼ばれる動詞のグループで特に浮き彫りにされる。限界動詞と呼ばれるものは、内的限界を持ち、無限に持続し得ず、一定の状態（あるいは他の動作）に移行し得ない動作を表す動詞である。例えば、**«sadit'sja»** [英 **to sit down**] <坐る> は、この動作がそれ自身の発展において状態 **«sitet'»** [英 **to sit**] <坐っている> という形の内的限界を持っているから、限界動詞である。逆に、動詞 **«boltat'»** [英 **to chatter**] <ペラペラしゃべる> は、この動作の発展がそれから論理的に出るであろう何らかの状態あるいは他の動作を引き起こさないから、非限界動詞である。

限界動詞はそれ自体の性質上一定の限界を持ち、何らかの状態への移行を示すから、それと同類の動詞においては相対的現在の意味がもっとも明瞭に表れる。典型的な例：앉았다 は **'sel'** <坐った> (過去における動作) をも **'sitet'** <坐っている> (現在における状態) をも意味する：누었다⁽¹¹⁴⁾ は **'leg'** <横になった> (過去における動作) をも **'lezhit'** <横になっている> (現在における状態) をも意味する。나는 지금 병상에 누었습니다⁽¹¹⁴⁾. **'ja sejchas lezhu bol'noj.'** <わたしは今病床に伏せています。> 参照。왔다 は **'prisel'** <来た> (過去における動作) をも **'naxodit'sja zdes'** <来ている (ここにいる)> (現在における状態) をも意味する。

さらに 그는 살았는가? (**No**) **zhiv li on (eshche)** <彼は生きているのか?> (-는 はここでは形式的連体形 (形動詞)) 参照。

まさにこの相対的、パーフェクトの意味によって、**'skol'ko sejchas vremeni?'**, **'kotoryj sejchas chas'** <今何時ですか?> という問いが朝鮮語でいわゆる「過去テンス形」で普通は発せられるという事実が説明される。このテンスは実際には相対的現在 (パーフェクト) なのである。

몇시 되었소? **Kotortyj sejchas chas?** <何時ですか?>

세시 되었소. **Sejchas tri chasa.** <3時です。>

この意味が特に浮き彫りにされるのは命令法においてであり、これは本質上現在と結びついているのである。섰거라! **'stoj'** (**ostavajsja vstavshim**) <立っている!>, 앉았거라! **'sidi!'** (**ostavajsja sevshim**) <坐っている!>, 누었거라! **'lezhi'** (**ostavajsja legshim**) <横になっている!> 等々。(これらの例における接尾辞-았-/었- を参照せよ。絶対的過去の観点からはそれは説明され得ない。)

§39. 相対的過去テンス 語根と絶対的現在テンスのマイナス接尾辞 -았-

(この場合は他の並行的接尾辞なしに *-ㅁ-* のみ) の間に相対的テンス接尾辞 *-았-/ㄴ-* を「接中辞的に挿入すること」 *infiksacija* によって作られる。接尾する条件は絶対的過去接尾辞(上記参照)と同じである。例: *앉았었다* ‘*sidel*’ <坐っていた>。

相対的過去はパーフェクトの意味(結果がそれ以後に、過去にも保たれるという過去における動作)はある動作が過去に行われた他の動作に先行することをも意味している。

어세로브 대위는 지휘소로 들어왔다. 모두가 고요한 침묵에 잠겼었다.
밤을 못 자고 새운지라 많은 병사와 장교들이 천막에 엄폐부에서 잠들었던 것이다。

ここで動詞 *잠졌었다* は <静けさの中に浸った(彼が到着する以前に),そして静けさの中に浸り続けた(彼が到着した瞬間に)> という意味を持っており,ここから相対的過去形が出てくるのである。

§40. 相対的未来テンス 語根と絶対的現未来テンス接尾辞 *-겠-* の間に相対的テンス接尾辞 *-았-/ㄴ-* を「接中辞的に挿入すること」 *infiksacija* によって作られる。それが接尾する条件は絶対的過去接尾辞(上記参照)と同じである。このテンスは他の未来の動作よりも前に行われたを表すのに用いられる。この際この先行する動作の結果は他の未来の動作が行われる瞬間までに保たれ得る。

이 다음에 만날 때에 당신도 기사가 되었겠습니다。

ここでは動詞 *되었겠습니다* は <なるだろう(すでにわれわれの将来の出会いの瞬間以前に),そしてあり続けるだろう(将来の出会いの瞬間になおも)> ことを意味する。ここから相対的未来形が出てくるのである。

接尾辞 *-겠-* が蓋然性をも示すことを想起しなければならない。それゆえ *하였겠다* というタイプの構造は自身の中に 2 つの意味を(しかし同時にではなく)含んでいるのである。すなわちもしも *-겠-* が法の接尾辞であるならば、構造全体は ‘*kazhetsja, sdelal*’ <したらしい> を意味し、かくしてテンスの観点からは絶対的過去に属するし、もしも *-겠-* がテンス語尾として理解されるならば、構造全体は ‘*sdelat' to-to i to-to do togo, kak budet sovershenno drugoe dejstvie*’ <完全に他の動作が行われる時以前にあれこれをする> ことを意味し、かくしてテンスの観点からは相対的未来に属する。

[注] 朝鮮語においてテンス範疇がほとんどまったく研究されていないので、現在絶対的テンス形と相対的テンス形のより正確な相互関係を確立ことが出来ない。ところが、いくつかの事実は絶対的テンスもある程度相対的意味を持ち得ることを語っている。次の例がこのことを語っている。

거북선은 결코 다른 나라를 빼앗겠다든지 약한 나라를 치기 위하여 만든

것이 아닙니다.

ここで問題となっているのは過去の事件である。ところが、動詞 ㄷ は未来テンス形を持っている(ㄷ)。蓋然性がここで問題とならないのであるならば、 $-\text{ㄷ}$ 形が相対的テンスの特別な変種—相対的未来テンス(基準点として取られた) $\langle \text{zaxvatit' vposledstvii (posle togo, kak postroit')} \rangle$ —<後に奪う(建設した後で)>を表している⁽¹¹⁹⁾。この問題は、しかしながら、一層の研究を要している。

テンスは、上に述べたように、非位置的範疇である。このことはそれが動詞をどんな統辞論的位置においても、この統辞論的位置を表すどんな語尾の前でも、すなわち終止形語尾の前でも、連体形語尾の前でも、接続形語尾の前等々でも作り得ることを意味する。上では、叙述の便利のために、われ w 3あればテンス接尾辞を終止形語尾とともに見た。しかしこれらの形は動詞の規定的機能を示す連体形語尾の前でも可能なのである。テンス接尾辞を連体形語尾と結合させると次のものが得られる(語根として 하(다) を取る)⁽¹²⁰⁾。

テンス+連体形 $-\text{는}$	テンス+連体形 $-\text{ㄴ}$	テンス+連体形 $-\text{ㄹ}$
하 는	하 은	하 을
하 겠는	하 겠은	하 겠을
하 였은는	하 였은은	하 였은을
하 였겠는	하 였겠은	하 였겠을

今後の記述からも明らかなように、どの連体形も動詞の統辞論的機能(規定語)だけでなくこの動詞のテンス($-\text{는}$ 現在, $-\text{ㄴ}$ 過去, $-\text{ㄹ}$ 未来)をも表している。しかし、連体形がテンスをも表すならば、何故これらの連体形の前にテンス接尾辞が挿入されるのか? これは2つの異なる文法的手段による同一のものの反復ではないのか? 否、反復にあらず。何故なら朝鮮語にとって特徴的な1つの特徴は、連体形の前にテンス接尾辞が現れるところでは、連体形は自身の意味のうちの1つ—テンス—を失い、動詞の統辞論的役割への指示だけを保つというものだからである。

勿論テンス接尾辞は接続形の前でも可能である。しかしすべての接続形がテンス接尾辞との結合を許容するのではない。例えば、語尾 $-\text{자}$, $-\text{아}$ 等を持つ接続形がそうである。接続形とテンス接尾辞との接尾の条件は以下にわれわれにより朝鮮語の接続形の章で示されるであろう。

動作様式

動作あるいは状態は時間において経過する。時間における動作あるいは状態の経過はテンスの文法範疇によって表される。時間における動作あるいは状態の経過の性格あるいは様式はさまざまである。すなわちそれは持続的性格を持

ち得るし、それは同時に多回的に繰り返され得るし、それは同種的作用の総計からなり得る (nosil=nes+nes+nes... <通う=行く+行く+行く... >⁽¹²¹⁾). どのように動作が経過するかを表すような文法範疇、動作の経過の性格は動作様式の範疇と呼ばれる。ロシア語でこの範疇と結びつくものは完了体 (完成アスペクト) と不完了体 (不完成アスペクト) である。朝鮮語にはアスペクトはなく、アスペクトに親縁的なものは存在する。テンス、そして、部分的には、ヴォイスとは異なり、この範疇は分析的に、基本的な、形態形成的な動詞に一連の補助動詞、時には補助形容詞を付ける方法によって表される。この結合が全体として動作様式の範疇を表すのに役立っているのである⁽¹²²⁾。

§41. 具体的持続性の範疇 この範疇は動作あるいは状態はそれが実現する時と関係なしに具体的に持続する性格を持ち、しかも動作あるいは状態の具体的に持続する性格は視覚的・感覚的に受け入れられる。例えば、«on neset» <彼は持って行くところだ> 対 «on nosit» <彼は (恒常的に) 持って行く>, あるいは «on nes» <彼は持って行くところだった> 対 «on nosib» <彼は (恒常的に) 持って行った>。

具体的持続性の範疇は3つの細分化された、部分的な範疇に買い分類される。

a) 第1の部分的な範疇は絶対的に、すなわち他の時間に関係なしに取られたなんらかの時間の断片における動作あるいは状態の持続的性格を表す。

1) 持続的動作 表現方法: 「先行の接続形 (語尾 -고) + 補助動詞있다 (相応のテンス)」。先行の接続形は動作がすでに始まったことを示し、補助動詞있다はこの始まった動作が継続していることを示している。

낮을 갈고 있소。

낮을 갈고 있었습니다。

낮을 갈고 있겠습니다。

2) 持続的状态 「先行の接続形 (語尾 -아 / -어) + 補助動詞있다 (相応のテンス)」。

정문위에는 커다란 붉은 글자로 쓴 구호가 붙여 있고 사층맨위에는 국기가 펄펄 휘날리고 있습니다。

この例で前者の動詞述語は持続的状态を表し、後者の動詞述語は持続する動作を表している。これによってそれらの異なる形が説明される。

b) 未来に向かう持続的動作 表現方法: 「先行の接続形 (語尾 -아 / -어) + 補助動詞가다 (相応のテンス)」。

여름에 곡식이 빠쩍 빠쩍 말라 갈 때에 우리는 비가 되어 나옵니다。

[注] 先行の接続形 -아 / -어 と補助動詞가다の結合を同じ構造を持つ複合動詞と混同してはならない。外的には날아가다 <飛んで行く> と말라가다

<乾いていく>は同じように作られている。第1の要素はこれらの結合における定数としての接続形であり、第2の要素はこれらの結合における変数としての動詞가다である。第2の場合では結合は2単語であり、そのうちの第2の単語は補助的意味を持ち、持続し、未来に向かう動作を表す。この2つの結合を区別するのは難しくない。合成語の第2要素としての가다は運動の動詞（「飛ぶ」、「入る」、「跳ぶ」、「走る」等々）にのみあり得るが、補助動詞としての가다は動詞の過程的、すなわち持続的性格を赦すすべての動詞の後ろで可能である。

この場合の先行の接続形は動作がすでに始まり、持続し続けることを意味する。

c) 第3の部分的範疇は現在に向かう持続的動作を表す。表現方法：「先行の接続形（語尾 -아 / -어）＋補助動詞오다（相応のテンス）」。

우리는 항상 평화를 주장해 왔고 또 어느때나 그를 주장하고 있는 것이다。

나는 형님에게 채집해 온 풀들의 이름을 물어 보았습니다。

[注] 先行の接続形 -아 / -어と補助動詞오다の結合を同じ構造を持つ複合動詞と混同してはならない。날아오다<飛んで来る>、돌아오다<帰ってくる>、나려오다<降りてくる>等々は合成語であるが、주장해오다<主張してくる>は基本動詞と補助動詞である。合成語の第2要素としての *oda* は普通は運動を意味する動詞語幹の後ろにのみ現われる。

§42. 完遂した動作の範疇 この範疇は、動作が、それが行われる時間とは関係なく、完遂し、それ以上持続しないことを示す。この範疇は2つの部分的な下位範疇を持つ。

a) 絶対的完遂性 この範疇は、動作が、可能な結果と関係なしに、すなわちこの動作の結果として状態が生ずるか（例：ドアを開き、ドアを開けたままにした）、動作が他の動作が生ずる瞬間に力を保っているか、あるいはそうでないかに関係なしに、完遂したことを示している。絶対的完遂性の表現方法は先行の接続形（語尾 -아 / -어）に接尾される補助動詞버리다, 나다 (내다) である。

그는 그만 말할 용기를 잃어 버렸다。

배를 구해 내었다。

同じような役割は先行の接続形 (-고) の後ろの補助動詞말다も果たす。

력사가 가르치고 있는 바와 같이 정의의 전쟁은 승리하여 부정의의 전쟁은 반드시 패배되고야 만다。

これらの補助動詞の俗語的等価物は먹다である：잃어 먹다, 잃다から。

b) 結果的完遂性 この範疇は、動作が実現され、この動作の結果が対象に、

その状態として、一般に新しい動作に関係なしに（ドアを開き、ドアを開いたままにし続ける）、あるいは具体的に新しい動作が生ずる瞬間に（杖を持ち、杖とともに出かけた）反映され続けることを示す。

第1の意味のニュアンス（一般に新しい動作に関係なしに保たれる結果）は補助動詞**놓다**と**두다**によって表される。この条件の補助動詞は先行の接続形（語尾 **-아 / -어**）に接尾する。双方の場合に予見という補足的ニュアンスがある（結果は可能な動作を予見することに保たれる）。かくしてこの形はモーダルなニュアンスもヴォイス的ニュアンスも併せ持つ。

엄마가 밥 지어 놓고 요간 너를 기다립니다。

어마니는 등에 불을 켜 놓았다。

第2の意味のニュアンス（新しい動作が生ずる瞬間に保たれ、新しい動作を伴う結果）は先行の接続形（語尾 **-아 / -어**）に接尾するこの条件での補助動詞**가지다**によって表される。そのような結合が、動詞が文の中で中間の述語として現われる場合でのみ可能であることは明瞭である。

김진구는 딱딱 계획을 세워 가지고 일한다。

모자를 사 가지고 집으로 떠나갔다。

法とモダリティー

法と呼ばれるものは、動作（もっと広くは、特徴）に対する話し手の関係を表す文法範疇である。言い換えるならば、それは動作と行動する主体の関係の正確に対する話しての観点を反映している。確信、推定、動作の存在（あるいは不存在）についての疑問等々これらすべての意味は法の範疇によって伝達される。

モダリティーと呼ばれるものは、現実に対する動作と関係、動作それ自体の現実性のさまざまな段階を、動作に対する話しての関係とは関係なしに、表す文法範疇である。動作の存在あるいは不存在、動作の可能性、必要性、動作の希望、欲求、試み等々これらすべての意味はモダリティーの範疇によって伝達される。

法とモダリティーの範疇が相互関連あるが、同一でないのは、次のようなタイプの文が相互関連あるが、互いに同一ではないのとまさに同じである：«**reka k a z h e t s j a ochen' glubokoj**»と«**reka, k a z h e t s j a, ochen' gluboka**» <川はとても深そうだ>；«**on dolzhen byl ujtj**»と«**on, dolzhen byl, ushe**» <彼は去ったに違いなかった>；«**on mozhet chitat'**»と«**on, mozhet, prochtet**» <彼は読むかも知れない>⁽¹²³⁾。ここでは前者では客観的事実、事実の客観性の異なる段階について話題となっており、後者では客観的な事実に対する関係が話題となっている。

法とモダリティーの範疇は言語においていくつもの総合的な形と分析的な形によって表される。朝鮮語について言えば、法の範疇はそこでは普通は語尾によって、稀には補助的な単語（形容詞）や助詞（例えば*걸*）によって表される。この範疇は位置的なものであり、主文（あるいは単純文）の述語の位置においてのみ動詞について可能である。この範疇を他の統辞論的位置（例えば規定語の位置）で用いることは制限され、一連の条件、例えば、補足的な形態論的手段を利用することと結びついている（この手段は結局は法の意味を中和する。例えば, *한다*는形は連体形の章で述べられる）。

朝鮮語のモダリティーの範疇は、法の範疇とは異なり、主として分析的に、すなわち一連の補助的な単語（形容詞、動詞、名詞）及び助詞によって表される。この範疇は非位置的である。この範疇は述語、規定語、状況語等の位置に見ることが出来る。非位置的な範疇としてそれはこの章で観察される。

このほかに、この章では、モダリティーと同様、補助的な単語によって表される法（これらは一定の条件のもとではモダリティーにも奉仕する）も観察される。

§43. モダリティーの範疇 モダリティーの範疇は希望、意図、義務、可能性等を表すのに奉仕する。

a) 希望 表現方法：接続形 *-고*の後ろに補助形容詞 *싶다*（文章体ではまた古風な *지다*も）。

목이 말라서 먹고 싶소.

우리들은 진작 물속에 뛰어들고 싶었습니다.

補助形容詞 *싶다*から作られた動詞 *싶어하다*は普通は第 3 人称についての話に用いられる。

금룡이가 금붕어를 가지고 싶어하는 마음을 금룡이 아버지도 모르지는 않았습시다.

b) 意図, 欲求 表現方法：単語変化（屈折）接尾辞 *-려*（古形 *-라*）＋補助動詞 *하다*。基本動詞（接尾辞 *-려*）と補助動詞 *하다*の間には普通助詞 *-고* が挿入される。すべての語尾は補助動詞にのみ接尾し得る。接尾辞 *-려*は第 2 語幹に接尾する。《*d(r)*—ゼロ》動詞では接尾辞 *-ryɔ* は普通は完全な第 2 語幹に接尾辞する (§12 参照)：알려。短い語幹 (*l*なし) は規範ではない。

그 수레는 세놈이 넉넉히 끌 수 있게 가벼운 것이었습니다. 두루미는 구름속으로 끌어올리며 하였고 봉어는 물속으로 끌어들이가려 하였고 가재는 뒷걸음질을 하였습니다.

[注] ここでは幾分自由なロシア語訳で 2 度意図の「表現」が用いられている：끌어올리려 하였고 ‘*stremitsja tjanut' kverxu (v oblaka)*’ 及び

끌어들어가려 하였고 'stremitsja tjanut' (v vodu)?.

하기에는 원산으로 해수욕 가려 합니다.

助詞 -고는落とし得るが, 補助動詞하다は奇異本的な動詞と1つに溶け合う. 하려고하다という形は結果として하려다を与え, これはすべての位置的範疇と非位置的範疇を持ち得る: 만들려다가; 만들려는等々.

c) 試み 表現方法: 先行の接続形 -아 / -어 + 補助動詞보다: 읽어 보아라.

d) 可能性 2つの可能性の基本的な表現方法がある.

1) 基本動詞未来テンス連体形 + 補助名詞수 + 動詞있다 (否定は없다). この構造は主観的可能性にも客観的可能性にも用いられる. 수の後ろには取り立て助詞 -는あるいは主格語尾 -가があり得る.

학교에서나 집에서나 거리에서나 언제든지 다른 어린이들의 모범이 될 어린이들만이 떠오네르가 될 수 있습니다.

나는 나이가 겨우 열일곱이고 아직 약하여 어른들 만큼 일을 할 수 없습니다.

2) 未来テンス連体形 + 補助形容詞만하다の結合. この結合は主観的可能性を表すのに用いられる.

그 힘차고 씩씩한 일은 과연 사내가 할 만한 일ियो.

これらの意味に近いものとしてなおも次の構造が用いられる.

1) 基本動詞未来テンス連体形 + 補助名詞줄 + 動詞알다及び모르다の結合: 할 줄 알다, 할 줄 모르다.

2) 基本動詞未来テンス連体形 + 補助名詞리 (語幹格, しばしば助詞 -는あるいは主格) + 動詞있다 (否定없다) の結合: 할 리 (는あるいは가) 있다, 할 리 (는, 가) 없다.

모를 리가 없다.

e) 当為性 当為性の範疇は次の分析的構造によって表される.

1) 「基本動詞の先行の接続形 (語尾 -아 / -어) + 助詞야 + 補助動詞하다」構造の公式: 하여야 하다.

퇴비를 많이 만들어야한다.

우리는 지금부터 전기를 쓰는 좋은 기계를 많이 만들어 내고 모든 인민들이 전기를 널리 리용할 수 있게 힘써야 하겠습니다.

우리의 지휘관들은 전투 임무의 성과적 해결을 위한 결정적 방책을 구명하여야 한다.

‘tol’ko’の意味を持つ助詞야⁽¹²⁴⁾の後ろに同じ意味を持つ助詞만이來得る.

어떠한 일이 있더라도 구분대와 련대와의 련락을 보장해야 만하였다.

[注] 最後の例で보장해は接続形보장하여의短縮形である.

2) 「基本動詞の先行の接続形(語尾 -아 / -어) + 助詞야 + 接尾辞 -겠- + 後続の終始形」. 構造の公式: 하여야겠다. この構造は上に記述した構造の短縮された変種である. これは分析的な結合の単語の総合的な形への転換の結果と見ることが出来る: 하여야 하겠다→하여야겠다→해야겠다.

전투는 앞으로 더욱 가렬해질 것이요. 통신병 동무들도 일층 용감성을 발휘하여 통신연락을 보장해야겠소.

빨리 어디 숨어야겠다.

終止形語尾に伴われる接尾辞 -겠- の代わりに終止形語尾지, 지요が来得る. 참고 있어야지요.

빨리 집으로 가야지.

3) 「基本動詞の先行の接続形(語尾 -아 / -어) + 야 + 補助動詞되다」. 構造の公式: 하여야 되다.

농사를 잘 짓기 위하여는 좋은 농구를 만들어 써야 되며 모든 농민들이 부지런히 일하여야 한다.

4) 未来テンス連体形はテンス的意味のほかにモーダルな意味をも持っている. この連体形のモーダルな意味の1つは当為性である. モーダルな意味を持つ未来テンス連体形は, 語尾 -ㄹ을/ㄹ것을を持つ動詞と補助名詞것(文章体では마も)及び繫辞とともに終止形に入り込む. 構造の公式: 할 것이다あるいは할 바이다.

구운몽의 문제는 조선 문학사를 쓸 이들이 연구 치러 할 바이요.

当為性を表す分析的な構造「先行の接続形(語尾 -아 / -어) + 助詞야 + 補助動詞하다」において補助動詞하다にこれまた当為性を表す未来テンス連体形を付加すると, 結果として当為性が二重に表示される合成形が得られる. 終止形の位置ではそのような構造は補助名詞것及び繫辞を伴う: 하여야 할 것이다.

선전원들은 름목 종자를 광범히 채취하도록 선전 선동사업을 광범히 전개 하여야 할 것이다.

5) 「動詞否定形の条件の接続形 + 動詞되다否定形」構造の公式: 하지 아니 하면 아니하다 / 하지 않으면 아니되다.

부지런히 일을 아니하면 아니 되겠습니다.

6) 否定的当為性(してはならない)を表すためには次の構造が用いられる: 「先行の接続形(語尾 -아서 / -어서) + 助詞 -는 + 動詞되다否定形」. 構造の公式: 하여서는 아니되다(あるいは안되다).

우리는 락관해서는 안 되겠소. 전투는 앞으로 더욱 가렬해질가렬해질 것이다.

채소와 곡식을 굽어 먹는 해로운 벌레들을 잡아 주는 것은 재미다. 그렇기 때문에 재미를 해하여서는 아니 된다는 말이다.

§44. 法の範疇 法の範疇は現実への話しての関係を表すのに奉仕する.

a) 動作の外見 表現方法:

1) 基本動詞の疑問形+補助形容詞보다. 疑問形のしるしはあるいは -가, あるいは -나である. -나はどのテンスの第1語幹にも接尾する: 하나 보다現在テンス, 하였나 보다過去テンス, 하겠나 보다未来テンス. -가はどのテンスの第1語幹にも接尾するが, その際テンス接尾辞と -가の間に形式的な意味を持つ連体形が挿入される.

現在テンス	ゼロ	-는	-가	보다
過去テンス	-았 /-었	-는	-가	보다
	-았 /-었	-던	-가	보다
未来テンス	-겠-	-는	-가	보다
	—	-ㄴ	-가	보다

(1人称のみ).

세수도 못하였나 보오?

다 되었나 보다.

그저께 떠난 배로 왔는가 보다.

땃돌위에 신한 자국이 있습니다. 동생이 나왔던가 봅니다.

나는 간다. 다시는 너를 보지 못할가 보다.

가보다の前では動詞の繫辞は인形あるいはモーダルな意味を持つ일を取る.

저 사람은 시골 사람인가 보오.

形容詞の同様の形を比較せよ.

저 내가 이 내보담 넓은가 보오.

2) 連体形+補助形容詞듯하다あるいは듯싶다:

現在テンス	-는	듯하다
未来テンス	-ㄴ	듯하다
過去テンス	-ㄴ	듯하다
	-았을 /-었을	듯하다

아마도 아무대도 가지 못할 듯합니다.

그 사람의 병은 나왔을 듯하오.

上述の듯하다を ‘slovno’, ‘budto’ <まるで... のように>の意味の同音異義語の듯하다と混同してはならない⁽¹²⁵⁾.

푸른 바다 누가 어디서 푸른 물감을 풀어 놓은 듯한 바다...

3) 補助的な助詞걸は動詞の未来テンス連体形に接尾する. 推定が過去の事件に関して述べられるならば, 連体形の前に過去テンス接尾辞が挿入されるが, 連体形それ自体は形式的意味を獲得する.

모레는 회의가 있을 걸.

어제 그이가 해삼위에 도착하였을 걸.

지금은 그들이 점심을 먹었을 걸.

b) 蓋然性は普通は接尾辞 -겠- によって表される. 接尾辞 *-ket-* は過去テンスと現在テンスに接尾し得る (後者の場合テンス接尾辞はマイナス): 하겠다 は現在あるいは未来における蓋然性あるいは可能性を意味し (ただし話しの主体と発話の主体が一致しない), 하였겠다 は過去における蓋然性あるいは可能性を意味する.

비가 오겠다.

비가 왔겠다.

[注] 接尾辞 -겠- は普通はさらに未来をも意味する. この意味をそれが持つのは, 主として動詞述語の主語が 1 人称 (稀に 2 人称も) である 場合である.

蓋然性は未来テンス連体形によっても表される. 動詞が述語の場合, 未来テンス連体形の後ろに補助名詞것と繫辞가蓋然性のニュアンスをもって表れる: 할 것이다—この意味を持った現在あるいは未来テンス, 하였을 것이다—この意味を持った過去テンス.

이 못은 언제 어떻게 생겼는지 아무도 아는 사람이 없을 것이다.

最後に, 標準語にはもう 1 つ蓋然性の表現方法があり得る. これは接尾辞 -렸- であるが, これはテンス接尾辞とは結合せず, 未来において起こり得る事件に関して用いられる.

아, 행복한 사람이 되렸다.

§45. 否定の範疇 否定の基本的な表現方法は 2 つある. 前置的と後置的とである. 前者では否定の範疇を作る補助的な単語は動詞に先行し, 後者ではそれは動詞の後ろに置かれる. 前者では動詞は否定を作る補助的な単語に合わせることはなく, 後者では動詞は不十分な体言形を取る (語尾 -지).

a) 否定の前置的形成方法 この方法によって否定を作るには動詞の前に否定の助詞⁽¹²⁶⁾아니 (短縮された変種안) あるいは못を置かなければならない. 第 2 の助詞は主観的な不可能性という補足的な意味をもたらすが, これは常にロシア語で表せるわけではない. 공부하다のタイプの動詞は名詞に補助動詞하다を接尾させることで作られるが, 否定の助詞は動詞全体にではなく補助動詞하다に先行する. この場合そのような動詞の中の名詞の部分は普通は対格形を取る. この規則は対象的な語根のある動詞 (例: 장가들다) ⁽¹²⁷⁾にも 当てはまる.

어째 전차가 아니 오는가?

이 사람은 말을 못 하는 사람ियो?

찾아 봐야겠군...이 속에 안 있나?

준성의중한 병도 다 나아서 한 주일도 못 되어 학교에 출석하게 되었습니다.

분주해서 편지도 못 한다. (動詞편지하다の否定)

b) 否定の後置的形成方法 この方法によって否定を作るには基本動詞の不十分な体言形の後ろに否定の補助動詞아니다あるいは못하다を接尾させる必要がある. 아니다の短縮された変種は않다である. 意味の点では못하다は못に, 아니다は아니に対応している. 不十分な体言形は時に語幹格形を, 時に対格形を持つ. 語幹格は助詞는あるいは도を伴うことがある.

하루 이틀 지내도 병은 낫지 않고 점점 더해졌습니다.

먹었으나 배는 아직도 부르지 않았다.

그러니 그들은 점순이를 알아보지 못했다.

왜 당신은 아무 말도 하지 않소?

우리는 한 그루도 마르지 않도록 정성껏 심고는 흙을 단단히 다졌습니다.

자세히 물어보지도 못하였다.

새끼들도 먹이고 저(어미닭)는 먹지를 않습니다.

話し言葉では単語않다はしばしば(特に形容詞で)先行する体言形と溶け合って総合的な形を作る. その際体言形の末尾の *i* は落ちる(크지않다は大크잖다となる). 補助動詞하다によって作られる動詞(공부하다のタイプ)では補助動詞の語根までが溶け合う(하다の体言形하지は치と変わるが, *i* が落ちることによって否定形は溶け合って잖다となる). 例: 파급하다は2つの形(分析的な形と総合的な形)を持つ(파급하지아니다あるいは파급하지않다及び파급잖다).

動詞は2つの否定を同時に持ち得る. それを作る方法は1つの否定を作るのと同じである. すなわち各々の後続の否定は選考する否定の体言形に接尾する. 二重否定が当為性という意味を持った確言であることは, ロシア語で«ne mogu ne...» [英 cannot help ...ing] =«dolzhen» [英 must, should] と同じである. 例: 읽지 아니하지 못한다<読まざるを得ない>. 아니하지は *hada* の하지形を持っているから, 最後の形は, 上に述べたことによって, 치と短縮され, その結果二重否定の短い形が作られる: 읽지 아니치 못하다.

動詞の否定の範疇は否定の繫辞아니다(及びその変種아니라等)と混同してはならない. 否定の繫辞は名詞とともに合成述語をなす(この場合繫辞に付く項は主格形を持つ). 例: 나는 학생이 아닙니다. 否定の繫辞は, 動詞述語ではなく文の何らかの他の成分を否定する必要が生ずるところで, しばしば用いられる. この場合動詞自体は否定形を取らず, 補助名詞것の前で連体形を持ち得

る。「動詞連体形+補助名詞것(主格形)+否定の繫辞아니다」はこの場合動詞述語にではなく、文の任意の他の成分と関係するのである。これは動詞述語の否定ではなく、主語、あるいは補語、あるいは状況語等の否定である⁽¹²⁸⁾。

이(때오네르) 궁전에는 왕이나 어떤 특별한 사람들이 사는 것이 아납니다。

그는 처음으로 바닷길을 떠나간 것이 아납니다。

否定の範疇の特殊な変種は禁止(禁止的否定)である。これは否定と命令法を併せ持っている。아니あるいは아니다によって作られた否定が直説法の形の体系に入るのだとしたら, 못あるいは못하다によって作られた否定は可能法の形の体系に入り, 補助動詞말다によって作られた否定は命令法の形の体系に入る。(命令法の形の作り方については§53 参照。)

그 나무에 말을 매지 마시오。

[注] 1. 動詞알다は直説法で否定形を持たない。아니알다あるいは알지아니다の代わりに<知らない>という意味を持つ特殊な動詞모르다を用いる。この際<知らない>という意味の모르다をその同音異義語('vozmozžno'<... かも知れない>というモーダルな単語)と混同してはならない(기사가 되었을는지 모르리라 하였다。)⁽¹²⁵⁾。

2. 形容詞においては, 못あるいは못하다によって作られた否定は動詞の場合とは異なる意味を持つ。それは対象が望ましい, あるいは必要な特徴を持っていないことを語っている。이 책이 좋지 않습니다。Éta kniga ne interesnaja (vopreki tomu, chto xotelos' by). <この本は(面白いことが望まれたにもかかわらず)面白くない。>

「人称」

人称の範疇は, ロシア語で人称の概念に入る意味においては, 朝鮮語には存在しない。しかし朝鮮語では人称の範疇に近い範疇を表す文法形式は存在する。

第1に, 朝鮮語では動作が, 1人称によってではなく, 話し手自身によってではなく行われることを表現し得る。このためには動詞の第2語幹に接尾される接尾辞 -시- が用いられる。しかしこれは, 「非1人称」(2人称あるいは3人称)が話し手自身よりも高いか, あるいはその人と, あるいはその人についてことさら丁寧に話す時にのみ用いられる。接尾辞 -시- のこの用法は朝鮮語の「非1人称」をロシア語の2人称及び3人称からはっきりと区別している。ここで問題となるのは <ty> (英 thou)「おまえ」と <on> (英 he)「彼」よりもむしろ丁寧な <ty> (英 thou) (<Vy>) (英 you)「あなた」と <on> (英 he)「あの方」の方である。

「자리에 가 앉으시오」하고 말씀하시었습니다。

「여러분이 입고 있는 옷은 무엇으로 만들었는지 입니까?」 하고 선생님이 물으시었습니다.

一連の場合に礼儀正しいニュアンスは、接尾辞 -시- の接尾によってではなく、丁寧さの点で中立的な動詞をその丁寧な同義語に取り替えることによって付加される。ロシア語の ‘kushat’⁽¹²⁹⁾ <食べる> のタイプのそのような特別な礼儀正しい動詞が少しある。잡수시다<召し上がる> (‘kushat’⁽¹²⁹⁾ <食べる>, ‘pit’ <飲む>, ‘kurit’ <喫煙する>の尊敬語), 주무시다<お休みになる> (‘spat’ <寝る> (ロシア語 «pochivat’»⁽¹³⁰⁾ 参照) の尊敬語), 돌아가다 ‘skonchat’sja’⁽¹³⁰⁾ <お亡くなりになる>等々⁽¹³¹⁾.

第2に、朝鮮語ではある人称の動作は他の人称の動作の利益において行われることを示し得る。この意味を表すためには動詞주다 (及びその礼儀正しい変種드리다) (これらは独自の用法では「与える」、「やる」、「くれる」という意味を持つ) が用いられる。これらは、目的意識的動作 *celenapravlennoe dejstvie*, すなわち誰かの利益においてなされる動作を表すために用いられる補助動詞としては、基本動詞の先行の接続形 (語尾 -아 / -어) に接尾する。

토끼 잡는 법을 설명해 주시었습니다.

命令法では주다の代わりに親しい話しで同じ意味を持って다고, 다오, 달라が用いられるが、これらは上と同じ補助動詞の変種で、辞書の見出し形を持たない。

조금만 더 기다려 다고.

このようなのが、朝鮮語に反映されているような人称の範疇と結びついた2つの基本的な形である。しかし「人称」の範疇はいくつか他の範疇にも反映を見る。例えば、接尾辞 -겠- は1人称に関する時は普通は未来テンスを意味し、2人称と3人称に関する時は普通は推定を意味することを指摘しなければならない。断言法 (§51) は完全に1人称と結びついている。これらの減少はすべて特別な研究を待っている。

終止形

動詞が文の最後の述語であることを示す語尾の総体は終止形 (終結述語性の範疇 *kategorija konechnoj skazuemosti*) と呼ばれる。終止形はそれ自身の中に対応するイントネーションを持っている。これらの終止形のない、固有のイントネーションを持たない動詞は独立した文 (あるいは主文) の述語ではあり得ない。この例外は個別的である。

終止形は叙述形と疑問形 *povestvovatel'nye i voprositel'nye* に分けられる。それらは時に語尾が同一である場合にはイントネーションだけで互いに区別され、時に同時にイントネーションと語尾で区別される。上に挙げたもののほかに感

嘆文に固有の特別な形がさらに可能である。

§46. 人間関係(あるいは方向付け)の範疇 対話において終結述語性の範疇(終止形)を表す語尾は多義的である。それは同時に人間関係(あるいは方向付け)の範疇 *kategorija lichnogo otnoshenija, ili orientacii* を表す。物事の事実的状况が述べられ(叙述 *povestvovanie*)、あるいは説明される(疑問 *vopros*) の話しもどの文も少なくとも2つの側面を持っている。第1に、話しは誰かによって述べられている(どちらでもよいが、口頭の形あるいは書写の形で)。第2に、話しは誰かに方向付けられ、誰かに向けられている。話しは時には話し相手に、対話における直接の参加者に向けられ、時には聴衆の多い大きな講堂が念頭に置かれ、時には潜在的に可能な聴衆、読者に向けられている(例えば、書物や新聞等による呼びかけ)。かくして方向付けられた話しは常に何らかの程度において話し手たち、話し相手たちの間の相互関係を考慮しなければならないのである。この際に考慮されるものは話し手、特に話し相手の性、年齢、家庭的及び社会的地位のようなさまざまな要因である。このモメントが文法、単語の形態論に反映を見いだすならば、特別な文法範疇が生ずる。われわれはそれを人間関係の範疇あるいは方向付けの範疇と呼ぶ。朝鮮語にはこの範疇は存在し、それは終止形と同じ形で表される。方向付けの範疇は人称の範疇と混同してはならない。このことは次の比較から明らかとなる。2つのロシア語の人称形 *«chitaju»* <わたくしが読む>、*«chitaesh'»* <おまえが読む>のうち前者は自分についてのみ、後者は話し相手についてのみ述べる事が出来るのに対し、2つの朝鮮語の方向付けの形 *읽다* と *잔다* のうち前者も後者も自分の動作についても話し相手の動作についても述べる事が出来、ここでの違いはかくして人称にではなく、これらの人間の相互関係にあるであろう。人間関係の範疇あるいは方向付けの範疇は5つの下位範疇、5つの形を持つ。1) 鄭重形 *forma pochitel'nosti*. 未知の者、年長者に対して用いる(例：子どもから親に)。その際自分自身の動作をも未知の者、年長者の動作等が考慮される。2) 丁寧形 *forma vezhlivosti*. 年齢と地位等に関して傍系、対等の者との会話で用いる。3) 無遠慮形 *forma famil'jarnosti*. 友人、身近な者の間の会話において、対等な者が対等な者に対して用いる(例：少女が少女に、若者が若者に)。4) 親密形 *forma intimnosti*. 家庭環境において、年長者が年少者に、すなわち親が子どもに、兄が弟に、主人が召使に等々用いる。5) 非礼形 *forma neuchtivosti* 子どもの間の会話で用いる。大人の会話では非礼な、侮辱的な性格を帯びる。これらの形は自分自身の動作についても、2人称や3人称の動作についても用いられる。以下にこれらの方向付けの各々の範疇はすべてそれぞれローマ数字 I, II, III, IV, V によって表される。

すでに述べたように、終止形（終結述語性の範疇）と方向付けの範疇は同じ形態素によって表される。例えば、述語갑니다 **‘idu’**＜わたしは（歩いて）行く＞, **‘edu’**＜わたしは（乗り物で）行く＞, **‘idet’**＜彼は（歩いて）行く＞, **‘edet’**＜彼は（乗り物で）行く＞, **‘idete’**＜あなたは（歩いて）行く＞, **‘edete’**＜あなたは（乗り物で）行く＞において -이니다는同時に文の叙式的性格をも人間関係の第Ⅰ級（鄭重。上述参照）をも表す。

書写標準語においては対話の条件以外に人間関係の範疇は存在しない。このことは理解できる。書籍は聴衆に向けられたものであり、聴衆に対しては著者はもっともさまざまな人間関係にあるのである。それゆえこれらの関係はすべてここでは除去されており、ゼロに帰せられる。これは話しの口頭形を再生する書き言葉のジャンル（例えば、対話、演説等）に属さないのは勿論である。

§47. 法の範疇 各々の終結した文において、つまり文の述語においては、人間関係の範疇のほかに、述べられた事件、事実の現実性のなんらかの段階に対する話し手の評価がさらに表される。すなわち話し手はそのような事実の存在（あるいは不存在）を時には確認するか、疑問の形で説明し、時にはそのような事実の存在（あるいは不存在）の可能性を推定するのみであり、時には第3者を引用してその存在（あるいは不存在）について考えを述べる（伝聞的発言）等々。発話主体の、彼によって述べられた事実の現実性との関係を表し、この現実性の何らかの段階を反映する形は、その総体が法という文法範疇を作る。朝鮮語では法の形と終止形とが同じ形態素の中に共存している。例えば、述語갔읍니다 **‘uexal (ja éto sam videl)’**＜行った（わたくしは自分でそれを見た）＞では形態素 -읍니다は同時に文の叙述=確言的性格をも発話の目撃的性格をも表している。すなわち話し手は個人的経験によって怒ったことの信憑性を証言しているのである。

かくして主文あるいは独立の文の動詞述語の同一の語尾は同時に3つの意味を持つのである。すなわちそれは発話の終結性を表し、それは事件、事実、動作の客観性の段階を表し、それは話し手たちの間の関係を表す。例えば、갑니다 **‘edet’**＜行きます＞の持つ形態素 -이니다는叙述的確言（疑問では갑니다外であろう）、中立=直説法（そうでなければ간답니다 **‘govorjat, chto edet’**＜行くそうです＞あるいは가리다 **‘pozhaluj, poedet’**＜行くだろう＞等であろう）、話し相手に対する鄭重な関係（そうでなければ가오〔無遠慮〕あるいは간다〔非礼〕であろう）を意味するのである。

§48. 中立=直説法の範疇 以下の語尾は、事実の存在（あるいは不存在）を単に確認するだけで、この確認の絶対的な性格も問題性的な性格も強調しない

場合に用いられる. ここでは, かくして, 確認は「静かな」, 「中立的な」, 非強調的な性格を持っている.

方向付け 述語形	I	II	III	IV	V
叙述形	ㅂ니다(습니다) 아요/어요	오(소)	네	다	아/어
疑問形	ㅂ니까(습니까) 아요/어요	오(소)	는가, 나	니, 느냐	아/어

このほかに書写語には次の語尾を見る. 나이다 (叙述 I), 나니라 / 느니라 (叙述 IV), 나िका (疑問 I). これらの語尾は第 1 語遺憾に接尾する. 語尾の前にテンス, ヴォイス等の接尾辞があるならば, 語尾はこれらの接尾辞の第 1 語幹に接尾する. 例: 남+습니다, 남+았+습니다 (同化の結果として *-at-* から *-as-*), 남+겠+습니다 (同化の結果として *-ket-* から *-kes-*). 括弧に入れられた語尾は子音で終わる第 1 語幹に接尾し, 括弧の前の語尾は母音で終わる語幹の後ろでのみ可能である. それらが時に子音で終わる語幹の後ろでも用いられるならば (この場合第 2 語幹に接尾する), それは標準語の規範にもとるものと評価される (받+소의代わりに 받+으+오, 먹+습니다の代わりに 먹+으+ㅂ니다). 末尾の *l* を持つ動詞 (例: 알다) は *-다* と *-아* / *-어* 以外のすべての語尾を *l* のない第 1 語幹に接尾させる⁽²⁷⁾. 従って 알다, ただし 아오, 압니다等.

語尾 *-다* の前には普通は現在を含むテンス接尾辞 (*-는-* あるいは *-ㄴ-*, §35 参照) が要求されるが, 他の語尾の前には現在テンスの語尾はない (これはテンスのマイナスのしるしである).

上に述べた語尾のうち 1 つ (*-a/ -o*) は例外の形で集計として用いられた連体形である. この例外の理由は朝鮮語史研究の方法によってのみ解明され得る. 語尾 *-는가* は「連体形 *-는* + 疑問助詞가」にさかのぼる. 現在ではこの合成形は分解できないものと見なし得る.

옷은 무명으로 만듭니다. (動詞만들다から).

그 무명은 무엇으로 만듭니까?

나는 얼음판으로 나갔습니다.

(나가다の過去形: *naga+s+symnida*, *-s-* は *-t-* の同化の結果).

언제 오겠소?

(오다の過去形: *o+s+sɔ+so*, 丁寧の接尾辞第 2 語幹 *-sɔ* *siɔ* → *syɔ* → *sɔ*, *-s* 過去テンス *-t-* の同化の結果)

무엇으로 타고 가요?

기차를 타고 가오.

어디로 가는가?

집뒤에는 아무것도 없나?

(없다: *ɔp+na*, 同化により *ɔm+na*).

높은 산이 있네.

너희들이 이런 꽃 뜯었니?

(뜯다의過去テンス: *ttyd+ɔn+ni*, *ɔn* は *ɔs* から).

서울에는 언제 왔습니까? 벌써 칠년이나 되었어요. (되다의過去テンス: *tve-y-ɔss-ɔyo*).

금년 하간에는 지이산을 갈가하나이다.

지금 쏘련에서는 계급 없는 공산주의적 사회를 건설하느니라.

上述の語尾すべては動詞=繫辞を除いてすべての動詞に接尾する. 動詞=繫辞の語尾は本来の動詞とは根本的な違いがある.

	I	II	III	IV	V
叙述形	올시다 ㅂ니다 (습니다)	오 (소)	르세, 네	다	여 (어)
疑問形	오니까 ㅂ니까(습니까)	오 (소)	ㄴ가 (나)	냐 (느냐), 니	여 (어)

括弧に入れられた語尾は過去テンスと未来テンスの接尾辞の後ろにのみ接尾する. その際繫辞の後ろの未来テンス接尾辞の現すものは未来と言うよりはむしろ蓋然性 (法の範疇) である. 語尾올시다, 오니까, 르세はそれ自身の前にテンス接尾辞を許さない. すべての語尾は第1語幹に接尾する. その際繫辞이-다の語根, すなわち이- 母音で終わる語幹の後ろで普通は落ちる (例外は過去テンスで, その場合 *i-* はテンス接尾辞と融合して이었- は였- となる).

처음 보입니다. 저는 리인섭이올시다.

열아홉입니다.

선생님 고향이 어디십니까?

나는 얼음판으로 나갔습니다. 넓은 얼음판입니다. .

자네 구두는 어느 것인가? 이것이 내것일세.

어떤 것이 네 우산이나?

부라질의 서울은 리오데자네이로다.

이것이 무엇이요?

몇 살이요?

이것이 우리 집이네.

사람은 만물의 으뜸이다.

이것이 너희 집이니?

고향이 어디서요?

[注]「繫辭の語根 -이- + 語尾 -오」は普通 1 つの融合形 *yo* となるが, これは母音で終わる名詞の後ろに用いられる. 子音で終わる名押しの後ろでは *-i* が保たれるが, 中間的な *y* へと変わる: *이요: 그것이 조희요*, *ただし 이것이 우산이요*. ただし形態論的正書法ではまた 이것이 *우산이오* も.

母音で終わる語根の後ろでの語根 *-i* の脱落はいつも正書法に反映されているわけではない. ここから *성명은 난주입니다* (*난줍니다*の代わりに)あるいは *그것은 큰 문제의 하나이다* (*하나다*の代わりに)も.

§49. 目撃法 Ochnoe naklonenie この法は, 話し手が彼によって伝達される事実を彼自身が直接経験した(自身がそれを見るか聞いたかした)ことを特別に強調する場合に, 用いられる. 目撃法の疑問形は, 話し手が話し相手から, 彼の発話が目撃的あるいは伝聞的性格を帯びているかどうかを知ろうとする場合に用いられる.

方向付け 述語形	I-II	III	IV-V
叙述形	되다/되데다 (습되다/습데다)	데	더라/드라
疑問形	되까/되데까 (습되까/습데까)	던가/든가	더냐/드냐

上述の語尾はすべて第 1 語幹に接尾する. 語尾の前にテンス, ヴォイス等の接尾辞があるならば, 語尾は接尾辞の第 1 語幹に接尾する. 括弧に示された語尾は子音で終わる語幹に接尾し, 括弧の前の語尾は母音で終わる語幹に設備する. / で示された語尾は音声的=正書法上の変種である.

김동무가 학교로 갔습니까?

네, 그이가 학교로 갔습니다.

누가 구락부에 있더냐?

그들은 참말 부요하게 살더라.

아무도 없습데다.

그는 잘 가르쳐 주시드냐?

인간이란 그렇게 쉽게 죽는 것이 아닙데다.

거기가 어디입데까?

저기가 교장이더냐?

目撃法自体の性格からこの類の文の主語は3人称だけであり得ることになる。いくつかの朝鮮語文法書でこれらの形を目撃法ではなく 3 人称の形と不正確に名づける所以である。

§50. 伝聞法 *Zaachnoe naklonenie* この法は, 話し手が与えられた文の中で述べられていることについて彼自身が直接には見ていない(聞いていない, 経験していない) ことを特別に強調する場合に用いられる. 疑問形はこの場合, 話し手が話し相手から, 彼の報せが目撃的あるいは伝聞的性格を帯びているかどうかを知ろうとすることを表す. 伝聞法は2つの異なる方法によって作られる.

第1の方法—これは目撃法の語尾を中立=直説法の語尾 -다 (任意のテンス) に接尾させるものである.

方向付け 述語形	I-II	III	IV-V
叙述形	답디다	다데	다더라
疑問形	답디까	다던가	다더냐

未来に属する事件が問題となる時は, 目撃法語尾の前の中立=直説法語尾の代わりに蓋然性の法の形 -리라が来得る.

- 리잡디다 (I) -겠답디다の代わりに
- 리잡디까 (I) -겠답디까の代わりに
- 리라더라 (V) -겠다더라の代わりに
- 리라더냐 (V) -겠다더냐の代わりに

박동무가 무슨 강설을 하리라더냐?

정치 강설을 하리라더라.

第2の方法—これは中立=直説法の語尾を中立=直説法の語尾 -다に接尾させるものである.

方向付け 述語形	I	II	III-IV
叙述形	답니다	다오	단다
疑問形	답니까	다오	단가

종달새는 해가 저도 노래를 할까? 아니야, 해가 서쪽 산으로 넘어가면 제 집으로 돌아간단다.

입을 아니하는 사람은 하나도 없답니다.

これらの形は繫辞の後ろにも接尾し得る. この場合繫辞は -다の代わりに語尾 -라となる.

아름다운 나라랍니다

最後に, 目撃法を作る第3の方法が可能である. これはテンス接尾辞に伝聞性の特別な語尾 -대 (IV) あるいは -대요 (I) 接尾させることである.

산에서 부는 바람

서늘한 바람

그 바람은 좋은 바람

고마운 바람

여름에 나뭇꾼이

나무를 할 때

이마에 흐르는 땀을

씻어준대요

§51. 断言法 Kategoricheskoe naklonenie この法は, 話し手が文の中で述べられていること, 話し手がすると約束することをなすだろうと断言的に確言する場合に用いられる. 疑問形は, 話し手が自分が何をすべきかを知らず, それゆえ2人称の側から断言的な指示を願い出る場合に (「何をするようにわたくしに命令なさいますか?」, 「どうすべきかをわたくしに命令なさいますか?」) 用いられる. このことからテンスに関しては未来テンスであり, 人称に関しては1人称だということになる. 朝鮮人言語学者は, この意味から出発して, これらの形を「1人称形」とか「未来における約束形」と名づけたりする. ここではこのように法, テンス, そして, ある意味では, 人称が絡んでいるのである. この本質からしてこれは動詞述語でのみ用いられ得る.

方向付け 述語形	I	II	III	IV-V
叙述形	오리다	리다	로세	마
疑問形	오리카	리카	르가	라

上述の形はすべて第2語幹に接尾する. テンス接尾辞はこれらの語尾では用いられない.

나는 가오리카?

나는 기다리리카?

나는 어떻게 할가?

나는 무엇을 하라?
 점심을 먹을가?
 예, 정녕 오리다.
 예, 만나 보리다.
 응, 언제까지든지 기다림세.
 그러면 내가 네게로 가마.

§52. 蓋然性の法 *Naklonenie verojatnosti* 以下に列挙された語尾は, 話し手が述べられた事件, 事実の信憑性に核心がなく, その可能性を推定し, 仮定する場合に用いられる. 疑問形は, 話し手が話し相手に, なんらかの事件がどれほど確かかを尋ねる場合に用いられる. 疑問形には質問者によって表明される好奇心という補足的ニュアンスが含まれる.

方向付け 述語形	I	II	III	IV
叙述形	오리다	리다	리	리라, ㄹ나
疑問形	오리카	리카	ㄹ가	랴

これらの語尾は第 2 語幹に接尾される. 語尾の前には過去テンスの接尾辞が可能である. 未来テンス接尾辞が用いられないのは, 第 1 に語尾自体が未来に起こるべき事件に著しく方向付けられており, 第 2 に, 知られるように, 未来テンス接尾辞 -ㄹ-は法の接尾辞であり, なんらかの特徴の蓋然性を示すからである.

これらの語尾は, これで分るように, うえに列挙された断言法の語尾と部分的に一致する. 区別的手段となるのは文の構造である. すなわちこれらの語尾を持つ動詞述語の主語が 1 人称ならば, 動詞述語は断言法の意味を持つし, 主語が 1 人称でなければ, 動詞述語は蓋然性の法の意味を持つのである.

편지 답장이 래일은 오리카?

아마 래일도 못 오리다.

既に述べたように, 蓋然性は接尾辞によっても表される. ことに, 上に説明したように, 未来テンスの同音異義形であるㄹ가をもっともよく用いられる接尾辞である. 時にはこの接尾辞のそのような意味は -지- の入った語尾によって強調される.

結果として蓋然性の法の二重の表し方が得られるのである.

方向付け	I	II	III	IV
------	---	----	-----	----

述語形				
叙述形	졌습지요	졌지요	졌지	졌지
疑問形	졌습지요	졌지요	졌지	졌지

これらの語尾は過去テンス接尾辞の後ろにも用いられ得る。この場合形態素結合の全体は過去の推定 **proshedshee predpolozhitel'noe** を意味する : 먹었겠지.

§53. 命令=勧誘法 Povelitel'no-priglasitel'noe naklonenie

方向付け 述語形	I	II	III	IV	V
命令形	십시오 하십시오	오(소)	게	라	아. 어
勧誘形	십시오다	하십시오다	세	자	아, 어

語尾 -십시오, -하십시오, -십시오다, -하십시오다는第2語幹に接尾し, 語尾 -게, -세, -자는第1語幹に接尾し, -소는子音で終わる第1語幹に, -오는母音で終わる第1語幹に接尾する. 語尾 -라는直接語法の命令では3語幹に, 間接語法の命令では第2語幹に接尾する(「...しろと言え」のタイプ). 現代語では語尾 -라を直接語法でも第2語幹に接尾し得る. これは, 普通は, 個々の人間ではなく集団, グループが受け手 **adresat** である場合に行われる.

전세계 프로레타리아트는 단결하라!

많이 잡수시지요!

자리에 가 앉으시오!

자리에 가 앉으시오!

뵈어라 ; 이것 보아 (あるいは봐) ; 잡시다 ; 모이자 (あるいは뵈자) .

表に列挙した語尾のほかにさらに語尾 -소서 (文献では -쇼서) (話し手がへりくだったニュアンスを持つ頼み, 祈りを意味する) を挙げなければならない : 오소서.

一連の動詞では命令法のいわゆる親密形 (IV) を作るのにいくつかの特殊性がある.

動詞가다, 나다, 자다, 앉다, 눕다, 있다, そして合成動詞 (その第2要素は上述の動詞の1つである) では語尾 -라의代わりに -거라 が接尾される. 가거라, 자거라, 앉거라 (ただし앉아라の方がより正しい), 눕거라 (ただし누어라⁽¹¹⁴⁾も正しい), 일어나거라, 있거라. ただし間接命令では -라だけ

が接尾する(第2語幹に): 가라 (고), 자라 (고) 等.

この語尾は限界動詞(앉다, 서다, 눕다)の過去テンスの後ろに接尾する. この場合の過去テンスは,すでに上に述べたように,動詞の語根によって表される動作から出てくる状態を示す: 앉았거라, 섰거라, 누웠거라⁽¹⁴⁾.

動詞오다と第2要素に오다を持つ合成動詞では,語尾 -라の代わりに -너라が接尾される: 오너라.ただし間接命令では오라고.

最後に無遠慮形命令다오, 달라, 다고를挙げる必要がある(現実には存在しない再構された辞書形달다). 다오, 달라, 다고는独立しても(이리 다오),基本動詞の先行の接続形の後ろの補助動詞としても用いられる.後者の場合, 다오, 달라, 다고는接続形で表される動作が誰かの利益において行われることを示している: 도와 다오.

命令法の否定形(禁止)については,それは分析的に,すなわち基本動詞の不十分な体言形と補助動詞말다の命令形の結合によって作られる: 바람이 너무 불지 마라; 비야, 너무 피붓지 마라; 비야, 비야, 오지 마라.

§54. 感嘆文の述語形 感嘆文の動詞述語は特別な形を持つ.

a) -고나あるいは -구나. テンス接尾辞によいって作られる語根の後ろに接尾される.

現在テンス	-는구나
過去テンス	-았구나
未来テンス	-겠구나

저산의 진달래꽃이 활짝 피었구나!

저것 종달새 소리 아닐가? 참 종달새가 노래를 부르는구나!

b) -구려. -고나 / -구나と同じ規則で動詞に接尾する.

c) -고말고. 動詞の第1語幹に接尾する. 質問者の疑念に対する確信ある反論という補足的ニュアンスを持つ.

종달새는 집이 있을까? 있고말고!

안 됩니까? 되고 말고!

d) -로구나. 繫辞の後ろにのみ用いられる.

애 참 좋은 일요일이로구나!

感嘆文によって作られる他の形態素は語尾ではない. 例: 자연히 눈물이 남나다 그러.

連体形

連体形(形動詞)と呼ばれるものは名詞への動詞の規定的従属性を表す動詞の位置的範疇である. 名詞への動詞の規定的従属性を表すことが連体形の第1次的な

機能である。連体形が補助動詞及び助詞と結合する能力は第 1 次的機能から出て来る第 2 次的機能である。

連体詞は語尾によって表される位置的範疇である。このことから接尾辞によって表される非位置的範疇（ヴォイス，法等）はすべて連体形に先行することになる。特別な位置を占めるのはテンス接尾辞であるが，これまた非位置的範疇である。テンス接尾辞の占める特別な位置は連体形を作る特殊な意味によって説明される。

連体形は 2 つの意味を持っている。

第 1 に，連体形は動詞の名詞との関係の規定的性格を示し，第 2 に，連体形は連体形によって表される動作が行われる時間を示している。連体形のテンスがどんな性格を持っているかについての問題は朝鮮語学では今まで定期さえされなかった。連体形のテンスは絶対的であると想定されている。このことは連体形のテンスの規定に際して基準点となるのは話しの瞬間（話しの瞬間に起きることは現在テンスであり，話しの瞬間以前に起きたことは過去テンスであり，話しの瞬間以後に起こるであろうことは未来テンスである）であることを意味する。しかしテンスのそのような規定は多分間違いである。連体形のテンスは普通は相対的である。このことは，連体形で表される動作の後ろに続く他の動作が行われる時間が基準点として取られていることを意味する。この他の動作の時間との相互関係において連体形のテンスが規定されているのである。もしもそうなら，連体形は連体形は現在も過去も未来も持ち得ず（なぜならば現在，過去，未来は絶対的テンスの概念だからである），いわゆる並行的，先行的，将来的テンスのみを持ち得るのである。この問題は最終的に解決していないから，われわれは現在テンス，過去テンス，未来テンスという述語を用いつつ，これらの術語により何よりも今後継続して絶対的の意味ではなく相対的意味と理解することにする。

現在テンス連体形は語尾 -는（動詞の第 1 語幹に接尾する）によって表される。この連体形は普通は連体形によって表される動作の，終結的な動詞述語（終止形）との同時性を示す。

애걸하는 눈으로 둘러선 사람을 보았다。

공장 가까이 기계 돌아가는 소리와 쇠를 두드리는 소리가 요란스럽게 들려왔습니다。

これらの例で終止形によって表された動作は絶対的過去テンスを持っており，連体形によって表された動作は現在テンス形を持っている。この現在テンスは明らかに相対的である。すなわちそれは連体形によって表された動作が終止形の過去テンスによって表された動作と同時であることを示す。

過去テンスの連体形は語尾 -ㄴ （動詞の第 2 語幹に接尾する）によって表さ

れる。この連体形は普通はこれによって表された動作が終止形に表された動作に先行することを示す。

어제는 오일절이었습니다. 학교에서 기념식을 지내고 집에 돌아온 우리들은 점심을 먹고 나서 할아버지와 함께 거리로 나갔습니다.

この文では代名詞「われわれ」を規定する連体形によって表された動作「帰る」が終止形によって表された動作「出る」に先行している。それゆえそれは相対的過去テンス（もっと正確には先行テンス）連体形の語尾 -ㄴ- によって作られるのである。

애걸하는 눈으로 둘러선 사람을 보았다.

この文では動作「哀願する」と「見る」が同時に行われる（「彼女は見た。そしてその時彼女の目は周囲の人に哀願した」）。それゆえ動詞「哀願する」の連体形は相対的現在テンス形を持つ。動作「囲む」は動作「見る」よりも早く起こった。動作の結果として起きた状態「囲む」は動作「見る」と同時的である。それゆえ動詞「囲む」の連体形は相対的過去テンス形を持つのである。

나는 평양으로 내려갈 결심을 하였다.

この連体形は多分未来における同時性をも表す。

구운몽의 문제는 조선문학사를 쓸 이들은 연구 처리할 바이다. (この文では相対的意味は第1の連体形が持っている)。

テンス的意味のほかに語尾 -ㄴ- は 2 つのニュアンスを持っている。それは当為性のモーダルなニュアンスと蓋然性のニュアンスを持っている。この場合連体形はテンス的意味を持たず、それを未来テンスと呼ぶのは臨時的である。このような意味を持つ語尾 -ㄴ- を未来テンス連体形の同音異義語と見ることが可能である。語尾 -ㄴ- が蓋然性を示す時、その前にはテンス接尾辞が可能である（すなわち現在ではゼロ、過去は -았- / -었-, 未来は -겠-）。-ㄴ- のこの意味は普通は補助名詞と助詞の前に現われる。

이곳은 언제 어떻게 생겼는지 아무도 아는 사람이 없을 것이다.

구운몽의 문제는 조선문학사를 쓸 이들이 연구 처리할 바이다.

この連体形のもっと詳しい記述は法を扱ったパラグラフで述べられている (§§44-45 参照)。

連体形が名詞に対する規定語として現われる時、連体形は終止形の動作のテンスとの関係によって語尾 -는- や語尾 -니- や語尾 -고- やらによって作られる。しかし一連の補助名詞と助詞の前では伝統（この起源については朝鮮語史だけが解き明かし得る）によってなんらかの 1 つの連体形だけが可能である。例えば、助詞 ㅏ の前では未来テンス連体形のみが可能であり、補助名詞 -ㄷ- の前では現在テンス連体形がもっともしばしば用いられ、後置詞 ㅗ <後> の前では過去テンス連体形だけが用いられる等々。どのそのような場合でも 3 つのテ

ンスの対立は不可能である. 말할 사람, 말하는 사람, 말한 사람 と言うことは可能であるが, 理論的に構成され得る 3 つの単語結合 말할수록, 말하는수록, 말한수록のうち第 1 のもののみが可能である. このことから次の重要な結論が導き出される. すなわち一定の条件において (例: -데の前) 3 つのうち 2 つの連体形が除去され, それらを 1 つに帰せしめること (例: 現在テンス連体形にだけ) は, 与えられた条件において一体となった連体形からテンス的意味が除去されることと等しいのである. 連体形はテンス外的意味を獲得するのである. 直角は非直角がある故にのみ直角と名づけられるし, その逆もしかりである. もしもすべての角が直角だけならば, それらを直角と名づける必然性はなくなるであろう (対立が存在しないために). それらは単に角とだけ名づけられるであろう.

一定の条件でテンス的意味が除去された連体形は規定的意味のみを保っている. そのような連体形を「過去テンス連体形」, 「未来テンス連体形」等のような術語で呼ぶのは臨時的である. これらの連体形のテンスは形式的である. 上述の条件での連体形のテンスが形式的ならば, それと同じ分だけ, これらの伝統によって形式化された連体形の前でテンス接尾辞を用いる可能性が開けるのである. これらのテンス接尾辞とはこれらの条件における動詞の現実のテンス的展望を再構するかのようなものである. さほどに明瞭なテンス的特徴を持っている朝鮮語の連体形が非常にしばしばテンス接尾辞によって複雑になるというわれわれの一見奇妙な事実の説明はこのようなものである.

以下にテンス接尾辞とテンス外的連体形語尾とのすべての可能な結合を挙げる.

a) 過去テンス接尾辞+連体形語尾:

았는 例: 보았는

았은 例: 보았은

았을 例: 보았을

b) 相対的過去テンス接尾辞+連体形語尾:

았었는 例: 보았었는

았었은 例: 보았었은

았었을 例: 보았었을

c) 未来テンス接尾辞+連体形語尾:

겠는 例: 보겠는

겠은 例: 보겠은

겠을 例: 보겠을

現在テンスのゼロ接尾辞が付く場合は形式的な連体形は現実の連体形と一致する: 는=ゼロ-*nyn* (보는), ㄴ=ゼロ-*n* (본), ㄹ=ゼロ-*l* (볼).

これらの結合はすべて原則として、単語結合あるいは文の関係を表す補助名詞、助詞の前でのみ可能であるから、それらは「統辞論」のしかるべき章で論じられるであろう。ここでは見本として接尾辞とテンス外的連体形との上述の結合の第1系列に対する数例を挙げよう。

하였는의 타입 :

이곳은 언제 어떻게 생겼는지 아무도 아는 사람은 없을 것이다。

テンス外的連体形 -는の存在はここでは疑問の助詞지によって条件付けられている。지の前では他の連体形は不可能である。

그러나 그는 살았는가?

[注] 하였는의 타입の構造は完全名詞の前でも可能である。われわれの観察によれば、連体形の動詞が本来の意味からして限界動詞であるところでそれが起きる。

곁에 있는 형님을 돌아본며

하였는의 타입 :

누웠은들⁽¹¹⁴⁾ 잠이 오라?

「形式的な」(テンス的特徴を失った)連体形 -ㄴ의存在はここでは補助的な単語들によって条件付けられる。他の連体形はこの場合不可能である。これらの条件で用いられる던という形はそれ自身は -ㄴ- と -ㄴ-からなる。現代語では結合 -ㄴ+들を接続形をなす1つの統一体と見るべきあらゆる根拠がある。

하였을의 타입 :

비행기가 처음 발명되었을 때에는 사람이 새와 같이 날아다니는 것을 이상하게 생각하였을 뿐이었지만 지금은 매우 발달되어 자동차나 기차와 같이 많은 사람이 타고 려행하게 되었습니다。

「形式的な」(テンス的特徴を失った)連体形 -ㄴ의存在は最初の場合では半自立語때によって条件付けられる。때の前で他の連体形は標準語では規範ではない。形式的な連体形 -ㄴ의存在は第2の場合では助詞뿐によって条件付けられる。뿐の前では他の連体形は不可能である。

上の例ではテンス接尾辞はテンス外的連体形語尾のに直接先行している。しかし一連の場合にテンス接尾辞と連体形語尾の間に蓋然性(可能性)の法の接尾辞 -ㄹ- が「接中辞的に挿入される」。この接尾辞は未来テンスの同音意義的接尾辞と混同してはならない。時には法の接尾辞の代わりにテンス接尾辞と語尾の間に蓋然性(可能性)の法の語尾 -ㄹ- が「接中辞的に挿入される」ことがある。この語尾は連体形の同音意義的な語尾 -ㄴと混同してはならない。接中辞的な挿入の結果として次の構造が得られる。

a) 過去テンス接尾辞+法接尾辞+連体形語尾 :

왔ㄹ은 例 : 보았ㄹ은

왔겠는 例: 보았겠는

왔겠을 例: 보았겠을

b) テンス接尾辞+法語尾+連体形語尾:

ㄷ는 例: 붙는

왔을는 例: 보았을는

겠을는 例: 보겠을는

그 나무에 말을 매지 마세요. 우리 말은 대단히 사나워서 당신의 말을 죽일는지도 모르니 다른 나무에 매시오.

最後に、一連の場合にテンス接尾辞の後ろに法の語尾 -ㄷ가続き得る。この結合は外的には、この語尾 -ㄷと未来テンス連体形とが同形であるために、「テンス接尾辞+テンス外的意味を持った未来テンス連体形」という結合を思い起こさせる。実際には類似は純然と外的なものであり、両者の構造を混同することはない。

ㄷ 제로+ㄹ 例: 붙

왔을 -ass-y-ㄹ 例: 보았을

これらの結合は普通は主文に用いられる。このうち第 2 のものは付加文に表された非現実的な仮定からの絶対的に非現実的な結論を含む主文に用いられる。

저 이층에 있을 거요.

수길이는 여기에 있었더라면 그 일을 꼭 하였을 것이다.

そのような結合が、すでに述べたように、主として主文に用いられ、主文の述語がこれらの構造に存在する連体形によって作られ得ないのであるならば、補助名詞 -것 (話し言葉では多く거) (繫辞を持つ) に対する必要性が生じ、これはそのような連体形について文を終えるのである。上の例ではまさにそうになっているのである。

テンス外的連体形を基礎に朝鮮語ではそのような連体形 (-는のみ) が終止形 -다の後ろに接尾する可能性が生じた。-ㄴ-다-는一例: 본다는; 過去テンス -았-다-는一例: 보았다는; 未来テンス -겠-다-는一例: 보겠다는。

終止形を連体形語尾 -는によって複雑化することはこの形を主文の述語として用いることを不可能にしていることは勿論である。そして実際に、このように作られた動詞は補助名詞 것の前でのみ用いられ (時には데の前で、稀に完全名詞の前で)、これはしかるべき格の形で (また -데は後置詞によって) 主語文、補語文 (直接補語文と間接補語文) を作る。うえに列挙された形の 1 つを持つ動詞は普通は自分自身の主語を持つ。例:

중국과 체코스로바키야간의 금년도 무역총액이 작년도 보다도 껍 증가하였다는 사실 자체는 량국간의 경제적 협조가 앞으로 더욱 긴밀하게 될 것이라는 사실을 립증하는 것이다.

合形成態素 -던. 動詞の第1語幹と連体形語尾の間に過去テンス接尾辞 -더를挿入するならば, この接尾辞と語尾 -ㄴとの結合は合形成態素 -던を作る. この合形成態素の非常に多様な機能は矛盾していて文法書にさまざまに規定されているが, 過去テンスという1つの一般的な意味に統合される. 実際に, この形態素は, 過去に起きた事件, 動作(形容詞では特徴)が問題となるところでのみ用いられるのである. しかし合形成態素 -던が過去テンスだけを意味するならば, 次のように理解してはならないであろう. 1) 何故朝鮮語には類義的な形態素 -ㄴと -던があるのか, 2) 何故朝鮮語では -던の前に過去テンス接尾辞 -았 / -었 (-았던 / -었던) 及びダブりの形 (-았었던 / -었었던) でさえ接中辞的に挿入し得るのか. 明らかに, -던は単に過去テンスではなく, なんらかの補足的なニュアンス(単数あるいは複数)を持つ過去テンスである. それは実際にそうなのである. しかしこれらの補足的なニュアンスの規定は困難な課題であり, いろいろな著者がいろいろに説明している. それゆえ以下に述べることはすべて可能な観点の1つでしかなく, 問題の最終的な解決とは見なされ得ない.

-던は普通は動作の中断, 動作及び状態の中止, 形容詞の場合は以前の性質の消滅を示す. 動作, 状態の中断, 中止, 性質の消滅は根拠があり得る. 理由としては同じ文の述語に示されている新しく起こった正反対の動作, 状態, 性質が現われ得る: 먹던 밥<食べかけの飯>(食べていた, しかし一連の状況により食べるのをやめた飯); 읽던 책<読みかけの本>(読んでいた, しかし一連の状況により読むのをやめた本).

그런데 아침에 있던 점순이가 별안간 없어졌다.

하루는 아이들의 모자를 가득 넣은 구렁을 메고 장으로 가던 길에 나무그늘아래 쉬다가 잠이 들었습니다。(動作「休む」は動作「行く」の自然な流れを止めた).

ついでながら, 最後の例は -던という形の類似物として接続形に -다가があることを示している.

形容詞での同じ意味を参照せよ.

춥던 날이 풀었다.

나귀는 지난 번에 자빠지므로 그 무겁던 짐이 갑자기 가벼워졌던 것을 생각하고 이번에도 일부러 넘어졌습니다.

오랫동안 참고 있던 눈물이 그만 떨어지기 시작하였다.

動作, 状態の中断, 中止あるいは性質の消滅は根拠がないことがあり得る(「寒かった, しかし今は寒くない」, 理由の提示がない). このことは -던によって作られた動詞あるいは形容詞が述語に入り込むところでは特にしばしば見られる(하던 것이다のタイプの構造).

아까 먹던 밥을 가져오너라.

-던が動詞あるいは形容詞の語幹の後ろに続く時の意味はこのようなものである(하던のタイプ).

-던が過去テンス接尾辞 -았- / -었- の後ろに続く時にそれは特別なニュアンスを獲得する. この場合 -던は何らかの動作の結果として対象によって獲得された特徴の廃棄という意味を持つ ('spavshaja voda' <眠っていた水>, 'vyigrannye den'gi' <稼がれた金(かね)>). 廃棄は, 当の獲得された状態を引き起こした, その正反対の動作が現われる根拠となり得る. このニュアンスはしばしばロシア語の表現 'poshel bylo' <行きかけた>で伝達される. 根拠が存在しないことがあり得るのは勿論である.

하늘은 구름에 덮이었던 것이다.

먹었던 돈을 도로 잃어 버렸다.

줄었던 물이 다시 불었다.

この形は, それが未来テンス接尾辞(多分ここでは法の接尾辞) -겠- の後ろに続く時にも(하겠던のタイプ), 特別なニュアンスを持つ. この場合可能なものから現実的なものへの実現されなかった移行が話題となっている. 一連の状況は完全に可能な動作を阻止したのである. これらの状況は普通は文の中に示されている: 먹겠던 돈<もうけられたであろう金(かね)(例えば, かけ続けていたなら)>; 읽겠던 책<読めたであろう本(なくさなければ)>; 보겠던 영화<見られたであろう映画(状況が邪魔しなければ)>.

最後に接尾辞 -았겠- / -었겠- の後ろの -던(하았겠던のタイプ)は義務的なものから現実的なものへの実現されなかった移行を表すのに用いられる. 実現されるべきだったであろう動作が実現するのを阻止した状況は文の中に示され得る.

그때 벌써 익었겠던 열매가 아직도 덜 익었다니?

すでに上で述べたように, 一定の条件では朝鮮語の連体形は形式的意味を獲得する, すなわち自己のテンス的意味を失う. このことが起きる諸条件はかなり詳しくわれわれによって説明されている. 多分連体形のこのような形式化は補助名詞것の前で起こり得るであろう. 補助名詞것の前の動詞が過去テンスに属するならば, この過去テンスは多分二重に表せられ得るであろう. すなわち時に語尾 -니によって(これはこの場合 2 つの機能—テンス的及び規定的—を併せ持つ), 時に過去テンス接尾辞 -았- / -었- によって. 動詞の補助名詞に対する規定的関係は最後の場合連体形 -던によって表されているが, -던は当然(すでに接尾辞があるにもかかわらず) この場合自己のテンス的意味を失っている.

세계에서 자기네가 제일 강하다고 뽐내던 일본 군대도 빨찌산과 싸워서 한 번도 이기지 못 하였던 것입니다.

接続形

接続形(副動詞)と呼ばれるものは1つの動詞の他の動詞との関係を表す動詞のいわゆる位置的範疇である。この関係は多様であり得る。それは1つの文の限界内での1つの自立的な動詞の他の動詞との関係、2つの文の限界内での1つの自立的な動詞の他の動詞との関係(この場合接続形は1つの文の他の文との関係を表す)、1つの合成動詞の部分の他の合成動詞の部分との関係であり得る。接続形が1つの動詞の他の動詞との関係を表す能力は接続形の基本的な機能である。接続形が主文の述語として現われる能力(これは自己の可能性により制限されているが)は、少なくとも現代朝鮮語にとっては、接続形の第2次的な機能である。

動詞の間及び文の間の関係は多様であるから、こんじょことによって朝鮮語で接続形が著しく多様であることが説明される。この多様性の逆は1つの動詞の他の動詞との関係を確立する接続詞(ロシア語の«*napisal i poslab*» [英 *I wrote and sent*], «*esli znaesh, skazhi*» [if you know, tell!] 等)の欠如である。

接続形は語尾によって表される位置的範疇である。このことから非位置的範疇(ヴォイス, 法等)を表す接尾辞はすべて接続形語尾に先行することになる。しかしこれらの接尾辞のうち特別な位置を占めるのはテンス接尾辞である。接続形は、テンス接尾辞との結合可能性の観点からは、3つのグループに分けることが出来る。

a) 第1のグループにはどのテンス接尾辞とも結合しない接続形が入る。例えば瞬間性の接尾辞(語尾자, §59 参照)がそうである。そのような接尾辞のテンスが相対的であることは明らかである。例えば、目的の接尾辞は、それが表す動作が基本動詞の表す動作の後ろに続くことを常に意味し、先行の接尾辞は、それが表す動作が基本動詞の表す動作に先行することを意味する。

b) 第2のグループには過去テンスと現在テンス接尾辞とのみ結合する接続形が入る(現在テンスのしるしはこの場合マイナス語尾である)。例えば, ㄷで始まる語尾を持つ接続形(ㄷ진대, ㄷ망정等) がそうである。

c) 第3のグループにはすべてのテンス接尾辞と結合する接続形が入る。

これらのグループはすべて今まで取り出されず、テンス接尾辞との結合可能性の条件は規定されてこなかった。それゆえ今後われわれはこのことについて試験的な意見のみを述べるであろう。

§55. 結合的接続形 接続形のしるし— -고及び -며. 接尾のし方: -고—第1語幹に, -며—第2語幹に。

[注] «*l* ~ゼロ» グループの動詞では -며は普通は第2語幹短形に接尾す

る。しかし一連の文法書は規範として第2語幹短形完全形を示している。
両者の語尾ともテンス接尾辞と結合する; 하고及び하며, 하였고, 하였으며, 하겠고及び하겠으며. 先行の接続形のしるし -고 (テンス接尾辞と結合しない) を参照せよ.

接続形の基本的意味: a) この接続形は2つ以上の動作 (これらの総体から主語によって表された主体の多面的な活動についての全般的な状況が想起される) の等価性あるいは同等性を表す. この意味は一連の動作のための共通の主語を想定している.

많은 일을 하셨습니다. 농민에게 땅을 주시었고 노동자와 사무원을 보호하시는 법령을 정하셨습니다. On prodelal bol'shuju rabotu. On dal krest'janam zemlju, ustanovil zakony, oxranjajushchie (trud) rabochix i sluzhashchix.

우리는 일할 때에는 열심히 일하고 쉴 때에는 꼭 쉬어야 합니다.

추운 겨울에는 새끼를 꼬고 가마니를 치며 베를 짍니다.

b) この接続形は2つの文の等価的關係を表す. この意味はかくして最低限2つの主語の存在を想定している.

봄과 여름에는 농부의 노래가 들려오며 가을에는 여러가지 곡식이 누렇게 익소.

제비는 봄에는 왔다가 가을에 가고 기러기는 가을에 왔다가 봄에 가오.

1つの文 (融合文 *slitnoe predložhenie*) あるいは2つの文 (並立文 *sochinennyye predložhenija*) における2つの動作の同等的關係:

a) 接合的 *soedinitel'naja*. ロシア語ではこれは普通は接続詞では表されない (上に引かれた例: 'on dal ... ustanovil ...' 参照). 結合の接合的性格は助詞도 (도はロシア語の接合接続詞 «и» と等価だが, 否定動詞では «ни») によって強調され得る. これは融合文においては各々の動詞述語の前の各々の補語の後ろに接尾し, そして並立文では各々の主語の後ろに接尾する.

그 밖에 농민들은 소 돼지도 기르고 닭도 치고 누에도 농습니다.

우리 마을에는 기차도 전차도 없고 큰 집도 전등도 없소.

들에는 논도 있고 밭도 있어서 우리 마을 사람들이 농사를 짓소. V pole (za derevnej) est' i uchastki, vzdelyvaemye pod ris, i uchastki (bukval'no: est' i uchastki), vzdelyvaemye pod drugie kul'tury; éto govorit o tom, chto zhiteli nashej derevni zanimajutsja zemledeliem,

[注] 러시아語への訳に際して도は普通は, 同一の動詞が述語であるところでのみ伝達される. この場合朝鮮語の並立文は普通はロシア語で融合文に変えられる (上の例のうち最後のもの参照).

b) 反意的 *protivitel'naja*. これは普通は, 各々の動詞で主語あるいは補語が (

また状況語も) 互いに対立し, その際この対立が対比された名詞の後ろの助詞 -는によって表されるところに存在する.

우리 마을뒤에는 높은 산이 솟아 있고 앞에는 넓은 들이 있으며 맑은 시내가 흐르오.

この文では村の後ろにあるものには村の前にあるものが는対比されており, 場所の状況語は助詞 -는によって作られ, 2つの文の間の関係は反意的性格を持っている.

c) 分離的 *razdelitel'naja*. これは普通は, 2つの, テンスにおいて等価的だが相容れない動作が話し手によって 1つのテンス的平面に入れられているところに存在する.

우리들도 몸을 너무 쓰면 피곤하여집니다. 그럴 때에는 우리는 쉬기도 하고 잠을 자기도 합니다.

動詞はこの場合普通は助詞도を伴う. しかし助詞도は名詞(そして名詞と同等の品詞, 例えば, 数詞, 代名詞)の後ろにのみ可能である. 도を動詞に接尾するためには, 動詞が名詞の部分を含みつつも同時に動詞のままでいるように, 動詞を作り直す必要がある. これは動詞を体言形に変え, 体言形が補助動詞하다と結合して分析的な形, もっと正確には, 動詞の生産的=分析的な形を作ることによって達成される. 例えば, 動詞쉬다からはそのような生産的=分析的な形は同じ意味を持つ쉬기하다となる. この生産的=分析的な形はそれ自身の中に体言形を持つから, これの後ろに助詞도を(また一連の助詞をも)接尾させ得るのである: 쉬기도 하다. もしもそのような生産的=分析的な形を接続形語尾-고で結合するならば, 分離的意味を持つ単語結合が得られる: 쉬기도 하고 잠을 자기도 합니다 (完全な例は上を参照).

分離的意味は他の方法でも, まさに接合的接続形語尾 -고によって各々の動詞を作るという方法によって表され得る. 単語結合全体は補助動詞하다で終わる.

일본제국주의자들은 조선나라를 찾아 자유로운 나라를 세우려고 애쓰는 애국자를 잡아 가두고 죽이고 하였습니다.

語尾 -고及び -며は等価的な動作を自信の間に結びつけながらも, まったく互いに同一なのではなく, すべての場合に互いを取り替えることは出来ない.

同一の主体によって行われ, 等価的であるような2つの動作の間に同時性の関係があるならば, 上に挙げた語尾のうち -며 1つだけが可能である.

나는 공부하며 공장에서 일합니다.

他の場合ではこれらの語尾は相互交換可能である. しかし, 等価的な動作の間の関係の程度が異なるものであれば, もっと緊密な関係がある語尾で表され, もっと離れた意味が別の語尾で表されるのである.

우리 마을뒤에는 높은 산이 솟아 있고 앞에는 넓은 들이 있으며 맑은 시내가 흐르오.

ここでは同等な動作（そびえている，ある，流れる）の間の関係が公式 $a+b+c$ ではなく公式 $a+(b+c)$ によって作られている．すなわち第 2 の動作は互いにもっと緊密に結ばれている．なぜならば第 2 の動作は他の主語に属しており，第 1 の動作の主語には属していないからである．このことから語尾の分化も生ずるのである．これは文法的性質の分化である．

しかし語尾は文体論的考慮によっても分化され得る．すなわち異なる語尾を交代させて，文を作る際に形式的単調さを避けるのである．上の文のうち 1 つではそうになっている．

추운 겨울에는 새끼를 꼬고 가마니를 치며 베를 짍니다.

§56. 先行の接続形 この接続形のしるしー語尾 -고及び -아 /-어. 接尾のしかた: -고ー第 1 語幹へ，語尾 -아 /-어は第 3 語幹のしるしと一致する．それゆえ第 3 語幹は同時に先行の接続形としても機能すると言うのが実用的には便利である．どのテンス接尾辞とも先行の接続形は結合しない．したがって하고あるいは하여，ただし하였고ではなく하였어等．

A. 語尾 -고 a) この接尾辞はこれによって表された動作あるいは状態が他の動作あるいは状態に先行することを示す．その際他の動作あるいは状態は第 1 の動作あるいは状態が終わった後にのみ行われる．この意味は一連の継起する動作あるいは状態の 1 つの主語，1 人の担い手の存在を想定している．

면도를 하고 낫을 씻고 옷을 입고 신을 신고 나갔습니다.

문을 닫고 오너라.

b) この接続形は 1 つの文に表された事件が他の文に表された事件に先行することを示す．この意味はかくして最低限 2 つの文の存在を想定している．この場合も第 2 の事件は第 1 の事件が終わった後にのみ行われる．

해가 지고 달이 떴다.

바람이 자고 더운 해가 내려쬘므로 그사람은 더워져서 두루마기⁷를 벗었다.

この接尾辞の基本的な意味はこのようなものである．これは接続形の後ろで取り立ての助詞によって強調され得る: 하고는.

보고는 즉시 갔소.

語尾 -고を持つ先行の接続形は形式的には結合的接続形と一致する (§55)．この 2 つの同音異義形の分化の手段となり得るのは補足的な語尾 -서であるが，これは強調=とりたての助詞 -는を伴い得る．

먼저 「ㅎ」 음에 대하여 성음학적 구명을 가지지 않고서는 그 문제를 해

결키 곤난할 것이다.

c) この接尾辞は, これによって表された動作が他の動作に先行するが, 第 1 の動作の結果として起きた状態は他の動作と同時的であり, (かくして) それを伴うことを示す. この意味はいわゆる限界的意味を持つ動詞, 例えば타다<乗る>, 잡다<つかむ>等に主として現われる (§38).

말을 타고 간다.

손을 잡고 간다.

서로 다툼 때마침 한사람이 두루마기를 입고 길을 가고 있었다.

하루는 아이들의 모자를 가득 넣은 구역을 메고 장으로 가던 길에 나무 그늘아래서 쉬다가 잡아 들었습니다.

d) 先行の意味から明らかに動作を行う方法という意味が出て来る. より広い範囲の動詞で可能だが, いかなる動詞化は現在規定するのが困難である.

조선사람은 밥을 먹고 산다.

この意味は結合的接続形よりも先行の接尾辞の変種あるいは機能であるかも知れない. しかしこれを妨げるのは, 語尾 -고の前にテンス接尾辞(これが結合的接続形の特徴的なしるしである)を挿入してはならないという状況である. 語尾 -고の最後の 2 つの意味は 1 つの主語を持つ文でのみ可能である.

B. 語尾 아어 a) この接続形は, これによって表された動作あるいは状態が他の動作あるいは状態に先行することを示す. その際この他の動作あるいは状態は第 1 の動作あるいは状態が終わった後にのみ行われる. この意味は共通の主語の存在を想定する.

따뜻한 봄이 오면 논밭을 갈아 씨를 뿌렸습니다.

この意味は補足的語尾 -서によって強調され得る.

점심시간에는 ... 연예대가 날마다 공장에 들어와서 좋은 연예를 보여 주고 명랑한 음악을 들려 주었다.

いわゆる限界動詞ではこの接続形は動作の先行及びこの動作によって引き起こされた状態の同時性を示す.

남순이는 책상앞에 앉아서 열심히 공부하고 있었습니다.

b) この接続形は, これによって表される動作あるいは状態が他の動作あるいは状態の理由であることを示す. この意味は補足的な語尾 -서を接尾することによって強調され得る.

개가 짖어서 밖에 내다 본다.

어머니께서 감기가 들어서 누워 계실 때의 일이었습니다.

김진규는 자기의 말이 자기로서도 우수워서 껄껄 웃는다.

c) この接続形は, これによって表された動作が他の動作をそれを伴う状況語として特徴づけることを示す. この意味は, すぐ上の意味と同じく, 補足的語

尾 -서が接尾することによってあらわされ得る.

아이를 업어서 재운다.

그릇을 얹어서 말린다.

語尾 -아서 / -어서がしるしであるような接続形は助詞 -야を伴い得るが, これは第2の動作が他でもなく第1の動作の語尾の後ろにのみ行われることを強調する.

어머니가 몇번이나 어서 일어나라고 하셨으나 나는 일어나지를 못하였습니다. 그러다가 학교에 갈 시간이 다 되어서야 일어났습니다.

석점이나 지나서야 잠이 들었다.

語尾가 -아 / -어がしるしであるような接続形は助詞도を伴い得るが, それは接続形によって表された動作 A が動作 B の理由でありながら, 期待に反して, 動作 B ではなく動作 C を引きずっていることを示している. この譲歩的意味は §66 で述べられている.

§57. 同時性の接続形 接続形のしるし -면서. 接尾のしかた: 動詞の第2語幹 (例: 들으면서, 듣다から). テンス接尾辞と結合するが, 普通の形はこれらの接尾辞が付かないものである: 하면서. 意味: この接続形は, これによって表された動作あるいは状態は他の動作あるいは状態と同時であることを示す.

우리는 열심히 일하면서 공부하고 즐겁게 공부하면서 일하고 있습니다.

우리들은 노래를 부르면서 그 뒤를 따라갔습니다.

この接続形は2つの動作の同時性をも示し得る.

비가 퍼붓으면서 해빛이 난다.

語尾 -면서に助詞도を接尾すると, 同時性の接続形の意味に譲歩の補足的ニュアンスがもたらされ, 1つの動作が他の動作と同時に, しかしそれに反して行われることを示す.

일본군대는 좋은 총과 대포를 쓰고 몇배의 군인을 가지면서도 우리 의용군한테는 늘 패를 보았습니다. 우리 의용군은 몇날을 굶고 몇밤을 숲속에서 새우면서도 용감히 싸웠습니다. 갖은 고생을 다 하면서도 군은 결심을 버리지 않고 싸웠습니다.

§58. 述語的接続形 接続形のしるし -니. 動詞の第2語幹に接尾される. テンス接続形と結合する: 하니 (現在), 하였으니 (過去), 하겠으니 (未来). すべての接続形のうちこの接続形はもっとも多く述語性を持っており, このことによってその名づけが説明される. これは連体形¹³²と代名詞이との結合にさかのぼり⁽¹³²⁾, 中世文献では主文の述語となり得た.

これらの接続形によって結合する文の具体的な内容によってそれは 2 つの意味を持つ.

a) 時間的意味

공부가 끝나고 밖에 나가니 운동장에서도 지붕에도 눈이 하얗게 쌓여 습니다.

집에 돌아오니 뜰안에는 여러가지 발자국이 보입니다.

아침 일찍기 일어나서 문을 열어 보니 밤사이에 눈이 내렸다.

これらの例で, -니接続形の後ろに続く文に表された事件は, 語尾 -니を持つ動詞で終わる文に表された事件が起きた後にのみ現われる. このことによって -니 接続形をロシア語に接続詞 '*kogda*' [英 *when*] で訳す可能性が説明される.

b) 理由的意味

개가 짖으니 사람이 오는가 보다.

문이 닫으니 답다.

これらの例で, -니接続形の後ろに続く文に表された事件は, 述語が -니接続形であるような文に表された事件から出てくる. 第 1 の部分は第 2 の部分に対して理由あるいは根拠として現われる (ドアを開ける理由により暑い; 犬が吠えるという根拠により誰かが来ることを結論付ける等々). このことにより -니 接続形をロシア語に接続詞 '*potomu chto*', '*ibo*', '*tak kak*' [英 *because*] で訳す可能性が説明される. しかしこれらの文は理由の接続形を持っていないから, 理由文と名づけられ得ない. それらが理由文に属するというのはロシア語の *«Pechalen ja: so mnoju druga net»* <わたくしは悲しい. わたくしには一緒に友人がいない. > のタイプの文あるいは *«V'jutsja veselo dymki: vsjudu topjat pechki»* <煙が陽気に巻き上がる. いたるところでペチカを炊いている. > のタイプの文が *«Nasha mama otpravljaetsja v polet, potomu chto nasha mama nazyvaetsja pilot»* <わたしたちのママが飛行に出発したのは, 私達のママがパイロットと呼ばれていたからだ. > のタイプの文に属するというようなものである. 同じ理由によって, 述語が述語的接続形で表されるような文は, 上に述べたように, ロシア語でそのような訳を許容するとしても, 時間的と呼んではならないのである. ロシア語においてこれらの文と等価的なものは無接続詞複文 (上に述べた部分を含むそのような基本的な意味を持った) であろう.

§59. 瞬間性の接続形 接続形のしるし -자. 第 1 語幹に接尾する. 例: 받자, 받다から. 「I ~ゼロ」グループの動詞には第 1 語幹完全形が用いられる. 第 1 語幹短形の使用は帰順ではない (ただし補助動詞말다からは普通마자). テンス接尾辞は結合しない. この接続形のテンスは相対的であり, 先行を意味しない. この接続形は, この接続形によって表された動作が終わった後に他の動

作がただちに起きることを示す。それは第 1 の動作の最初の局面が終わったに過ぎないのにその後にも起こり得る。1 つの動作が他の動作に変わる特に瞬間的な性格を強調する必要があるのなら、語尾字は補助動詞말다の後ろにも 2 次的に繰り返される: 마자. 例: 말자마자. 瞬間性の接続形は意味的にはロシア語の付加文における接続詞 ‘edva’, ‘edva tol’ko’, ‘kak tol’ko’, ‘chut’’, ‘lish’’, ‘lish’ tol’ko’, ‘stoit tol’ko’ (最後のものは不定詞とともに) [英 as soon as] 及び主文における接続詞 ‘kak’ と等価的である。

시계가 여섯 점을 치자 막이 열렸습니다。

인민군대는 도시의 광장에 이르자 쉬기를 시작하였습니다。

태민은 점순이를 보자 곧 방공호에서 기어났다。

의회 선거가 끝나자마자 부르조아 정당을 지도하는 정치가들은 그들의 약속을 즉시로 그리고 완전히 잊어 버리는 것이다。

§60. 中断された動作の接続形 接続形のしるし—語尾다가. 第 1 語幹に接尾する: 놀다가, 놀다から. テンス接尾辞と結合し得る: 하다가, 하였다가, 하겠다가. ただし現在テンスは相対的過去の意味をも持つ。この接続形は、これによって表された動作が他の動作あるいは事件（これは普通は第 1 の動作の流れを中断している）によって取り替えられることを示す。この接続形のこのニュアンスは普通は主文の頭でロシア語の ‘kak vdrug’ によって伝達される。ただし一連の場合にこのニュアンスはこの方法では不可能である。

이날 식전에 동수형제는 창애를 놓려 갔다가 의의에 산돼지 떼를 발견하였다。

한참 자다가 깨어 본즉 구렁속의 모자가 하나도 남지 않고 다 없어졌습니다。

この接続形によって結び付けられた 2 つの動作が互いに対立しているならば (例: 登る—下る, 来る—行く, 入る—出る等), この接続形の基本的意味は交替的ニュアンスを獲得し, 1 つの動作の他の動作への交替を表す。この場合接続形の短形が用いられる: -다가ではなく -다. このほかに 2 つの交替する動作からなる単語結合全体は補助動詞하다によって締めくくられる。

물에 뗏다 잠겼다 하였다。

젓먹이의 랑쪽 겨드랑이를 두 손으로 올렸다 내렸다 하였다。

勿論同じ接続形が短形 (-다) で第 2 の単語가다を持つ以下のような単語結合の語幹にある。

a) 過去テンス (パーフェクト的意味を持つ) の後ろの接続形:

섰다 가다

안갔다 가다

누었다⁽¹¹⁴⁾ 가다

왔다 가다

このグループの単語結合において第1の動詞が語尾 -다の前にテンス接尾辞を持つのは、この動詞が限界動詞だからである：서다 'vstat' <立ち上がる> (→stoja't' <立っている>), 앉다 'sadi't'sja' <坐る> (→sidi't' <坐っている>), 눕다 'lozhit'sja' <横になる> (→lezhat' <横になっている>). テンス接尾辞がここで意味するのは過去の動作ではなく、動詞の語根によって表された動作が終わった結果として生じた新しい状態を表すためなのであれう：섰다 (stoja't' <立っている>), 앉았다 (sidi't' <坐っている>), 누었다⁽¹¹⁴⁾ (lezhat' <横になっている>). 語尾 -다は、次の動作への移行が動作の結果として起きた状態から起きていることを示す. すなわち立っている, そしてこの状態から他の動作「行く」に移行する; 坐っている, そしてこの状態から他の動作「行く」に移行する等々.

b) 現在テンスの後ろの接続形:

쉬다 가다

놀다 가다

자다 가다等

このグループの単語結合で第1の動詞がそれ自身の前に過去テンス接尾辞を持ち得ないのは、それが限界動詞ではないから、すなわちそれ自体の性質からしてこの動作から論理的に出て来る何らかの新しい状態への移行を想定しないからである. また過去テンス接尾辞はこの場合先行する動作から論理的に出て来るまさにその新しい状態を意味するのである.

§61. 結果の接続形 接続形のしるし—語尾 -도록. 第1語幹に接尾する: 받도록, 받다から. テンス接尾辞とは結合しない. 接続形⁽¹³³⁾のテンス—相対的未来 (§40 参照). この接続形は, これに続く動作が a) この接続形によって表された他の動作が行われる以前に, b) この接続形によって表された他の動作の形で結果が起こる以前に経過することを示す.

곽마위는 어제 또 밤 새도록 주신 집 베풀아를 찌었다.

그는 석점이나 지나서야 잠이 들어 아침 아홉시가 되도록 잤다.

다시는 늦어지지 않도록 합시다.

§62. 目的の接続形 接続詞のしるし—語尾 -리あるいは方言で -라. 第2語幹に接尾する: 맞으리, 動詞맞다から. テンス接尾辞と結合する. この接続形のテンスは相対的未来である (§40 参照). 語尾 -려と混同してはならない. この接続形は, これによって表された動作が移動の動詞 (来る, 行く, 出る等)

によって表される他の動作の目的を表すことを示す. ここから朝鮮語では目的の接続形と結合する可能性を文法的特徴とする移動の動詞という特殊なグループが取り出されることになる.

어머니, 문창이를 제리고 얼을 지치러 갔다와도 좋겠습니까?
바닷가에는 돌아오는 배를 맞으러 사람들이 많이 나왔다.

§63. 理由の接続形 この概念のもとには, 基本的な意味が, 基本動詞の表す動作が他の動作の理由(何故?)あるいは根拠(何の根拠で?)であることを示すものであるような一連の接続形が統合される. 補足的なテンス的意味に応じて, これらの接続形は本来の理由の接続形と理由=時間的接続形に分かれる.

A. 本来の理由の接続形

a) 語尾 -거늘. 接尾のしかた: 第1語幹. 古い標準語では *i* あるいは *l* 語幹の後ろでは -거늘の代わりに -어늘が用いられた. 語尾はテンス接尾辞と結合する.

증거가 확장하거늘 어찌 바로 말을 아니하느냐?

b) 語尾 -건대. 接尾のしかた: 第1語幹. 古い標準語では *i* あるいは *l* 語幹の後ろでは -건대의代わりに -언대가用いられた. 語尾はテンス接尾辞と結合する.

등건대 금강산은 조선의 명산입니다.

上の例から, -건대가理由ではなく根拠を表すのは明らかである.

c) 語尾 -거니. 接尾のしかた: 第1語幹. 古い標準語では *i* あるいは *l* 語幹の後ろでは -거니の代わりに -어니が用いられた.

この語尾の中に *ni* があることはこれを叙述的接続形に近づける. このことによって一連の場合に理由の意味が弱まり, テンス的ニュアンスがあることが説明される.

두메에서 마을에서

삼천리 조국에 불바다 이루었거니

이 위대한 햇불의 진행앞에

두더지 같이 밭쥐 같이 숨는 자는 그 누구들이며 ...

d) 語尾 -ㄴ지라あるいは -는지라. 接合のしかた: -ㄴ지라는第2語幹に, -는지라는第1語幹に. 語尾 *-nira* はテンス接尾辞と結合しない. 語尾 *-nynira* はテンス接尾辞とは結合する(하는지라, 하였는지라, 하겠는지라).

모두 다 고요한 침묵에 잠겼었다. 밤을 못 자고 새운지라 많은 병사와 장교들이 천막과 엄폐부에서 잠들었던 것이다.

벌서 봄철인지라 진달래가 피었구려.

B. 理由=時間的接続 a) 語尾 -니까. 接尾のしかた: 第2語幹. テンス接尾辞

と結合する.

1) 理由, 根拠

어머니께서 「아니다. 그리 쓰지 않다」고 대답하시니까 문찬이는 「그러한 그렇게 조금씩 잡수시지 말고 한번에 더 많이 잡수십시오. 그리하면 빨리 나오시겠지요」 하셨습니다.

2) 時間

이 두사람은 같이 길을 떠났습니다. 어떤 쓸쓸한 들길을 지나라니까 수많은 작은 사람들이 밝고 밝은 달빛 아래서 재미나는 음악 소리에 맞추어 춤을 추었습니다.

[注] 1. 主文の述語が敬礼法あるいは勧誘法の形を持つならば, -니까は不可能である: 날이 저무니 어서 가자 (저무니까ではない).

2. -니까の代わりに -니건, -니깐드르も見える.

3. -니까に近い接続形 -니は, 理由の意味を持つてはいるが, 理由の接続形ではない.

b) 語尾 -때. 接尾のしかた: 第2 語幹. テンス接尾辞と結合する. 理由の意味のほかに時間的意味を持ちえる.

일행이 오르기를 마치매 배는 저쪽 기슭을 바라보고 나아간다.

그이가 입학하였다는 말을 들으며 기뻐하였습니다.

c) 語尾 -ㄴ즉. 接尾のしかた: 第2 語幹. テンス接尾辞と結合する.

1) 理由, 根拠

이것은 다하였은즉 그 다음 것 시작하다.

2) 時間

아버지는 왼쪽을 가리키며 「저것이 북조선인민위원회」 하고 말씀하시므로 바라본즉 커다란 사층 집이 바로 눈앞에 뵈었습니다.

普通はこの語尾は過去テンス接尾辞の後ろでは理由の意味を獲得する. それ以外の場合には普通は語尾は時間的意味を持つ.

上に列挙した語尾はすべて語源的には接続形とはなんらの共通点も持たない. それらの一部は体言形と格語尾との結合であり (-때=体言形 -ㅁ+古与格 -에), 一部は連体形と格語尾との結合⁽¹³²⁾ (-거늘=テンス接尾辞 -거+連体形 -ㄴ+対格 -을), 一部は連体形と補助的な単語及び助詞との結合 (-ㄴ즉, -ㄴ지라, -는지라) は連体形 -ㄴ, -는と補助的な単語즉, 지라からなる; -건대, -거니は接尾辞 -거, 連体形 -ㄴと補助的な単語 이⁽¹³²⁾, 대からなる).

§64. 条件の接続形 この概念のもとには, 基本的な意味が, この接続形によって表された動作が他の動作の可能性を条件付けることを示すものであるような一連の接続形が統合される. かくしてここで問題となるのは条件付ける動作

と条件付けられる動作である。現実との関係に応じて条件の接続形は2つのタイプ、すなわち非現実的条件の接続形と本来の（あるいは現実的）条件の接続形に分かれる。

非現実的条件の接続形は、現実には存在しない、あるいは存在しなかったような条件付ける動作を示す。このことにより、そのような動作から、可能性として出て来る条件付けられた動作もまた現実には存在しない、あるいは存在しなかった。条件付けられた動作は、接続形の示すほかの条件（これまた実際に存在しなかった）に際して現実にはありえないだろうような（そして実際にあり得なかった）ことを示す。これらの接続形の語尾は時にはロシア語の接続詞 «если» [英 if], «когда» [英 when]（条件法の小詞 «by» を持つ）⁽¹³⁴⁾で、時にはロシア語の命令法単数第2人称（bud' on ...）⁽¹³⁴⁾に対応する。

この意味は次のように表される。

a) 語尾 -면。時に第2語幹に接尾し（하면, 먹으면），時に終止形語尾に接尾する。この場合用いられる終止形語尾は2つだけである：-다（中立=直説法）と -더라 / -드라（目撃法）。両者の場合にテンス接尾辞（現在及び未来）が可能である。

하면	한다면
하였으면	하였다면
	하더라면
	하였더라면

非現実的条件の意味をこの接続形が持つのは、条件付けられた動作を（主文に）表す動詞の一定の構造が存在する時だけである。この構造の本質は、蓋然性あるいは可能性の法の語尾あるいは接尾辞、あるいはそれらに類する表現を用いることにある。そのような接尾辞あるいは語尾は -리, -겠-, -ㄴ (連体形) である。-ㄴの後ろには普通は補助名詞것と繫辞이다が続く。かくして条件付けられた動作を表す動詞は次の形を取る。

하겠다
 할 것이다
 하리라 (리は終止形語尾), 過去テンスでは:
 하였겠다
 하였을 것이다

条件付けられた動作のテンスは条件付ける動作のテンスと呼応する。過去テンスは過去に起きた事件が話題となる場合に用いられ、現在テンスは普通はどのテンスにも起きる事件が話題となる場合に用いられる。

条件付けられた動作を表す動詞におけるあらゆる -ㄴは、接続形によって表された条件付ける動作が非現実的な性格を持つことのしるしとして働く。その

ようなしるしとなるのは蓋然性あるいは可能性を示すような -ㄷ의みである。
-ㄷがこの意味を持たず、純粹に形式的に用いられるならば（例えば、どんな状況語においても語尾 -ㄷを持つ動詞を要求する助詞뿐の前）、接続形の非現実的な意味は問題とならない。

만일 여기에 다른 배우가 있어서 사오년간이나 침묵을 지킨다면 누구나다 그를 잊을 것이다。

만일 문산에 비행장이 있다면 비행기로 한시간반이면 갈 수 있다。

[注] 否定の構造では同じ意味は없다の副詞形と取り立ての助詞는によって表される：없이는。

이 조선이 없이는 그들은 단선을 실시하려는 생각조차 못하였을 것임니다。

b) 語尾 -던들. 第1語幹に接尾する. テンス接尾辞と結合する (하던들, 하였던들, 하겠던들)。

그 때가 마침 저녁녁이 있으니 말이지 킁킁한 밤이던들 어찌 될 번했소。

나는 공부만 부지런히 했던들 오늘에 이 창피스러운 락제를 했을 리가 있나?

現實的(本来の)条件の接続形は条件付けられた動作との次の2つの基本的關係を持つ条件付ける動作を示す。

a) 總括的：1つの動作が常に、いかなる条件にもかかわらず他の動作が實現する条件となる。

b) 具體的：1つの動作が与えられた具體的条件において他の動作が實現する条件となる。

これらの意味は次のように表される。

1) 語尾 -면. 第2語幹に接尾する, 稀に終止形 -다に接尾する (한다면)。

학교에 늦어지지 않으려면 밤에 일찍 자고 아침에 일찍 일어나야 합니다。

오늘 밤에 또 눈이 오면 이 여러가지 발자국은 묻여지고 래일 아침에는 새로운 발자국들이 나타날 것이다。

-면が動詞하다で ‘dopuskat’ <假定する>の意味で用いられることに注意を向けなければならない。そのような意味をこの動詞は他の先行する終止形の動詞あるいは形容詞との結合においてのみ獲得する。

만일 잉섭이 여기 없다면 어디 있으랴?

上述の構造とは「未来テンス連体形 -ㄷ+補助名詞것+形容詞같다」という構造は原則的に何も異なるところがない -ㄷ것 같으면. この構造には同じ語尾 -면がある。

누구든지 칭찬을 받을 것 같으면 좋아한다。

条件の接続形 -면はしばしばロシア語の接続詞 «kogda» [英 when] で訳される。

따뜻한 봄이 오면 눈밭을 갈아 씨를 뿌립니다. **Kogda nastupaet (teplaja) vesna, krest'jane, vozdelav polja, zasevajut ix.**

매년 서중이면 석왕사에로 갑니다。

ここで問題となっているのが時間ではなく条件の «kogda» [英 when] であることを見て取る必要がある。すなわち農民は春の到来という条件において仕事を始めるのである、等々。

2) 語尾 -거든. 第1語幹に接尾する。テンス接尾辞と結合する。

리잉섭동무가 오시거든 드리랍데다。

3) 語尾 -르진대 / -르진덴. 第2語幹に接尾する。未来接尾辞とは結合しない。

실상 그럴진덴 말할 게 무어 있겠는가!

무슨 일을 하고저 할진대 진실할 것이오。

[注] 条件の接続形 -면は第2要素の恒常性という特徴を持つ堅い単語結合 **ustojchivye slovosochetaniya** に入り込む。

a) 接続形 -면と動詞되다の結合。この結合は当為性を表すのに用いられる。
말하듯 쓰면 된다。

b) 接続形면と形容詞좋다 (未来テンス) との結合。この結合は許可を表すのに用いられる。

공원으로 가면 좋겠습니까?

오늘 비가 오면 좋겠소。

§65. 反意的接続形 これらの接続形は2つの動作の間の対立, 対比を表すのに用いられる。

a) 語尾 -지마는あるいはその短形 -지만.

接合のしかた: 第1語幹。テンス接尾辞と結合する。

사발에 뜬 물은 아무빛도 없이 보이지마는 깊은 강이나 바닷물이 퍼렇게 보인다。

소가 생기기를 문하다하지만 대단히 기운이 썩니다。

一連の場合に対比は意味上現実的=讓歩的關係に近づく (§66 参照)。

그는 시들서 좋다는 약은 다 해 봤지만 고치지 못합니다。

b) 語尾 -건마는あるいはその短形 -건만. 古い標準語では *i* と *l* 語幹の後ろで語尾の頭音 *k* が落ちる: -언마는 / -언만.

接尾のしかた: 第1語幹。テンス接尾辞と結合する。

이것이 분명한 모순이언마는 그는 그 줄을 모른다。

영국에서는 «oo»가 «u»에 가깝게 발음되건만, 화란 같은 나라에서는 «o»의 장음으로 낸다.

c) 語尾 -되. 接尾のしかた: 第1語幹. -되가過去テンスと未来テンスの接尾辞の後ろに続くならば, これらの接尾辞は第2語幹の形を取る (받았으되). 形容詞있다及び없다は第1語幹も第2語幹も許す. この語尾はテンス接尾辞と結合する.

글이 없이 말은 있을 수 있으되, 말 없이 글은 있을 수 없다.

d) 語尾 -거니와. 古い標準語では *i* と *l* 語幹の後ろで語尾の頭音 *k* が落ちる: -어니와. 接尾のしかた: 第1語幹. テンス接尾辞と結合する.

그는 불란서인이어니와 그의 영문으로 쓴 작품을 불란서 문학이라고 할 사람은 없을 것이다.

e) 語尾 -나及びその等価物 -나마. 接尾のしかた: 第2語幹. テンス接尾辞と結合する.

인쇄소는 게서 멀지 않았으나 점순은 곧 바로 그리로 들어갈 맘이 없었다.

아직도 언덕위에는 바람이 불어서 추우나 언덕밑 잔디밭에는 햇볕이 내려 쬘어서 따뜻합니다.

語尾 -나는現實的=讓歩的關係を表すのに著しくしばしば用いられる.

f) 語尾 -려니와及び -런마는 /-런만は語尾 -거니와及び -건마는 /-건만の特殊な変種である. それらは反意的關係に不確實性という補足的なニュアンスをもたらす. 未来テンス接尾辞とは結合しない.

그걸 들었으면 오런마는 아직 모르나 보오.

§66. 讓歩的接続形 讓歩的接続形は条件の接続形の部分的で非成城の場合である. 条件の接続形と讓歩的接続形の違いは, 前者が他の動作が行われることを促進する条件を示し, 後者が促進させない条件を示すことにある.

2つの讓歩的接続形の基本的タイプ, 2つの讓歩的關係の基本的タイプ, すなわち現實的=讓歩的關係と条件的=讓歩的關係が區別される. 前者の場合現實的に存在する動作 (急いだが, 遅れた), 後者の場合假定される, 可能な動作 (殺されても, 言わない) が問題となる.

接続形によって表された妨害する動作が何度も繰り返される (時間において, 空間におびて繰り返される) にもかかわらず, 動作が實現されるならば, そのように何度も繰り返された動作は總括的=讓歩的意味 (どんなに努力しても, 何も出てこなかった) を持つ. このニュアンスは接続形の特別な形ではなく特別な副詞によってもたらされる.

現實的=讓歩的關係は次のように表される.

- a) 語尾 -나. 第2語幹に接尾する. テンス接尾辞と結合する.

먹었으나 배는 아직도 부르지 않았다.

아무리 짚음박질을 쳤으나 시간은 벌써 늦었습니다.

一般化はここでは副詞아무리によって達成される. 一般化は動作様式に向けられている («kak ni» <いかに...しようとも>).

- b) 語尾 -ㄴ지언정. 第2語幹に接尾する. 未来テンス接尾辞とは結合しない.

선 밥일지언정 먹지 않을 수 없었다.

- c) 語尾 -ㄴ망정. 第2語幹に接尾する. 未来テンス接尾辞とは結合しない.

그는 비록 공부는 못했을망정 나라없는 설움과 압박과 착취 받은 인민의 고초를 누구보다도 아는 사람이었습니다.

条件的=讓歩的關係は次のように表される.

- a) 語尾 -더라도 (音聲的變種: -드라도, -드래도). 第1語幹に接尾する. テンス接尾辞と結合する.

산이 무너지더라도 나는 못하겠다.

조선사람이 썼더라도 조선말이 아니면 조선 문학이 아니라고 생각합니다.

あるいは總括=讓歩的ニュアンスを持つ.

아무리 쫓아가더라도 인제는 할 수 없다.

- b) 語尾 -ㄴ지라도. 第2語幹に接尾する. 未来テンス接尾辞とは結合しない.

아무리 곤란일지라도 우리가 단결하면 성공할 수 있을 것이다.

- c) 語尾 -ㄴ들은連体形 -ㄴと補助的な單語들에さかのぼる. 第2語幹に接尾する. 未来テンス接尾辞とは結合しない. 主文に修辭的疑問がある場合に,しばしば用いられる.

그걸 즉금 심근들 살겠느냐?

누웠은들⁽¹¹⁴⁾ 잠이 오랴?

2つのタイプの讓歩的關係の提示された區別にもかかわらず,それらの間には大きな違いはなく,第1のタイプの接統形は一連の場合に第2のタイプの接尾辞の機能を果たし得るし,その逆もしかりである. この場合いゝはコンテキスト,そして,明らかに,主文の述語の構造における若干の特殊性によって規定される. しかしこの問題は今まで幾分かでも満足のいくようには研究されていない.

上に挙げた接統形の語尾のほかに,讓歩的接統形に備わっている機能は,先行の接統形が助詞도によって補足的に作られる場合に,先行の接統形が果す.

우리가 아무리 빠른 기차를 타고 달아나도 달은 도무지 지나가지 않고 언제나 차창으로 우리를 들여다 봅니다.

§67. 比較的接続形 接続形のしるしー -듯. 接尾のしかた: 第1語幹.
말하듯 쓰면 된다.

§68. 動作様式の接続形 接続形のしるしー -게. 接尾のしかた: 第1語幹.
テンス接尾辞とは結合しない.

이것은 전부 철판으로 싸고 물이 안으로 들어가지 못하게 만든 견도한
것입니다.

그 수레는 세놈이 넉넉히 끌 수 있게 가벼운 것입니다.

[注] この接続形は「体言形기의主格形+形容詞마쁘다の動作様式の接続形」という特殊な表現で他の動作によって急速に中断された動作を表すのに用いられる.

우리들은 선생님 말씀이 끝나기가 바쁘게 텅텅텅텅 개구리처럼 물속에
뛰어들어갔습니다.

§69. 分離的接続形 接続形のしるしー -거니, -든지, -나. 語尾 -거나と -든지は第1語幹に, -나는第2語幹に接尾する. 分離的接続形は最小限2つの動作の存在を想定している. この2つの動作のうち第2のものが第1のものの否定であるならば, その代わりに代動詞 *mestoimennyj glagol* 말다 (任意の否定動詞の代わりとなる) が用いられる.

첫째 선량한 사람이며 남이 알아 주거나말거나 진심으로 일에 충실한
사람이다.

먼 곳에 계신 할아버지께 급한 일이 있으면 전보를 치거나 전화를 겁니다.

가든지 말든지 어서 말하여라.

나는 가나 마나 무방합니다.

上に挙げた例のうち -거나と -든지は接続形を作る語尾として機能する. しかしこれらの形態素は分離の助詞としても機能し得る. この場合それらは終止形の後ろに接尾し, 接続形を作らない.

그것은 결코 다른 나라를 빼앗겠다든지 약한 나라를 치기 위하여 만든
것이 아닙니다.

표음주의 철자법은 표음 문자이면 곧 표음주의를 채택하여야 한다거나
표음 문자이면 곧 모든 음을 표시할 수 있다는 소박한 신앙에 근거하고
있다.

§70. 多回的=分離的接続形 2つの動作が何度も交替することを表す. 表現の
しかた—語尾 -락. この語尾は第2語幹に接尾する. テンス接尾辞とは結合し

ない。述語的機能は持たず、それゆえ -락によって作られる 2 つの動詞からなる単語結合は補助動詞하다で締めくくられるが、하다は位置的及び非位置的範疇のすべての接尾辞と語尾を取る。오르락 내리락 하다; 오락가락 하다.

§71. 意図(欲求)の接続形 感表現のしかた -고자 /-고저. 接尾の方法: 第1語幹. テンス接尾辞とは結合しない.

오늘 사월 이십오일까지 식수사업을 끝마치고자 더욱 분바하고 있다.

後続の動詞하다との結合で願望法の分析的な形を作る.

입학하고자 한다.

体言形

体言形(不定形)は朝鮮語の動詞の曲用する形である。体言形は位置的範疇である。朝鮮語には 2 つの基本的な体言形、すなわち第1体言形と第2体言形、それに 1 つの不十分な体言形があり、最後のものの特殊性は曲用の完全なパラダイグマの欠如にある。

第1体言形は語尾 -로を動詞の第2語幹に接尾させることによって作られる。例: 動詞만다から-받음 (現在テンス), 받았음 (過去テンス), 받겠음 (未来テンス)。この体言形のもっともよく用いられる格 (後置詞なしの, そして後置詞付きの): 함 (은) 語幹格, 함이主格, 함을対格, 함으로具格, 함으로써具格+かつての後置詞, 함으로 인하여具格+後置詞, 함에 있어서与格+後置詞, 함에도 불구하고与格+後置詞。この体言形+古い与格には理由野接続形の語尾 -때が遡る。これらの格の機能は「統辞論」のしかるべき章で述べられる。

多くの場合, 第1体言形は名詞に変わり, 動詞のすべての性質を失う: 꿈, 춤等。語源的には多分사람もここに属し, 動詞살다の体言形だったろう。

第2体言形は語尾 -기를第1語幹に接尾させることによって作られる。例: 動詞만다から받기 (現在テンス), 받았기 (過去テンス), 받겠기 (未来テンス)。

この体言形のもっともよく用いられる格: 하기 (는) 語幹格, 하기가主格, 하기를対格, 하기에与格, 하기로具格。このほかにこの体言形はいくつかの後置詞と結合して用いられるが, この後置詞は複文では接続詞の機能を獲得する: 하기전에, 하기 때문에, 하기 위하여等。これらの格と後置詞の機能は「統辞論」のしかるべき章で述べられる。

第2体言形の分析的な形における用法の次のような場合を指摘する必要がある。

a) 動詞시작하다とともに。始発性の範疇を表すために。

이집 저집에서 불을 끄기 시작합니다。

b) 形容詞쉽다, 어렵다, 곤난하다, 힘들다, 싫다等とともに。

기제도 쉬지 않고 돌리기만 하면 성하기 쉽습니다.
그런 문제는 한말로 대답하기가 곤란합니다.
그렇지 않으면 차는 서로 마주치기 쉽고 사람은 길을 어기기가 힘들다.
듣기 싫다.

形容詞の前の体言形の動詞には名詞の語尾がつき得る.

c) 動詞하다とともに, 動詞하다の前の体言形は体言形と動詞 *hada* の間に助詞 -는, 만, 도が「接中辞的に挿入される」場合にのみ可能である. ほかの方法ではこれらの助詞を動詞に接尾させてはならない. 動詞は必ずこの分析的な形, すなわち「体言形+하다」という形を取らなければならない.

우리들도 ... 물을 길어오기도 하고 풀을 뽑기도 하며 도외도와 드립니다.

우리는 맛있는 음식을 집기는 하나 한번도 먹어 본 적은 없습니다.

하다がしるしである動詞では体言語尾は語根하と溶け合って1音節기となる.

그 문제를 해결키 곤란할 것이다.

第2 体言形はほとんど体言化することはない⁽¹³⁵⁾.

第3 体言形, すなわち不十分な体言形は語尾 -지を第1 語幹に接尾させることによって作られる. 例: 動詞받다から받지. 体言形はテンス接尾辞とは結合せず⁽¹³⁶⁾, 2 つの格: すなわち語幹格 (しばしば助詞 -는を持つ) 及び対格しか持たない⁽¹³⁷⁾. 不十分な体言形は否定形を作るのに用いられる.

ホロドーヴィチ, 『朝鮮語文法概要』原著者注

- 1 『조선어문법 (朝鮮語文法)』, 평양 (平壤), 1949⁽⁶⁾.
- 2 G. Ramstedt, *Grammatika korejskogo jazyka*, IL, 1951 (G・ラムステット, 『朝鮮語文法』, 文学出版所, 1951) ⁽⁷⁾.
- 3 立体字⁽¹²⁾は基本的な変種を示す.
- 4 語幹格と名づけられるのは, この形が名詞の語幹 (語根) と一致するからである.
- 5 101 から 199 までは<百>は일백 [一百] ⁽⁹⁴⁾.
- 6 1001 から 1999 までは<千>は일천 [一千] ⁽⁹⁴⁾.
- 7 톨마기 *turumagi*—朝鮮人の外套.
- 8 G. Ramstedt, *Grammatika korejskogo jazyka*, IL, 1951, str. 85.

ホロドーヴィチ, 『朝鮮語文法概要』訳者注

- (1) 現在のサンクト・ペテルブルク国立大学。
- (2) アレクサンドル・アレクセーイェヴィチ・ホロドーヴィチ **Aleksandr Alekseevich Xolodovich (1906-1977)**. はじめは日本語研究者, 後にレニングラード国立大学で朝鮮フィロロジーク講座の設立に尽力した. 後に科学アカデミー・レニングラード支部言語学研究所でタイポロジーク研究を主導する.
- (3) レフ・ヴラジミロヴィチ・シチェルバ **Lev Vladimirovich Shcherba (1880-1944)**. ロシアの著名な音声学者. 科学アカデミー会員.
- (4) レフ・ラファイーロヴィチ・ジンデル **Lev Rafailovich Zinder (1903-1995)**. ドイツ語学者. 音声学者. **M・V・マトゥセーヴィチ Matusevich** とともに 1990年代にモスクヴァ音韻論学派 (レフォルマツキー **Reformatskij** 代表) と論争を繰り広げたレニングラード音韻論学派の代表者.
- (5) 現サンクト・ペテルブルク国立大学東洋学部朝鮮言語・文学センター.
- (6) この本は金科奉の六字母による正書法で印刷された唯一のものである. ホロドーヴィチはこの正書法に批判を加えている. 金科奉の失脚はあくまでも政治的理由によるものであって, ホロドーヴィチの批判はそれとは関係ないものと思われる. 韓国では数年前この本のコピーが専門家の間で出回ったが, 印刷はされなかった模様である.
- (7) **G. J. Ramstedt, "A Korean Grammar", Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura, 199 pp., 1939.**
- (8) スターリンの『マルクス主義と言語学の諸問題』. 一連の動きの後に基本的にマル派が一掃された. なおホロドーヴィチもレニングラードの多くの東洋学者とともにマル派だった.
- (9) ロシアの伝統的な言語学ではいわゆる音声学や音韻論を「音声学」と概括する.
- (10) 音素は基本的な音声と変種からなる. この点で **allophone** (異音) の概念とは異なる.
- (11) 音声学の術語はすべてロシアの伝統による.
- (12) 原文では大文字.
- (13) 原文では硬音.
- (14) 原文では軟音.
- (15) ここでいう北方方言とは事実上平安道方言のようである.
- (16) ホロドーヴィチによる朝鮮語の時代区分がはっきりしないが, これは李朝語のうち中期朝鮮語あるいは中世韓国語のことであろう.
- (17) 一般に中期朝鮮語から現代朝鮮語への音韻の変遷には次のような図式が成り立つと思われる.

中期朝鮮語	現代朝鮮語平安道方言	現代朝鮮語ソウル方言
tj	t	č
c	c	č
cj (=č)	cj (=č)	č
sj (=š)	sj (=š)	s
nj (語頭)	nj	Ø

平安道方言では tj は口蓋化しなかった。スの音価は中期朝鮮語で [tɕ] だったと思われる。したがってスの音価は平安道とソウルで異なることになった。nj は平安道で常に変化を蒙らなかった。結果として平安道方言は古い様相を保っていると言える。

(18) ロシアの伝統では形態論は単語を、統辞論は文を扱う分科である。したがって形態論は単語の形態的側面だけでなく、単語の文法範疇等意味的側面も扱う。

(19) ロシアの伝統では単語は文法論と語彙論の単位であり、言語の最小の単位である。

(20) 맞았다という形はなさそうである (마쳤다のみ)。すなわち本来用言語根の末音 -i- の省略された形は第 1 語基しかなさそうである。미쳤다 (しかし 맞았다는はなし) ; 가졌다 (しかし 갖았다는はなし)。

(21) ここでは lb~l が言及されていない (北朝鮮の標準語で lb~p だけとしている可能性がある)。韓国では恐らく lb~p は 맞다 1 語基だけ (動詞)、残りの形容詞はすべて lb~l のタイプである。

(22) このタイプはこれ 1 単語だけと思われる。

(23) ほかに 앓다 がある。

(24) いわゆる入変格用言の場合である。

(25) いわゆる ㄷ 変格用言である。これは本来 ㄷ 語幹用言であり、例えば 이르 (다) <至る> の場合、第 1 語基 / 第 2 語基 이르- / 이르-, 第 3 語基 이르어- が変容したものである。

(26) <注ぐ> も。

(27) 記述が錯綜するのはまさにこれらの交替の成立の歴史的複雑さによる。しかし記述を次のようにさらに簡略化し得る。ここで 1-3 は子音語幹用言, 5 は母音語幹用言, 4 は ㄷ 語幹用言とすることが出来る。子音の前の変種を第 1 語基, 母音 y の前の変種を第 2 語基, 母音 a / o の前の変種を第 3 語基とするならば, ㄷ 語幹用言と母音語幹用言では第 1 語基と第 2 語基が同じ形と捉え得る (すなわち第 2 語基で母音 y がない)。さらに ㄷ 語幹用言の第 1 語基 / 第 2 語基では語幹末子音 ㄷ が n, s, p, r (いわゆる未来連体形), 母音の前で脱落する (ㄷ 語幹用言でのみ子音語幹用言と母音語幹用言とは異なる音の規則がある)。したがって

歴史的交替は、ㄷ語幹用言の場合を除き、母音の前での子音の交替である（すなわち子音語幹用言の場合は第1語基及び第2語基 / 第3語基の間で、母音語幹用言では第1語基 / 第2語基及び第3語基の間で）。なお著者はいわゆるㄱ変格用言の場合に触れていない⁽²⁸⁾。

(28) ついでながら正書法で삶다, 앓다, 활다の語尾 -따を -다と書くのも外見の（正書法的）交替と似ているが、違いは語根の部分になんらの子音字も加えていない点である。これについては著者は§9で扱っている。

(29) 用言語根の場合と異なり名詞語根の第1変種は、ソウル方言の場合、単語によりさまざまな様相を呈し、一般的にはそれが第2変種にますます統合される傾向にある。낮은 *nas-yn* [話し言葉] <昼は>, ただし낮에 *nadž-e* <昼に>; 깊은 *kaps-yn* ~ *kab-yn*; 높은 *hyg-yn* [話し言葉], *hylg-yn* [書き言葉]。

(30) ホロドーヴィチはまさに音声的交替と歴史的交替の区別及び正書法の関係の一般的な法則性の点から、両者を混同する北朝鮮の1948年の文法を批判したのである。

(31) 朝鮮語は他のアルタイ系諸言語と同じく本来接頭辞がなく、自立語が接頭辞化した可能性がある。

(32) 単数 / 複数がヨーロッパ諸語で単語変化（屈折）に属するとはいえ、朝鮮語で単語形成（造語）に属する可能性を排除し得ない。

(33) いわゆる連体詞のことであろう。

(34) 새はかなりの名詞の前に立ち得、連体詞としての새もあると思われる。ただしこの場合連体詞と接頭辞の差が曖昧である。외には連体詞としての用法はないものと思われる。

(35) 외も새も本来名詞だっただろう。새로参照。

(36) ホロドーヴィチはそれをあくまでも形容詞と見ようとするようである。ロシア語文法において不変化の形容詞をたてることを参照（ ）。

(37) これは明らかに本来用言외-<不正だ>の連体形だが、올は不明である。

(38) 普通はこれらを連体詞に所属せしめる。

(39) この接頭辞は現在알と書かれる。朝鮮語の正書法では交替を起こさない音節末子音 ㄷ を入と書く。ところでこの入 ㄷ は起源的にはいわゆる“사이 入”に由来するものがあることを排除し得ない。

(40) 알- は本来動詞語根알-<何う>に由来する。朝鮮語ではこのように用言語根が用言語根あるいは名詞語根と直接結合することがある。

(41) 모든は本来모-<集まる>の連体形。

(42) 우습다は南北朝鮮で標準語形として採用されていない。

(43) 너머は動詞넘다の第3語基形に由来する可能性がある。

(44) そうはいっても動詞接尾語と形容詞接尾語、動詞接尾辞と形容詞接尾辞

とを厳密に区別することは事実上困難である。前者と後者の違いは子音で始まるものと母音で始まるものという程度しかない。

(45) ホロドーヴィチが連体詞を認めないとしても, -적 [的] は繫辞を取り得る点で名詞の一種であることは確かだから, この認定は誤りと言うべきである。

(46) この単語は南北朝鮮の正書法で블그속하다と書かれる。

(47) 勿論間接的には「人称」と関係はあるが, 直接的には人称ではなく, 「尊敬」であると言うべきである。

(48) 現代朝鮮語にはまれに「謙譲」の接尾辞が一番最後に用いられ得る。잡히셨삽고 [語根+受身+尊敬+過去+謙譲] <お捕まりになりました>。

(49) しかしながらここに例として挙げられた -들と似たものとして -만もある。そうであってみれば, これらはいわゆる副助詞と同じものとして扱ってよい。

(50) 原文では分詞(形動詞)形あるいは規定語形。

(51) 原文では副動詞形あるいは主として状況語形。

(52) いわゆる動名詞形に相当する。菅野は体言形と呼ぶ。

(53) 本来名詞につく助詞は -ㄴ /-은, -ㄹ /-을 (前者は母音語根に, 後者は子音語根に接尾する) のように, 으は接合母音だった。-ㄴ + -은は -느を作り, -ㄹ + -을は -를作ったので, -느と -를は延長形である。

(54) これは本来唇音+*ǎ*, 唇音+*y* だったが, 母音 *ǎ* と *y* が唇音の影響を受けて円唇化を起し, それぞれ *o* と *u* となったものである。

(55) 本来 *ǎ/y+m* が円唇化を起こして *o/u+m* となったものである。

(56) このタイプの用言(ㄷ語幹)は基本的に母音語幹と同じであり, 初めから接合母音は接尾しない。ただし方言によってはこれを子音語幹並みに扱って알으という形を持つものがある。

(57) *s+ǎ/y* が有声音化を起こして *zǎ/zy* となり, さらに子音が脱落して *ǎ/y*, *y* となったものである。

(58) 歴史的にはこのㅁは存在した, すなわち子音語幹だった(もっとさかのぼればこのㅁは他の子音であった可能性がある)。

(59) 中期朝鮮語には가아という形もあった。

(60) 中期朝鮮語では動詞ㅁ- は本来 **hǎj-* であったと考えられ(ここから第3語基形ㅁㅁ- *hǎj-a-*, 第4語基形ㅁㅁ- *hǎj-o-*が生じた; 第2語基形 **hǎj-ǎ-*は第1語基形と合流し, 末尾の *-j-* を失った; また新たに第4語基形ㅁㅁ- *ho-*が生じた),

(61) 現在北朝鮮の正書法ではㅁㅁ, ㅁㅁであり, 韓国の正書法ではㅁㅁ, ㅁㅁである。

(62) 訳者注 (25) 参照。

(63) 中期朝鮮語にはㅁ- *khy-* のほかにㅁ- *pčǎ-* <織る>のパターンがあり, ㅁ- *khㅁ-*に対応する形はㅁ- *pčǎ-*であり, これは現代語のㅁ- となり, 母音 *a* を持つ

普通の用言に合流した。

(64) (1) 接合母音ゼロには *t, č, k* を頭音とする語尾, 接尾辞が接尾する. (2) 接合母音 *y* には *m, l (r), p* を頭音とする語尾, 接尾辞が接尾する (*p* は本来 *zāp* が *āp* となり, さらに *p* となったもの). (3) *s, n* を頭音とする語尾, 接尾辞は接合母音ゼロに接尾するもの (a) と接合母音 *y* に接尾するもの (b) とがある. ほぼ次のように図表化し得る.

	(3) <i>s</i> を頭音とする語尾	(3) <i>n</i> を頭音とする語尾
(a) 接合母音ゼロ	以下のもの以外	-느, -느-, -니 (終止形), -나 (終止形)
(b) 接合母音 <i>y</i>	-시- (尊敬), -소서	-ㄴ (-느, -느-以外), -니 (接続形), 나 (接続形)

(65) これは韓国では아랫니, 北朝鮮では아래이と書かれるが, 発音は両者とも *arenni* である.

(66) 北朝鮮はこの後アポストロフィを廃した.

(67) この方式が現行の韓国のものである.

(68) 河野六郎氏はこれらをそれぞれ第 1 語基, 第 2 語基, 第 3 語基と呼んでいる.

(69) 事実上李朝語, すなわち中期朝鮮語のことである.

(70) 菅野はこのようなものを分離用言と呼ぶ.

(71) 品詞 *chasti rechi* (英 *parts of speech*) に対して *chasticy rechi* (敢て英訳すれば *particles of speech*) をとりあえず小品詞と訳した.

(72) 原文 *chastica* (英 *particle*). 「助詞」と訳す.

(73) しかしこの単語は南北朝鮮の辞書にない.

(74) 南北朝鮮ともに標準語形は답다である.

(75) ただし中期朝鮮語では・신 [名詞], :신 [動詞]; ・ㅅ [名詞], ㅅ [動詞] のようにアクセントが異なるから, 厳密にはこうであるか疑わしい.

(76) これは 2 項的語根複合と見るべきだろう (§ 11 参照).

(77) 南北朝鮮ともに正書法では노질, 노である.

(78) しかしこれはかつての *-gadži* という形が今でも保たれていると考えればよい.

(79) こういう形はなさそうである. ㄱㅅ.

(80) ロシア語に対応する意味からのアプローチは適当ではなく, この場合朝鮮語としてより正確には「多義語の中の意味の違い」とするべきだろう.

(81) 原文では「代詞」*mestoimenie*, 「代名詞」*mestoimennoe sushchestvitel'noe*.

(82) 北朝鮮では本来の名詞を「完全名詞」, 補助名詞を「不完全名詞」と呼び, 補助名詞を韓国では「依存名詞」, 日本では「形式名詞」と呼ぶ.

(83) 「助数詞」. 原文では *schetnyj suffiks-klassifikator* (計算接尾辞=分類詞). なお朝鮮語の助数詞は, 日本語の助数詞とは異なり, 接尾辞とはいえず, 南北朝鮮では一種の補助名詞として扱う.

(84) -한데は -한데서, -한데로, -한데를という形を持ち得るが, -더러はこれ1つである.

(85) しかしながら旨は両者とも同じものであり, 単語ではなく接尾辞あるいは助詞というべきである.

(86) 제 [諸] は接頭辞だが, 각 [各] は, 次に来る語幹から発音上独立するので, 連体詞である可能性があり, 事実南北朝鮮の学者の多くもそう見るようである.

(87) 原名は *imenitel'nyj padezh* (名格).

(88) これは接尾辞というべきものであって, 格語尾ではない. これの後ろに各種の格語尾が接尾し得る.

(89) 호로ドーヴィチは比較格というものを立てていながら, -처럼を格として取り立てていない. 意味から出発せず, あくまでも形態論的観点から出発するならば, -처럼は같이とは異なり格扱いするしかあるまい. また -까지も格として認める必要があるものと思われる.

(90) 語幹格と辞書形とを区別する見解は問題である. ヨーロッパ諸語においても例えば名詞の辞書形はいわゆる主格形 (名格形) であろう.

(91) -과 / -와を格語尾と接続詞のように機能に応じて異なる形態素とすることは問題である. 名詞と-과 / -와との結合の形態論的特徴にはなんらの違いも見いだせないから, 両者を同音異義的なものよりも, 両者は同じ語尾 (あるいは助詞) の内部でのことなる項, すなわち多義的なものの異なる項と見るべきである.

(92) 같이もまた機能に従って副詞と後置詞のように同音異義的なものと見るよりも, 同じ多義的な単語 (副詞あるいは後置詞) の異なる項と見るべきだろう.

(93) 合成格とそうでないものとの違いを朝鮮語で認定することはまず不可能である.

(94) 韓国ではいかなる場合でも一桁台は백 [百], 천 [千], 만 [万] という.

(95) 現在南北朝鮮の正書法でこれは셋째, 넷째と書かれる.

(96) 셋は多くの名詞に付くことが出来, 従って接頭辞と連体詞の区分の曖昧な形態素である.

(97) 南北朝鮮の辞書には두셋 (規定語形두세) という形が見える.

(98) 南北朝鮮の辞書には예닐곱という形が見える.

しかし말두마리 <馬 2 匹>は말 두마리あるいは말 두 마리と分節される.

(99) 南北朝鮮の辞書にはこの形は見られない.

(100) 南北朝鮮の辞書には너더댓という形が見える.

(101) しかし現在南北朝鮮で -의による概数の方が多い.

(102) 한사람<一人>, 두발<二足>の場合, 사람も발も名詞であると同時に助数詞であると見るべきである. いわば個数詞は必ず助数詞の前に置かれると見るべきなのである.

(103) しかしこのような「接尾辞」と「助数詞」とを形態論的に区別することは事実上不可能である.

(104) <二日>, <三日>, <四日>は「数詞+할」という構成だっただろうと思われる. 이틀<二日>は「인+할」からなり, 「인」は<二>を意味した. 이태<2年><인+해参照.

(105) これは現在南北朝鮮で낮추다(接尾辞추)と書かれる.

(106) 성이 나다 / 성나다の 패턴の動詞を菅野は「分離用言」と呼ぶ.

(107) 原文では「終結述語性の範疇」 *kategorija nekonečnoj skazuemosti*.

(108) 南北朝鮮ともに -뜨리다が標準語形である.

(109) これは他動詞であると思われる.

(110) これらの動詞は事実上 -되다形しかないものと思われる.

(111) 되다, 당하다, 받다는受身の形成に関与すると思われるが, それらのダブる, ダブらないの状況, 意味的差異等々研究が非常に遅れている. 韓国では당하다, 받다는, 되다と異なり, 直前の要素と続け書きさせないことが多い. 되다가自動詞(非転移動詞), 당하다, 받다가他動詞(転移動詞)であることをも参照せよ.

(112) しかし韓国ではそうだが, 北朝鮮ではそれは表される.

(113) 実際には話し言葉では받았다の方が頻繁に用いられる.

(114) 南北朝鮮ともに누웠다고書かれる. すなわち第2語幹は누워.

(115) 韓国では졌다, 北朝鮮では졌다あるいは지었다고書かれる.

(116) -겠- についてはホロドーヴィチの卓見が見える. 参考までに菅野の修正案を示す. 1人称→話し手, 2人称→聞き手, 3人称→第3者. 聞き手はさらに疑問形と叙述形に分かれる.

話し手	聞き手		第3者
叙述形	疑問形	叙述形	叙述形, 疑問形
意思		蓋然性	

ホロドーヴィチの「未来」は菅野の「意思」に対応する. 래일 비가 오겠다. は「蓋然性」であって, 「未来」ではない. 敢て言えば, 「意思」も「蓋然性」も現在の話しの瞬間に発せられるムードの1種である. 「蓋然性」は「過去」に関してもあり得る. ホロドーヴィチの「不確実性」も「蓋然性」と言ってよい.

なお「蓋然性」は話し手に関してもあり得るようである。「意思」と「蓋然性」が同音異義形（すなわち異なる形態素）か、多義形の異なる意味かという問題に関しては菅野は後者に傾いている。

(117) このような「先行」や「同時」をマ스로フ Maslov は「タクシス *taksis*」と名づけている。

(118) この類をマ스로フは動作様式 *sposob dejstvija* の範疇と呼んでいる。

(119) しかしながらこの -ㄹ- は単なる意思を表していると言うべきである。

(120) 文法的な形を作る単位としての連体形とても次の形態素の結合は普通は存在しないと思われる。-았-/ㄴ-았-/ㄴ-, -ㄹ-+/-ㄴ-, -ㄹ-+/-ㄴ-.

(121) この部分はロシア語からの厳密な訳ではない。

(122) ホロドーヴィチはあたかも総合的な形の範疇としてのアスペクトと分析的な形の範疇としての動作様式を区別しているかのようだが、マ스로フにあっては、文法範疇としてのアスペクトと語彙範疇としての動作様式という分けだから、この場合の動作様式はマ스로フのアスペクトに該当するものと思われる。

(123) 対をなす文のうち前者は直説法、後者はモーダルな単語が挿入されている。

(124) ‘*tol'ko*’ は英 *only* に対応する単語だが、助詞야にそのような意味は想定し得ないと思われる。

(125) しかし朝鮮語ではこれらは同音異義語ではないと思われる。

(126) これらは助詞ではなく副詞とすべきだろう。

(127) 공부-하다や장가-들다のタイプの用言を菅野は「分離用言（分離動詞）」と呼ぶ。

(128) しかし사는 것이 아니다は살지 않다とともに動詞살다の否定形としか言いようがない。例えば내가 아니라<わたしではなく>（主語，補語の否定），내게가 아니라<わたしにではなく>（補語の否定），학교에서가 아니라<学校でなく>（状況語の否定）などを想定すべきであろう。

(129) ロシア語の ‘*kushat*’ は日本の敬語の「丁寧」に近く，目上，目下の動作にかかわらず，＜食う＞ではない，＜食べる＞を意味する丁寧語のようである。

(130) *pochivat'* も *skonchat'sja* も本来雅語のようだが，事実上「尊敬」，「丁寧」の機能をも有するようである。

(131) ここで「丁寧な」，「丁寧さ」と訳したものはそれぞれロシア語の‘*vezhlivij*’，‘*vezhlivost*’に当たるが，日本語の敬語に関する文法用語「尊敬」，「謙譲」，「丁寧」のうちの第3のものだけでなく「尊敬」や「謙譲」をも指すものと思われる。

(132) 河野六郎説では「連体形＋主格助詞」。河野六郎によれば、古代朝鮮語では連体形が **gerund** 的であった可能性がある (**-go-n-yl** をも参照)。

(133) 原文では **prichastija** (連体形の)。恐らく **deeprichastija** (接続形の) の誤りであろう。

(134) これらはいわゆる仮定文をなす。

(135) しかし特に「体言＋第2体言形」はかなり造語力がある。

(136) しかしながら받았지 (過去テンス) が存在する。

(137) しかしながら主格も存在する。